
バンチョウ！

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バンチヨウ！

【Nコード】

N9271C

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

この物語の主人公、高倉ケン太はごく普通の十五才の高校一年生。ところがひょんなことで”伝説のバンチヨウ”と思われ、身につけた”伝説のガ克蘭”をめぐる不良たちにつけねられる羽目にケン太は本当の”伝説のバンチヨウ”になれるのか？

ケン太（前書き）

「スケバン」の世界観とは関係ありません。もともとpc98の”rpgツクール”で造ったゲームのノベライズとして書いています。いずれ、ブログなどでゲームを公開したいと思っていますが……。

ケン太

ぱちりと目を覚ました高倉ケン太はうん、とベッドの中で身体をのばした。

天井を見上げると、朝の光が机のつややかな板に反射してほんのり明るい。

ちりりり……。

目覚ましが鳴り出した。

ケン太は手を伸ばし、目覚ましのベルを止めた。時刻を見ると午前六時半。ケン太はいままで目覚ましで起こされたことはない。いつも目覚ましのなる前に目覚めるから、本当は必要ないのだが、習慣になっているので夜寝る前にはかならず目覚ましをセットする。

起き上がるとじぶんの部屋の壁からぶらさがっている、ハンガーにかけられている高校の制服を見つめた。

いまだき珍しい、詰襟の学生服である。

今日からケン太は高校生なのだ。

赤星高校。

それが今日からかよう、ケン太の高校だ。

どんな高校なんだろう。

ケン太の想像はふくらんだ。

じつを言うと、ケン太は今日の今日までその赤星高校というところへ足を運んだことはない。

両親がすべて手続きをして、入学試験は中学校ですませた。簡単なテストで、ほぼ無試験といってよかった。だから実際に高校に行くのは今日が初めてだ。

それまで着ていたパジャマを脱ぎ、学生服に着替える。

制服は新しく、まだ着慣れていないからちよつとごわごわする。それがまた新鮮な気分で、嬉しい。

机の上には今日から使うことになる教科書がきちんと背を並べて

揃えられている。

もつとも今日は入学式だけなので、教科書を持っていく必要はなく、明日から正式な授業が始まる予定である。

ケン太の部屋は二階にある。

部屋を出て、階段をとんとんとリズムよく降り、一階のキッチンへ向かう。

「おはよう」

キッチンには父親のブン太と母親の純子が卓袱台をかこんでケン太を待っていた。

キッチンとはいえ、洋間の一部に畳を敷き便宜的に和室にしている。そこに卓袱台と水屋をおいているのだ。

ケン太の挨拶に、新聞を読んでいたブン太が顔をあげた。

「おお、さつそく制服を着てきたか！ 似合うぞケン太！」

そう言う顔をはころばせた。

ブン太はがっしりとした身体つきで、頭は角刈りにしてねじり鉢巻をしている。身につけているのは大工の法被と、どんぶり腹巻というまるで「天才バカボン」のパパみたいな格好である。だが、これでも建設会社の社長なのだ。

「なあ、母さん。似合だろ？」

同意を求められた母親の純子は細面の顔をうなずかせ、にっこりと笑みを浮かべた。

母親のほうは和服を身につけ、しろい割烹着をつけている。

「本当に……。まるでお父さんの若いころみたいですよ」

「さあさあ、飯だ！ 腹が減っては戦ができぬ、というじゃないか」
ばさばさと音を立て、ブン太は新聞をたたみ背を伸ばした。

母親の純子がてきばきと朝食の用意をする。

ご飯に納豆、焼き魚、そして漬物と豆腐の味噌汁。

ケン太はきちんと正座して朝食を食べた。

食べ終わるとご馳走様と言って、自分の分の食器を持って立ち上がる。そして洗う。自分のことは自分です、というのが高倉家の

家訓である。

そのケン太にブン太が声をかけた。

「おい、ケン太。昨日も言ったが、入学式にはお前だけで行くんだぞ。おれたちのはついて行かないからそのつもりでな」

「うん」

「世間では親が入学式についていくみたいだが、この家では違う。お前ももう十五才。昔で言えば元服の年だ。いつまでおれたちに甘えてばかりじゃられないだろ。判るな」

「うん、大丈夫だよ。ぼく、ひとりで行けるから心配しないで」

ケン太の答えにブン太はちよつと涙ぐんだみだいだった。母親の純子はふと袖で目頭をおさえ、顔をそむけた。

「それじゃ行つてこい！」

「行つてきます！」

ブン太は怒つたような顔でケン太を見送った。

玄関でケン太は靴をはき、ドアを開いた。

ひろびろとした庭がひろがる。

庭にはあおおとした芝生が敷きつめられ、正門まで敷石の道がつづいている。

ケン太の住むのは高級住宅街で、その敷地はかるく百坪をこえる。土地代だけで億、という金額になろうかという豪邸である。

父親の高倉ブン太は若くして建設業界にはいり、独立して高倉建設を創業した。

事業はとんとん拍子で発展し、ケン太の生まれる前にはすでに業界で十の指にはいる規模の会社に成長していた。

俗な言葉で言うところケン太はお坊ちゃまということになる。

が、ケン太は自分がお坊ちゃまであるという自覚はない。いままで通った中学は公立だし、お小遣いだってほかの同級生とおなじかすくないくらいだ。贅沢な暮らしなどしたことない。なにしろ父親のブン太はいまだに自宅から会社へ電車通勤をしているし、自家用車もないのだ。その暮らしは中小企業のサラリーマンとおなじよう

なものである。

そのことに疑問を感じたことはなかった。

なにしろおなじような社長や金持ちの友達というものを持ったことがなかったし、比較することもなかったからだ。

ケン太は軽い足取りで正門を出た。

両親に繰り返し教えられたとおり赤星高校へ向かう道を歩く。

どん！

いきなりぶつかった相手がいた。

「わ！」

思わず声をあげてしまった。

「気をつけな！」

しゃがれた押し殺した声にケン太はぎくりとなった。

ぶつかった相手を見る。

髪の毛を真っ赤に染め、ちりちりパーマにしている小柄な男子生徒だ。

詰襟をわざと開き、だばっとひろがり裾で急に縮まったズボンを穿いている。あとでそれがボンタンとよばれるズボンであることをケン太は知る。

顔はまるで野球のホームベースのような形をしている。えらがつて、目はちいさくその両目がケン太をねめつけていた。

「おめえ……その高倉って家から出てきただろう。おれ、見ていたんだぜ」

相手は肩をそびやかし、じろりとケン太の足もとから頭のとつぺんまで視線を送った。

「は、はい……」

口ごもるケン太に相手はにやりと笑いかけた。好意のかけらもない、悪意だけの笑いというのがあるのをケン太はいま知った。

「おれは千石高校で番を張っているケイスケってもんだ。以後、よろしくな」

ケイスケ、という相手の言うことはよく判らなかった。”番を張

る”とはどういうことだろう。ぼんやりとしていたケン太に、ケイスケはいらだったような声で話しかけた。

「おい！ 人にぶつかつたいてそのままってことはないだろう？ それにおれが自己紹介したつてのに、なんにも言わねえのか」
はつとケン太は我に返った。

「あ、ご、ご免なさい……ぼく、ケン太っていいいます」
「それだけか？」

ずい、とケイスケは身を乗り出した。

ケン太は身を反らせた。

なにしろケイスケというやつ、身体からやすっぱいコロンの香りを漂わせ、さらになにか大蒜の料理を食べてきたばかりなのか、ひどい匂いがするのだ。

「治療費がいるな。な、そう思うだろ」

「え、治療費……ですか？」

思いがけない相手の言葉にケン太は目を白黒させた。

「そうさ。お前がぶつかつたからな。もしかしたら、おれの肩が骨折しているかもしれないじゃないか。もしそうなら、入院だ。だから治療費。当然だろ？」

ケン太はものも言えなかった。

ちよつとぶつかつただけで骨折？

そんな馬鹿な！

「おい、ちよつと飛んでみな」

ケイスケはささやいた。

「え？」

「飛んでみるって言うてんだ！ そこでぴょんぴょん跳ねるんだよ！」

言われたとおりケン太はその場で飛び上がって見せた。

ケイスケはがっかりしたような顔になった。

「ちえ、金持つてないのか」

どうやらケン太に飛び跳ねさせ、ポケットで硬貨が触れ合う音を

聞きたかったようだ。

「ま、いいや。どうせお前の家は金持ちだろ？ いまから家へ帰って、金をもってこい。なに、家に帰れば金庫とか、あるんだろ？ なにしるこんな高級住宅街にあるんだからなあ」

ケン太は驚いた。

どうしてそんなことしなくてはならないのか、判らなかった。

立ちすくむケン太に、ケイスケは拳を握り締めて見せた。

「痛い想いをしたくなかったら、さっさと行け！」

「は、はいっ！」

思わずケン太は家を目指して走り出した。

心臓はどきどきしていた。

人生初めてのカツアゲにあったのだ。

そろりと玄関のドアを開け、靴脱ぎ場を確認する。

母親の草履と、父親の白木の下駄がきちんとならんでいる。まだ

両親は家にいるようだ。

金、金……。

ケイスケの示唆した金庫は家にはない。

しかしキッチンの水屋にはいつも金がおいてあった。こまかな買い物をするさい、母親の純子や父親のブン太が必要なぶんを使つたのである。

水屋の引き出しを開くと、こころおぼえの場所に数枚の一万円札があった。

それを手にする。

と、いきなり母親の純子の悲鳴のような声がした。

「ケン太！ なにをしているのっ！」

その声にケン太はびくりと飛び上がった。

札束を握りしめたままふり返る。

母親が真っ青な顔で立ちすくんでいた。

彼女の視線はケン太の顔と、ケン太の握っている一万円札を往復

した。

「どうした？」

そこへ父親のブン太もやってきた。

母親の顔色と、ケン太の表情を見てすべて察したようだった。

「金か…… どうしてそんな金が必要なんだ。言ってみろ」

ケン太はぼつりぼつり話し出した。

家を出たとたん、ケイスケに会ったこと、そしてカツアゲを受けたこと。

すべてを語った後、ブン太はふーんと唸って腕を組んだ。

母親は肩を落としていた。

「ちよつとこい」

父親のブン太はそう言うのと、ケン太をじぶんの部屋へ連れて行った。母親の純子もその後に行く。

六畳の和室。そつけない、といっている飾り気のない部屋にはわずかな家具があるだけで建設会社の社長とは思えない質素な調度である。

「そこに座れ」

正座するケン太の目の前に父親のブン太と、母親の純子がそろって正座した。

しばらく沈黙が続いた。

「なあ、母さん。こんなことになるとは、おれたちケン太の教育を間違ったかもしれないな」

母親は黙って頷いた。

「カツアゲされて、そのまま金を渡すために家をあさるなんて、男の風上にもおけねえ。なあ、そう思うだろ？」

ふたたび母親は黙って頷く。

父親の口調が微妙に変わったのをケン太は気づいた。いままで父親のこんな口調は聞いたことはなかった。なんだかあのケイスケの喋り方にちよつと似ている。

ブン太は立ち上がると、和室の桐箆笥の前に立ち、引き出しを開

けた。

なにか衣類を取り出し、ケン太の前にひるげる。

真っ赤な色彩が目飛び込む。

そして金色の刺繍。

”男”の文字が金色で刺繍されている真っ赤な学生服とそろいのズボン。いや、ガ克蘭だ。

ぼう然とするケン太にブン太は話しかけた。

「これを着ろ」

そう言っただけの学生服を脱がせ、あたらしい真っ赤なガ克蘭を着せ掛ける。

「後は髪型ですね」

母親の純子が口を開いた。

ブン太は頷いた。

「お前、頼む。こいつにぴったりの髪型にしてやってくれ」

はい、と頷き純子はケン太の腕をとり風呂場へ連れて行った。

そこへ座らせると、純子は口を開いた。

「目を閉じていなさい」

ケン太が目を閉じると、なにかフーン、とする匂いのする液体が頭にふりかけられた。

純子の手がなにか動いている。

髪の毛が梳かされ、ドライヤーの音がブーンと唸っている。

やがて純子の声がした。

「はい、もういいわ。目を開けて」

目を開けると鏡があった。

そのむこうの自分の髪型を見て、ケン太はびっくりした。
金髪。

ケン太の髪は金髪になっていた。

しかもその髪型はリーゼントになっている。

母親を見あげると、純子はにっこりとほほ笑んだ。

「とても似合うわ。お父さんの若いころみたい」

「ええっ！」

金髪リーゼント、そして真っ赤なガクランを着たケン太をふたたび自室に連れ、父親は説明した。

「これはおれが若いころ着ていた伝説のガクランだ。これでもおれはお前の年頃には伝説のバンチョウウって呼ばれていてな」

そう言うのとブン太は照れたような顔を見せた。

「そうよ、お父さん。とっても喧嘩が強くてかっこよかったのよ」

「よせよ」

両親はケン太の目の前でいちやついて見せた。ケン太の視線に気づき、ブン太はおほんと咳払いした。

「とにかく、おれはカツアゲなんてものには負けなかったぞ。お前も男だ。そのガクランを着ていれば、そこらのヤンキーなんかには負けるもんじゃねえ！ 行ってこい！ そしてそのケイスケって三下と勝負しろ！ お前なら出来る！」

「そうよ、ケン太なら負けないわ！」

純子も同意した。

ケン太はあっけにとられた。

正門から出てくるケン太にケイスケが声をかけた。

「よお、遅かったな。金は出来たのか……」

途中で言葉がつまる。

ケン太の格好にケイスケは目を剥いた。

「な、なんだその格好は……確かお前さっきの……」

思わず逃げ腰になるケイスケの態度に、ケン太のなにかがむくりと目を覚ましたようだった。

こいつ……見かけだけのツツパリなんだ。

どういつわけかそんなことが瞬間的に悟っていた。

ケイスケを無視してそのまま歩き出す。

「お、お前、金はどうした？」

「ないよ」

短く答えるケン太に、ケイスケは怒りの表情を見せた。

「そうか、そういう態度に出るってのか。へっ、なんでえそんなガ克蘭を着たからって……」

じろじろとケン太の着ているガ克蘭を見る。

と、背中 of ”男” の文字に気づいた。

「そ、その背中の”男”の縫い取り……、ま、まさかそれは伝説のガ克蘭？」

ケイスケの言葉にケン太は驚いた。

そうなのか？ 伝説のガ克蘭と言うのは本当にあるのか？

ケイスケはにやりと笑った。

「そのガ克蘭、お前なんか着るのはもったいねえ。もっと似合う男がいる……。おい、それをよこしな」

そういいながら伸ばしたケイスケの手をケン太はふりはらった。

ケイスケの顔色が変わった。

「野郎……さからおうってのか」

拳が握り締められる。

ふりまわされる拳を、ケン太は手を挙げて受け止めた。

ばしっ、という乾いた音がする。

同時に空いた右拳をケイスケの鳩尾にたたきこむ。

ぐえっ、といううめき声をあげ、ケイスケは身を折り曲げた。

さがったケイスケの顎を、ケン太の膝頭が突き上げる。

わあ、という悲鳴をあげケイスケは吹っ飛んだ。

驚愕の表情になっていた。

「お、お前……ほんとうにさっきのケン太か？」

目はさきほどまでの勢いはなく、すっかり負け犬のそれになっていた。

よろよろと立ち上がり、逃げ腰になる。そのまま駆け出した。遠ざかるケイスケの姿にケン太はあらたな衝動を感じていた。おれは男だ。

おれは男だ！

ふつつつと闘志が湧き上がってきた。

その衝動に、ケン太はいつまでも立ち尽くしていた。

キヨシ

がらりと戸が開く音にキヨシは顔をあげた。

それまで読んでいたマンガをそばに置く。

入ってきたのはケイスケである。

顔色が真っ青になっていた。

「キヨシさん！」

ころがるような態勢でケイスケはキヨシの前に座り込んだ。

「どうしたんだな？ おめえ、怪我してるみたいなんだな」

キヨシはのんびりとした声をあげた。

身長二メートル近く、体重は百キロをこえる巨体である。着ているのは学生服だが、ぼろぼろに着古し、あちこち接ぎがあてである。学生服のボタンはすべて外し、その下から薄汚れたランニングシャツが覗いている。ぼりぼりと首筋をかいで、手近においてある煎餅をかじった。ひとつつまみ、ケイスケに差し出した。

「おめえ、ひとつ食うか？ ん？」

そう言うつとにつと笑った。前歯がほとんど抜け落ちたその顔は、凶悪と言うよりどこか知能の低さを思わせる。

その部屋はひどい有様だった。

壁は煙草のヤニで黒く変色し、床にはカップ麺やらコンビニ弁当の容器が散乱し、食べ残しの食材にはカビが繁殖している。その他、マンガ、スポーツ紙、ヌードばかりのアダルト雑誌が山になり、脱ぎ捨てられた下着が汗臭い匂いを発散させている。

キヨシはその中にソファを持ち込み、一日の大半をテレビをつけたままにしてすごしている。

普通の神経の持ち主だったら、一秒だっていたくないはずだ。

それが証拠に、ケイスケはこの部屋の中にはいるとき決して靴を脱がない。キヨシもそれを見てもなにも言わない。うっかり靴を脱いで上がり込んだら、床に散らばっているカビの生えた食材に足を

突っ込みそうになるからだ。

差し出された煎餅を辞退して、ケイスケは口を開いた。

「た、大変なんですよ、キヨシさん」

「だからなにが大変なんだな？」

「おれ、見たんです。伝説のガ克蘭」

「なにを見たっていうのや？」

「伝説のガ克蘭ですよ！」

「なんだ、そりゃ？」

ケイスケはがつくりとなった。

「キヨシさん、伝説のガ克蘭をご存じないんですか？」

ふるふるとキヨシは首をふった。頬の肉が首を動かすたびたふたふとおよぐ。

「伝説のガ克蘭ってのはね、それを着たものは最強のバンチョウであるって証明されるっていうガ克蘭なんですよ！」

「はあ、そうけえ」

キヨシはまるで関心をしめさず、今度は餡子のたつぷりはいった大福もちに興味をしめした。ひとつつかみ、あんぐりと口を開けはおぼる。もぐもぐと咀嚼し、口の端についた餡子を舐めた。

ケイスケはいらいらして叫んだ。

「ねえ、キヨシさん。あんたこの千石高校の最強のバンチョウでしょう？ もしそいつがほかのバンチョウに渡ったら、どうします」

「どうなるのかや？」

「そいつが最強のバンチョウって言われますよ」

「ほかのやつが最強のバンチョウ？」

じよじよに理解をしてきたらしく、キヨシの首筋が赤く染まった。「そうですよ！ それで平気なんですか？」

むう……とキヨシの顔が赤く染まった。

ようやく怒りが脳にたつしたようだ。

ごくりと大福もちを呑みこみ、ケイスケを見る。

「ケイスケ！」

「はいっ！」

「どうすべえ？」

ふたたびケイスケはがくつとずっこけた。

「しょうがないなあ……とりあえず、お兄さんに相談するってのはどうです？」

「アキラ兄ちゃんに？　おお、そりゃええ考えだわ」

そうだ、そうだと賛意を示しどころしよとかけ声をかけてキヨシは立ち上がった。

にちゃり……キヨシの足が床に落ちていた菓子パンのつつみを踏んづけた。

それに気づき、巨体を折り曲げて拾う。

つつみは破れていないようだ。

「もってえねえ……」

そうつぶやくと、包みを破りパンを頬張った。くちやくちやと噛みながら歩き出す。

「それじゃおら、アキラ兄ちゃんに会いに行くからよ……お前は……」

……

「はい？」

「なんか食い物買って来いや」

ケイスケはずっこけた。

入学式（前書き）

赤星高校は大変なことになっていた！　なんと、ここは不良の溜まり場になっていたのだ。なぜ、こんなことに？　ケン太はこの赤星高校を立て直せるのか？

入学式

ここが赤星高校か……？

ケン太は高校の正門で眉をひそめた。

とても今日が入学式を迎える高校とは思えなかった。

高校の塀は一面に落書きでうまり、校庭にはゴミが散乱している。正門のまわりにはべったりとんこ座りをした男女が、道行く通行人を鋭い視線で眺めている。男女とも学生服を着ているからには高校生だろうが、その学生服は誰一人としてまともなスタイルの者はいない。

数人にいたっては、学生服すがたで煙草をふかしていた。

もっとも学生服についてはケン太はあまりその連中におおきな顔はできない。

金髪リーゼント、真っ赤な学生服の背中には金の縫いとりで”男”の文字が踊っている。

もしかしてここで一番派手な格好をしているのはケン太かもしれない。

ゆつくりと正門に近づいた。

「待ちな」

ひとりの男子生徒がゆらりと立ち上がり、ケン太の行く手をふさいだ。

じろじろとケン太の足もとから頭へと視線を動かしていく。

その男子生徒はひよろりと背が高く、頭の毛は染めていないがケン太とおなじようなリーゼントだった。近づくに安っぽい整髪料のにおいが漂ってくる。

「おめえ、ずいぶん格好いいじゃねえか？　どこの生徒だ？」

「ぼくはこの赤星高校の一年生で高倉ケン太といいます。きょうから入学してきました。どうぞよろしく」

丁寧にあ挨拶すると、相手は眉をひそめた。とはいえ、そいつの眉

は剃っているのかほとんど見えないから眉間に皺がよる程度しか表情は読めない。

ぷーっ、としゃがみこんでいた女子生徒がふきだす。

「ぼくちゃん、一年生なんだ。可愛いねえ！」

そう言うつとげらげらと笑い出した。

身長より横幅がひろそうな、でっぷりと太った女子であつた。頭は真っ赤にそめ、ポニーテールにしている。

最初にケン太に言葉をかけた男子生徒がいらついて叫んだ。

「黙ってるい！ アケミ。おれが話しているんじゃないか」

アケミ、と呼ばれた女はふんと肩をすくめた。

「ふうん、ケン太っていうのか。それでなんの用だ？」

ケン太はあつけにとられた。

「ですから入学しに……」

「そうかい。まあ勝手にしな。しかし、この校門を通りたければ通行料が必要なんだ。料金は……そうだな、いまおめえが持っている有り金全部だ！」

そう言うつとにやりと笑つた。

ケン太はゆつくりと首をふつた。

「そんなものは持っていないせん」

「なにい？」

男子は気色ばんだ。

その気配に、それまで座り込んでいた数人の男子生徒が立ち上がった。

最初の男子生徒は振り返り叫んだ。

「このぼくちゃん、通行料は払えねえそうだってよ！」

ぼきぼきと指の関節をならしながらかれらは近寄ってくる。

最初の男がぐいつ、と近寄つた。

「痛い想いはしたくないだろ？」

ささやきながらケン太の胸倉をつかむ。

こいつもケイスケと同じようなことを言うなあ、とケン太はあき

れていた。

するりと手を挙げると、胸倉を掴む相手の手をひねりあげる。

「いてててて！」

悲鳴をあげた。

思ったより甲高い声だった。

ぐいつ、と力をいれ相手をくるりと廻して、とーんと背中を押す。わっ、わっ、わっ、と両手をぐるぐる振り回し、男子生徒はたたらを踏んで近寄ってくるほかの男子生徒に突っ込んでいく。

わあ、と数人がひとかたまりになってすっころんだ。

ケン太は歩き出した。

奇妙だ……。

ケン太は自分におきた突然な豹変にわれながら呆れていた。中学卒業まで、喧嘩など一度もしたことがないのに、いまでは何のためらいもなく相手を倒すことが出来る。

これもいま着ている伝説のガ克蘭のせいだろうか？

「待て！」

かれらはなんとか立ち上がり、ケン太の背中に声をかけた。

と、その中の一人がつぶやいた。

「伝説のガ克蘭……！」

「なに？」

全員、ケン太の背中に刺繍されている”男”の文字に気づいたようだった。

かれらの顔がまっしろになった。

「てことは、あいつは伝説のバンチョウ……？」

そう言う顔を見合わせた。

ケン太はさっさと校庭へ足を踏み入れた。かれらは何も言わず、見送った。

噂はケン太の歩く速度より校内にひろまったようだった。

ケン太が歩くと、そこらでたむろしている男女の生徒たちはいっ

せいに注目し、ある者は目をそらし、ある者は敵意ある視線を送ってくる。だが思い切ってケン太の行く手をふさごうという相手は現れなかった。

ケン太は校長室をさがしていた。

ここが本当に赤星高校なのか。もしそうなら、この有様はどういうことか尋ねてみたいと思ったからだ。

高校でも中学でも、学校のつくりというのはそう変わるものではない。

教員室を見つけ、中をのぞいてみたがあいにく教員はひとりもない。

校長室の看板は見当たらなかった。

ケン太は手近の生徒に声をかけた。

「ちよつと……」

声をかけたのは小柄で、ぷくぷくと肥満した男子生徒だった。頭はくりくり坊主にして、目は油断なくあたりに気を配っている。どうやらケン太と同じくらいの年頃だ。

ケン太に声をかけられ、かれは揉み手をして近づいた。

「へい、なんでやしょう？」

この相手も妙な言葉使いをするなあ、とケン太はあきれた。しかしまだまともに話せそうだ。

「ええと、校長室を探しているんだけど」

「校長室！」

かれは頓狂な声をあげた。

ぼん、と額をたたきうなずいた。

「はい、校長室ね、判ります。旦那はそこをお探して？」

「ぼく、旦那、なんてよばれる年じゃありません。それにぼくの名は高倉ケン太といいます」

「こいつは失礼をば……つい癖でね。だれでも旦那って言うてしまふんでご簡便を。高倉ケン太さんと仰るんですね。あたしはイッパチと申します。以後、お見知りおきを」

イッパチと名乗った相手は満面の笑みになった。

「ああ、校長室をお探してしたね。ご案内いたしましょう。こちらでげすよ」

腰をかがめ、ひょこひょことした足取りでケン太の先を歩く。

イッパチの向かった先を見てケン太は声をかけた。

「イッパチさん、それじゃ外に出てしまうけど……」

イッパチはくりりと振り向き、ふたたび自分の額をぼん、と叩いた。

「イッパチさん、とは恐れ入りやす。どうか、イッパチ……と呼び捨てに願います。それに校長室は校舎の外にあるんで、こちらでげすよ」

ふたりは校舎の外へ出て、ぐるりと裏側にまわった。

「これが校長室でやんす」

ケン太はぼうぜんとその建物を見上げた。

草がぼうぼうと生い茂っている裏側に、その建物はあった。

もとはなにかの倉庫として使われていたのか、鉄骨がむきだしの簡易住居だった。壁は薄汚れ、屋根のトタンはあちこちサビが浮き出ている。

「本当にこれが？」

「そうでやんすよ。ここが赤星高校の校長室つてわけで。それじゃここで失礼しやす」

ぺこりと頭を下げ、イッパチは背をむけた。

歩き出す寸前、思い出したというようにふり向くと口を開いた。

「ケン太さん。あたしはこの高校で便利屋みたいなことをしているんでげす。まあ他の連中にはそのたび、ちょっぴりお小遣いみたいなもの戴いておりやすが、ケン太の旦那にや特別口ハでサービスいたしやすよ。どうかこれからも、このイッパチをご贔屓に！」

えへへへ、とイッパチは揉み手をしながらあとずさった。

かれが校舎の向こうに見えなくなると、ケン太はほっとため息をついて建物に目をやった。

ドアにうつすらと「校長室」の文字がある。
どうやらここで間違いないようだ。

「失礼します」

そう断り、ドアをノックする。

「どなた？」

ドアを開けた相手を見て、ケン太は首をかしげた。

「あの、ここは校長室ですよね？」

「はい、そうです」

ドアを開けたのはケン太とおなじくらいの年頃の女子生徒であつた。

髪の毛を両側にまとめ、前髪をたらしている。身につけている制服は、ここでケン太が見た中では一番まともだ。セーラー服の上下で、ソックスもきちんとしていた。

「校長に会いたいんですが」

そう言うと、彼女は困ったような表情になった。

「ユミちゃん。どなた？」

おくからユミ、とよばれた女子生徒とそっくりの女の子の声がする。

ユミはふりかえって答えた。

「エミねえちゃん、校長先生にお客さんなの」

ばたばたと足音がして、もうひとりの女子生徒が姿をあらわした。それを見て、ケン太はちよつと驚いた。

ふたりともそっくりだったからだ。

双子だ……。

ケン太はなぜ校長室に女子生徒がいるんだろうと思った。

エミとよばれた女子生徒はすまなそうな顔になった。

「あのう、校長先生はいま……」

エミ……と、おくからか細い声が聞こえた。

こんどは老人の声だった。

「お客さんならお通ししなさい。かまわないから……」

はい、とユミとエミのふたりは声をそろえて返事をした。

「こちらへどうぞ」

中へ入ると想像とはまるで違っていた。

校長室はこんなところだとぼんやりイメージしていたのは、どっしりとしたテーブル、額にかかる歴代校長の肖像、各種のトロフィー、書類をとじたバインダーをいれた戸棚、といったものだったが、ここはまるで時代劇の長屋の中、といった雰囲気だった。

はいったすぐが三土和になっていて、ちいさなかまどがあって火がついている。かまどには鍋がかかり、ぐつぐつとなにかお粥のようなものが煮えていた。

靴を脱ぎ、障子を開くとそこは三畳ほどの和室となっている。

和室には布団がのべられ、ひとりの老人がああむけに寝ていた。

老人はケン太を見てかすかに表情を動かした。

どこからか、かすかに哀しげなメロディーが流れてきた。昭和を思わせる、甘ったるく湿っぽい旋律であった。

ケン太は老人のそばに正座した。

「わたしが赤星高校の校長です……どのようなご用件ですか？」

「ぼく高倉ケン太といいます。今日、入学のため来たんですが、入学式らしきものは見当たらなかったですね。どうしてですか？」

「高倉……ケン太……入学式……？」

校長と自己紹介した老人は、ケン太の言葉にぱくぱくと口を動かし、どんよりと濁った目をあちこちさまよわせた。

なにかを必死に思い出そうとしているようだった。

「校長先生、お粥が煮えました」

その時、あの双子が鍋をかかえ入ってきた。

校長はぐずぐずと鼻をすすりあげ、わびた。

「いつもすまないなあ……わしがこんな体でなかったらお前たちに苦勞はかけないのに……」

双子はかぶりをふった。

「校長先生、それは言わない約束でしょ」

「あのう……入学式のことなんですが」

ケン太はたまらず声をかけた。

校長はきょとんとした表情になった。

音楽がとまった。

「ああ、ああ、入学式ね……もう、そんなことは数年やっていないなあ……」

「どうしてです？ それにこの高校の有様はどうなっているんです？」

校長の顔がくしゃくしゃと歪んだ。

目じりに涙がたまる。

「それを言うてくださるな……。判っているとも、いまの赤星高校は高校とは名ばかり、実態は不良の溜まり場でな……。この双子、ユミとエミだけがわしを世話してくれてなんとか生き恥をさらしている始末ですわい」

くすん、と鍋をかかえていた双子が涙をぬぐった。

ふたたび哀しげなメロディーが流れる。

「この高校がなぜこんな状態になったかというお尋ねでしたな。お話ししましょう。ふたりとも、あれを……」

はい、と返事してエミとユミの双子は立ち上がりどこからか液晶テレビとゲーム機を持ってくる。ゲーム機をテレビに接続し、スイッチを入れた。

ゲーム画面が立ち上がった。

タイトルは「バンチヨウ」とある。

双子はケン太にゲーム機のコントローラーを渡した。

スタートを選択させると、ゲームが始まった。

どうやらシュミレーション・ゲームのようであった。

ゲーム画面にさっきの双子をアニメ化したキャラがあらわれ、ゲームの目的や操作方法を要領よく説明していく。

ゲームはプレイヤーが高校の生徒となり、喧嘩や取り引き、駆け引きを駆使して高校の番長となっていくものだった。

ケン太はすぐにゲームに熱中した。

画面には赤星高校を思わせる高校が舞台で、赤星高校に隣接する地区の高校同士が縄張りをめぐって赤星高校に配下の生徒を送り込み、支配権を確立する様子が示されていた。

赤星高校にはふたつの高校、千石高校と万石高校のふたつの生徒たちがおしよせ、校舎の中で喧嘩をくりひろげる。そのため赤星高校の生徒はつぎつぎと嫌気をさして転校し、高校の中は殺伐としていった。

「お判りですか。この高校は千石高校と万石高校のふたつの高校の番長による縄張り争いに巻き込まれてしまったのです」

ケン太はゲームを切り上げ、校長に向き直った。

「それで生徒は？」

「このエミとユミのふたりだけになりました。ふたりは実を言うとなしの孫でして、それで赤星高校の生徒でいてくれるのです」

ふたりは胸の前で手を握りしめ、目に一杯涙を浮かべケン太に話しかけた。

「お願いですケン太さん。あたしたち、ひとりでも多く赤星高校の生徒を増やしたいんです。どうかほかの高校に行かないで、赤星高校の生徒になってください。いまの高校には本物の赤星高校の生徒はあたしたちしかいないんです」

ケン太はうなずいた。

「もちろんです。今日、ぼくが校長先生をお尋ねしたのも、入学式を執り行つて欲しいからですから」

「おお……！」

校長の顔に赤みがさした。

起き上がるうともがく。それを双子がそつと背後にまわって背中をささえた。

「なんだか元気が出てきましたぞ。それではさっそく入学の手続きを……おい、ふたりとも頼むよ」

はあい、と双子はこんどは明るい声をあげ物入れから新しい生徒

手帳を持ち出した。いままで流れていた物悲しいメロディーはこんどは明るい、テンポの良いもの変わった。

校長は生徒手帳にケン太の名前を書き込むため、万年筆を胸のポケットから取り出した。

「ええと高倉ケン太さん、と仰いましたな……はて高倉、高倉……どこかで聞いたような……それにあなたのその学生服……見覚えがあるような……。おおそうだ、高倉ブン太という名前に聞き覚えはありませんか？」

「ぼくの父です」

校長は仰天した。

「なんですと！　そうでしたか。やはりブン太の……あの子にはずいぶん助けられました。かれがうちの生徒だったころ、やはり同じようなことがありましてな、そのとき立ち上がって高校を救ってくれたのが高倉ブン太くんでした。かれはそのときの活躍で、伝説のバンチョウと呼ばれるようになったのです」

こんどはケン太が驚く番だった。

そうか、父親がこの高校で。それで進学するときあれほどこの赤星高校へ入学しろと言ったのか。

双子はデジタル・カメラでケン太の顔を撮影し、それをパソコンにとりこみプリンターで生徒手帳に顔写真を印刷した。

あらたな生徒手帳をもらい、ケン太は立ち上がった。

三土和で靴をはくケン太に双子は話しかけた。

「ケン太さん。あたしたち、この赤星高校が元通りになるならなんでもします。なにかあたしたちにしてもらいたいことがあったら、なんでも仰ってください！」

ケン太はうなずき、ドアを開け外へ出た。

校舎を見上げ、ため息をついた。

どうすればこの高校を立て直すことができるんだろう。

千石高校……。

ふとその名前が浮かんだ。

ケイスケとかいうやつが、自分は千石高校で番を張っている、と
か言っただな。

アキラ（前書き）

キヨシの兄、アキラは千石高校を支配する番長である。伝説のガクランの存在を知ったアキラであるが……。

アキラ

千石高校の校長室で、アキラは壁に貼られた町の地図に見入っていた。

町のさまざまな箇所には青いピンと赤いピンでしるしがつけられている。青いピンは千石高校の影響下にある番長やスケバンをあらわし、赤いピンが万石高校の影響下の番長や、スケバンである。

ピンの数はほぼ同数で、それぞれの高校の近くにもっとも同じ色が集中している。だが配置はすこし差があり、万石高校のピンが一箇所に固まる傾向があるのにたいし、千石高校のピンは万石高校を外から覆うような配置になっている。

その地図の真ん中に位置しているのが赤星高校だ。

「赤星高校を制するもの、すべてを制す」

アキラはそうつぶやいた。

真っ白な軍服に似た学生服。ボタンが外に見えないネイビー・タupesのものである。

細面のやや酷薄な印象をあたえる顔。髪型は五分刈りにして、それがますます旧海軍の士官のような印象を与えている。

「タツヲのやつ……いつか勝負してやる！」

そうつぶやくとアキラの額に怒りの血管がういた。爆発しそうな感情を必死に抑えているといった感じだ。

がちやり、とドアが開きアキラはふり向いた。

入ってきたのはキヨシとケイスケである。

ちら、とアキラの顔に嫌悪に似た表情が浮かんだ。が、すぐそれを押し殺しマホガニーのテーブルの向こうにまわり椅子にこしかけた。

細い指を組み合わせ、じっとふたりを見つめた。

一言も口をきかないまま、そのまま数十秒がすぎた。

やがて沈黙に耐えかね、ケイスケがべらべらと喋りだした。

「あ……あの、大変なんです！ おれ、伝説のガ克蘭を見たいです！」

「伝説のガ克蘭？」

アキラはつぶやいた。ちょっと小首をかしげ、ケイスケに続けるよううながす。ケイスケはここぞとばかりに身を乗り出した。

「そうなんすよ！ かつて伝説の番長が着ていたというガ克蘭が、いま現れたんですよ！」

ケイスケは興奮し、唾をとばした。

アキラは少しばかり眉間に皺をよせ、かすかに顎をひいた。はっとケイスケは身を引いた。

アキラに会うときは、かれのこの僅かなシグナルを読み取らなければならぬので、じつに気疲れする。

「それは本物なのか？」

「本物に違いないですよ、背中に金の縫いとりで”男”ってでかか」とありましてね、色は血のような真紅！」

「ふむ、それで着ていたのはなんてやつだ？」

「ええと、たしか高倉ケン太とかいったっけ……」

「なにつ、高倉？ 本当に高倉と言う苗字なのか？」

ケイスケはいきなりのアキラの興奮ぶりにびっくりした。

「へ、へい……高倉って家から出てきたし、本人も高倉ケン太って言っていました」

「そうか……ご苦労」

アキラはふたたび氷のような冷静さを取り戻した。

きつ、とキヨシを見る。

「キヨシ！ ここでもものを食べるんじゃないと何度言ったら判るんだ」

ケイスケの横で、ポケットからバナナを取り出し頬張っていたキヨシはあわてて皮を投げ棄てた。アキラに睨まれ、たちまち真っ赤になってうなだれる。

アキラはやさしくキヨシに話しかけた。

「なあ、キヨシ。お前もこの千石高校の番長なんだ。おれに恥をかせるな。頼むよ」

「う……うん。御免、兄ちゃん」

そう言うのと照れたように首筋をぼりぼりと搔いた。首筋のところから、ふけがぱらぱらと飛び散り、床に落ちていく。

アキラの眉間にふかい皺が刻まれる。それを見て、あわててキヨシは搔くのをやめた。

アキラはケイスケを見た。

「ケイスケ、キヨシに風呂に入るよう言いつけておいた筈だな。いつたい何日、入っていないんだ？」

「す、すいやせん〜！」

ケイスケは青ざめ、震えだした。

アキラの清潔好きはいまにはじまったことではない。それが証拠に、いまいる校長室にはゴミひとつ、塵ひとつ落ちてはいなかった。すくなくとも二人が入ってくる前は。

「もういい、あとのことはおれが処理する。もう帰れ」

すっかり恐縮して、ふたりは室内を後にした。キヨシの後に続くとするケイスケに、アキラが声をかける。

「さて、ケイスケ。その高倉ケン太というやつ、どんなやつか徹底的に調査しろ。いいか、おれが徹底的といったら、どんなことが判るな？」

「も……もちろんで……！」

そっぴいながらあとずさる。

と、ケイスケの足がキヨシの投げ棄てたバナナを踏んだ。すってーん！ と、ケイスケは派手にすっころんだ。

あ、すいません、すいませんと連発して、ケイスケはあわててバナナの皮をひろい、部屋を後にする。

アキラはまるで表情を変えなかった。

「ずっこけかたも古典的なやつだ……」

ふん、と鼻をならすとテーブルの上のボタンを押した。

すぐ足音が近づき、掃除用具を持った老人がドアを開けた。

「お呼びで……」

「うん、これから全校生徒に訓示をする。放送で呼びかけてくれ」
判りましたと、老人は頭を下げた。

実を言つと、この老人こそ千石高校の校長室の真の主、校長であった。

アキラが千石高校の実権を握り、支配するようになって校長は用務員の仕事をするだけの閑職においやられてしまった。

校長が退去すると、アキラは立ち上がり廊下に出た。

廊下の床はぴかぴかに磨かれ、壁もつややかな白さを保っている。窓ガラスには曇りひとつなく、すべてが清潔だった。

廊下から校庭へ急ぐアキラの前に、数人の生徒がたむろしていた。が、近づくアキラに気づきたちまちま背筋をぴん、と伸ばし四十五度の角度で敬礼する。

それらに目もくれず、アキラは校庭へと急いだ。

校長の放送がはじまった。

「これよりアキラ様より重要なお話があります。全校生徒は、校庭へ集まってください……」

ばたばたと駆け足の足音が轟き、全校生徒が必死になって校庭へ急ぐ。

その中をゆうゆうとアキラは歩いていった。

校庭の演壇に登ったとき、全校生徒は学年ごとにきっちりと整列し、アキラを迎える態勢になっていた。

かれの恐怖支配は学校のすべてに染み渡っていたのである。

演壇に登り、アキラは口を開いた。

マイクはないが、アキラの声は校庭のすみずみに届いていた。

「諸君！ いよいよ決戦のときが近づいたようだ。伝説のガ克蘭と言つのを聞いたことはないか？ それがあらわれたという情報はいった。伝説のガ克蘭を手に入れたものは最強の番長であるという称号を得ると言う。それをわれらがにつくき敵、タツヲに渡し

てはならぬ！ 諸君、その伝説のガクランを手に入れるのだ。ガクランを所持しているのは、高倉ケン太という生徒らしい。いま、調査しているから、いずれその高倉ケン太という生徒のことは判明するだろう。いいか、もう一度言う。伝説のガクランを万石高校のタツヲに渡してはならぬ！ 以上だ」

アキラの演説を聴いて生徒たちの間にざわざわと私語がひろがった。それを制止もせず、アキラはさっさと演壇を降り、校長室へ戻っていった。

まずは第一手。

このことはいずれ万石高校のタツヲの耳に入るだろう。
さて、タツヲがどう出るか？

タツヲ（前書き）

アキラと抗争を続けるタツヲの登場！
が、かれにはある秘密があった。

タツヲ

万石高校と千石高校は町の南北両端に位置し、川辺に近いところにある千石高校に対し、万石高校は北の丘陵地帯に建っている。

したがって万石高校への道は長い上り坂が続いていて、徒歩のものは結構辛いことになっている。

その坂道を、汗を掻きながら登っているのはイツパチだった。

太り気味の身体をえっちらおっちらゆらしながら、イツパチは全身にびっしりと汗を掻いて登っていた。

やがて万石高校の校舎が見えてきた。

レンガ積み、古い塀と、どっしりとした校門が近づく。

そこを通ろうとするイツパチを、万石高校の制服を着た生徒たちが呼び止めた。

「おい、お前はなんだ？」

へっ、とイツパチは小腰をかがめた。

「あたしですか？　へい、あたしはイツパチと申しやして、けちな三下奴でござんす。どうかご勘弁を願ひまして、ここをお通しくださるようお願いたてまつります」

ひとりの生徒が鋭い声をあげた。

「嘘付け、お前の制服は千石高校のものじゃないか。さてはスパイだな！」

イツパチは真っ青になった。

「とんでもございません！　あたしや言ってみれば情報屋みたいなもんでして、ここのタツヲさんにとっても重要な情報をお知らせしようとしただけでございます」

「タツヲさんに？　お前、タツヲさんの知り合いか？」

「いえいえ、お顔も存じ上げませんが、タツヲさんのことは皆さんの噂でよく存じ上げておりますよ。大変な才能の持ち主だそうであたしやぜひお目通り願ひたいと思ひまして、必死の思いで参った

しだいで……」

喋り続けるイッパチの襟首を、生徒の一人がぐいと掴まえた。

イッパチはひゃあ、と悲鳴をあげた。

「怪しい奴だ。そんなに会いたければ会わせてやる。ただし、タツヲさんが、お前をどう扱うか、こつちの知ったことではないがな」
ずるずると引きずられ、イッパチは校舎の中へ入っていく。

「ふーん、おれに会いたいと……そうか。判った。そこに残して、
あとはおれに任せてくれ」

万石高校のいまは廃部になった山岳部の部室で、タツヲは窓の外を見ながら言った。背中を見せたままのタツヲに、イッパチを連れ込んだ生徒たちはうなずき、出て行った。

あとにタツヲと、イッパチ二人が残された。

「おはつにお目通り願います。あたしはイッパチと申しまして、是非一度お目にかかりたつてお話しをさせていただきたく……」

「よせ」

タツヲは短く言った。

へっ？ と、イッパチは顔をあげた。

タツヲは背を向けたまま可笑しそうに話を続けた。

「そういつた卑屈な態度は、お前が馬鹿にしている相手にだけやればいい。おれにそんな態度を続けるなら、これ以上話をすることはないぞ」

「そ、そんな、あつしはタツヲさんを馬鹿になんて……」

「だからやめろ、と言っているんだ」

タツヲの声が少し強まった。

イッパチは首をすくめた。

タツヲはまた口を開いた。

「お前は相手が自分より下だと思つと、そういう卑屈な態度をとるんだろ。そういう態度をとれば相手はお前を軽く見るという間違いをおかす。お前は自分の本当の姿を悟られることもなく、腹の中

で思い切り馬鹿にすることができからな。だが、おれには通用しないぞ」

ふっとIPPACHIの肩から力が抜けた。

肩をすくめ、立ち上がると部室の隅におかれているパイプ椅子に腰掛ける。

「まいったね、どうも。あんたにや、なんでもお見通しのようだ」
ポケットから棒つきのキャンデーを取り出し、口に咥えた。

タツヲは尋ねた。

「それで何の用なんだ？」

「伝説のガ克蘭、ってご存知ですか？」

ぴくり、とタツヲの背が動いた。

「伝説のガ克蘭……」

つぶやく。

「ご存知のようですね。それを着た奴があらわれたんで」

「どこでだ？」

タツヲはくるりとふり向き、IPPACHIの顔を見つめた。

はじめてタツヲの顔を見て、IPPACHIの顔に驚きの表情が浮かんだ。

それを見て、タツヲは眉をひそめた。

「どうした、なにをそんなに驚いている？」

「あ、あんたの顔……まさか、そんな！」

「おれの顔がどうした、というんだ」

「そ、そっくりだ！ いや、あたしの見た伝説のガ克蘭を着たやつに、あんたはそっくりなんですよ！」

「なに？　なんて名前のやつだ」

「高倉ケン太、といいます」

「なんだと！」

タツヲの声が高くなった。

その顔が見る見る赤く染まる。眉間によった皺を見て、IPPACHIは怖れの表情を浮かべた。

ぶるぶるとタツヲの両方の拳が震え、なにかを必死に押さえ込んでいるようだ。った。

くくくく……。

タツヲの唇から笑い声が洩れていた。

「そうか、高倉ケン太というのか。伝説のガクランを着ているのは……そうか、判った！ 知らせてくれてありがとうよ、イッパチ。それ、これが礼だ」

タツヲはポケットから数枚の万札を取り出すと、ぱらりと床にまいた。イッパチはあわてて膝まづいてそれを掻き集めた。

わはははは！

タツヲは哄笑していた。

万札を集めながら、イッパチはそれをぼう然と見上げていた。

対決！（前書き）

千石高校へ乗り込むケン太。そこでアキラと直接対決をもくろむが……。

対決！

朝が来た。

ベッドではちりと目を覚ましたケン太は、ハンガーにかかったガ克蘭を見上げた。

ちりりりり……。

目覚まし時計が鳴り出す。

それを無意識に止め、ケン太は起き上がった。

窓からの陽射しが、ガ克蘭の背に刺繍された”男”の文字にあたってまぶしく反射している。

ケン太の顔にとまどったような表情があらわれた。

じつと伝説のガ克蘭を見つめる。

昨日の自分の行動を思い返し、まるで別人だと思った。

最初がケイスケ。

そして赤星高校の校門でたむろしていた不良たち。

いつものケン太なら、声をかけられただけでびくびくして、どうかして逃げ出したいと思うはずだ。

それが、なんと自信たつぷりに相手をして、しかも撃退してのけたのである。

学生服に手を伸ばし、袖を通す。

途端にケン太の身体のすみずみまで力があふれ、自信が蘇ってきた。

おれは男だ！

おれは強い！

おれはなんでもできる！

表情が一変し、いままでの気の弱さは一瞬で拭い去れていた。肩の線がぐつと持ち上がり、背も高くなった気がする。いや、実際に高くなっている。

そろいのズボンに足を通す。

さらに自信がふかまった。

さあ、今日は手はじめに千石高校へ乗り込もう！

千石高校の手前には川が流れ、ちいさな橋がかかっている。

高校のまわりにはゴミひとつ落ちてはいなかった。校門には千石高校の制服を着た数人の生徒が背をまつすぐのばし、あたりを警戒している。

そこにケン太は堂々と乗り込んだ。

警戒中の生徒たちの顔に驚きの表情が浮かぶ。

「伝説のガ克蘭だ……」

「なにっ！」

伝説のガ克蘭……というつぶやきの中、ケン太は歩を進めていく。

「あいつを倒せば……」

ひとりが決意の表情になり、こぶしを固めて殴りかかる。

それをさつとよけ、ケン太は足を突き出して相手の足にからませた。

すてーん、とおおげさに転ぶ最初の生徒の後ろから、もうひとり今度は木刀を振りかぶってくるやつがいた。

はっ、とケン太はその木刀を素手で振り払い、相手の手首を握った。そのままねじりあげる。

「いててて……！」

悲鳴をあげ、相手はぼろりと木刀を取り落とした。落ちた木刀を、こんどはケン太は爪先で蹴り上げ、ぼーんと空中に浮かせるとぱつと掴んだ。

わーっ、と喚声をあげ千石高校の校舎から数十名の生徒たちが校門めざしかけてくる。

どの生徒たちの顔にも必死の形相が浮かんでいた。

ケン太は木刀を片手にその中へと飛び込んでいく。
ばしっ！

ばしっ！

ケン太の木刀が揮われるたび、ぐえっ、とかぎゃっ、とかいう悲鳴があがった。

たちまちあたりは戦意をうしなった生徒たちであふれた。

ひゅんっ！

風を切る音がして、なにかがケン太の木刀にまきついた。

はっ、とそれを見たケン太はぎりり……と木刀を握る手に力を込める。

巻きついたのは自転車のチェーンであった。

チェーンを飛ばしてよこしたのは、女子生徒である。

彼女の身につけているのは一応セーラー服であるうが、そうとう改造している。

胸元がぱっくりはだけ、胸の谷間がふかく覗いている。ウエストがぱつちり見えるほど短く、セーラー服というより水着のブラにセーラー服のリボンをつけただけ、といえる。

スカートは足もとまで達するロングであるが、脇にふかいスリットがあり、チャイナドレスの下半分だけのようだ。

「覚悟しな！」

女子生徒は真っ赤なルージュをひいた唇でにやりと笑い、叫んだ。木刀を封じたチェーンはながく、彼女の手には垂れ下がった端がぶらぶら揺れていた。それをぐるんぐるん振り回し、じりじりと近づいていく。

ケン太に向け、チェーンを飛ばした瞬間、ケン太は一気に女子生徒めがけダッシュした。

予想もつかないケン太の動きに、女子生徒は一瞬立ち止まった。

「いやあ！」

彼女の胸元に飛び込んだケン太は、ぐっと頭を下げ背負い投げをくらわした。

「きゃあ！」

このときばかりは彼女は女らしい悲鳴をあげ、ずっでんどうとひ

つくり返った。

「痛い！」

腰を打ったのか、立ち上がれないでいる。

ケン太は急ぎ足になって校舎の中へと踏み込んだ。

校舎の中は暗い。

ケン太は昼間のあかりになれた目が、あたらしい環境に適應するまでちょっと立ち止まった。

やがてじょじょに目が慣れてきた。

廊下の向こうに、ひとりの巨漢が立ちはだかっている。

キヨシであった。

あいかわらずポケットに食べ物を詰め込み、それを口に運んでいく。

口に運んでいるのは焼き芋だった。

もぐもぐと咀嚼し、うつろな目でケン太を見ていた。

やがて食べ終わったのか、ごくんと喉をならして呑みこみようやく口を開いた。

「お、おまえケン太ってやつか？」

「そうだよ」

「おまえの着ているのは伝説のガクランってやつか？」

「そうだ」

「おらキヨシっていうんだ。アキラ兄ちゃんが、そのガクラン欲しいっていうからよ、お、おまえ、それを脱いでおらにくれねえか？」

そう言うことにいつ、と笑う。

前歯が数本抜けた口があらわになる。

ケン太はゆっくりと首をふった。

キヨシは肩をすくめた。

「そうか、やっぱ駄目か………そんじゃ！」

いきなり頭を下げ、ケン太向かって突進してきた。

ケン太はさつとキヨシの突進を避けた。

ごっ—ん、という派手な音を立て、キヨシは壁に頭をぶつけてい

た。

キヨシは平気な顔でふりむいた。
額が赤くなっている。

手を挙げ、ちよつとそれに触ると、その手を口にもっていきべろりと舌先で舐めあげた。唾をつけた手を額にやり、ごしごしとこする。

おそろしいほどの石頭であつた。
だつ、とふたたび突進する。

こんどもケン太はそれを体をかわしてよけた。
が、キヨシはそれを予想していたのか、かわされた寸前さつと頭をふつた。

どん、とケン太の胸にキヨシの頭頂部がめりこんだ。
ぐつ、とケン太の息がつまる。
げひひひひ……。

妙な笑い声をあげ、キヨシは両手をひろげ掴みかかってきた。
さきほどのダメージで動きがとまったケン太は、あっけないほどキヨシに抱きかかえられる格好になる。

めりめりめり……。
ケン太の背骨が悲鳴をあげた。
キヨシは笑いながらケン太を締め上げた。
ケン太あやうし！

ぐいつ、ぐいつともがいたケン太はなんとか片手をキヨシの抱擁から抜け出させることに成功した。
その手をキヨシの顔にもっていく。
鼻をつまみあげる。
ぐあ　！

さすがに石頭のキヨシも、これには参つたようだ。
鼻の頭はどんな格闘家でも鍛えることはできない急所といわれている。

おもわずキヨシの腕から力が抜ける。

さつと身を離れたケン太は、ぜいぜいとあえいでいた。
くうーっ、と鼻の頭をこすっていたキヨシは、こんどは怒りの表情をあらわにしてふり向いた。

ふたたび頭を下げ、頭突きの態勢になって突進した。

ケン太はそれを避ける戦術をとることなく、今回はキヨシの走る方向に自分も走り出した。

奇妙な追いかっこがはじまった。

どすどすという足音を立て、ケン太を追いかけるキヨシ。

そのさを短距離ランナーのように走り去るケン太。

なんとか追いつこうと、必死になるキヨシ。

ケン太は校舎内の廊下を右に走り、左に曲がりキヨシを引っ張りまわした。

階段を登り下がり、駆け抜けるふたり。

やがてキヨシの足もとがふらついてきた。

「待て……おめえ、卑怯だぞ……おらと、勝負しろ……」

とうとうキヨシの足がとまった。

ぺたりと床に座り込み、肩で息をしていた。

いっぽう、ケン太はそれを見ておおきく深呼吸をくりかえした。

やがてケン太の呼吸が平静になる。

「まだやるかい？」

そう声をかけると、キヨシは情けない顔になって首をふった。

「それじゃ」

片手をふってケン太は歩き出した。

ふり返ると、キヨシは床に座り込んだまま手をふっていた。

人の良い笑顔を浮かべていた。

廊下の先にいる人影を見て、ケン太は足を速めた。

「待て！」

声をかけると、相手はぎくりと立ち止まった。
ふり向く。

ケイスケであつた。

「や、やあ……」

気弱げな笑みを浮かべた。

この顔こそが、ケイスケの本質のようだった。つつぱって見せたのは虚勢であろう。

「ケイスケ、って言ったよね、あんた」

「は、はい……」

おどおど手を前にしてひねくりかえし、目をしばしばさせる。

「この高校を仕切っているのはだれだい？ きみか？」

「と、とんでもない！ アキラさんっていうお方で」

「ふーん、そうか。それじゃそのアキラさんって人のところへ、ぼくを案内してくれないか？」

「あつしが？」

ケン太はじつとケイスケを見つめた。

ケイスケはぼけつとその目を見つめ返し、やがてぶるつと首をふつた。

「わ、わかりました……こちらで……」

先に立つて歩き出す。

ケン太はその後を追った。

やがてケイスケは千石高校の校長室の前で立ち止まった。

「こちらで……」

「校長室じゃないか」

「へえ、アキラさんはここにいつもいらっしゃるんですよ」

そうか、とつぶやきケン太はドアをノックした。

どうぞ、という返事にドアを開き中へと入る。

窓際にマホガニーのテーブルを置き、その向こうの皮製の椅子にアキラが座っていた。

逆光になっていて、その表情は読めない。

ケン太は目をすがめた。

「あんたがこの高校を仕切っていると聞いた。ぼくは高倉ケン太と

いつて、話をしに来たんだ」

「話し？」

「そうさ、こんな無駄な争いやめにしないか？」

「無駄？」

アキラの返事はつねに短い。

ケン太はしだいにいらいらしてきた。

「そうさ、無駄さ。こんな争いをして一体何になるんだ。高校同士の縄張り争いなんて馬鹿らしいと思わないか？」

「なぜ無駄なんだね」

ようやくアキラが二言以上を口にする。

それに勢いを得て、ケン太は言葉を重ねた。

「だってそうじゃないか。ぼくだって、あんただって学生だろ？」

ということとは、親に学費を出してもらって、通っているということじゃないか。こんなことする前に、ぼくたちにはやることがあるんじゃないか？」

「なにを？」

「勉強だよ。社会に出てなら縄張り争いだのなんなの、勝手にやればいいけど、ほかの生徒をまきこむのはやめてくれ！」

くすくすとアキラが笑い声をあげた。

ケン太は唇を噛みしめた。

ゆらり、とアキラが椅子から立ち上がる。テーブルをまわり、ケン太の目の前にやってきた。じつとケン太の顔をながめ、ゆっくりとうなずいた。

「なるほど、お前がケン太か……」

両手を後ろに組み、背中をのばして言葉を続けた。

「お前はおれたちが親に金を出してもらって学生になっていると言ったが、あいにくそれは間違いだ。おれたちはびた一文たりとも、親に金をだしてはもらっていない。第一、おれたちは学生ですらないのだ！」

ケン太はぽかんと口を開いた。

それを面白そうにながめ、アキラはうなずいた。

「そうさ、驚いたようだな。それにもうひとつ、ここは高校ではない。かつては千石高校という学校だったが、いまでは廃校になって建物だけが残っているのだ。それをおれが買い取り、支配しているのだ。万石高校もおなじさ。おれたちはただの建物に通う、学生服を着た社会人というわけだ」

あまりの衝撃に、ケン太はふらりとなってあとずさった。

「つまり、おれたちは立派な社会人なんだよ。ここは言ってみれば千石高校という名の会社さ！ お前の言っていることはすべて間違いだ！」

アキラは机のボタンを押した。

それに応じて、ひとりの老人が姿をあらわした。

「これが千石高校のもと校長だ。千石高校が廃校になって、失職したのおれが拾ってやって雑用をこなしてもらっている。どうだね、これでも文句があるのか？」

ケン太ははっ、と顔をあげた。

「そ、それじゃ赤星高校は？ あそこであんたらの生徒……いや、同志……いや、つまり手下が騒いで……」

「それはおれの知ったことではない。学生服を着た社会人が、どこでなにをしようとそれは法律の範囲何でのことだろう。喧嘩？ 勝手にやらせればいいじゃないか。ほかの一般人には迷惑をかけていないんだから。それに赤星高校といったって、おれの調べではたったふたりの在校生がいるだけだと聞いている。そのふたりには迷惑をかけていないのだから、お前に文句をつけられる筋合いはない」

ケン太は足もとが崩壊する想いだった。

呆然となっているケン太に、アキラはささやいた。

「要するにお前は自分の勝手な正義感で余計なことをした、というわけさ」

勝手な正義感……。

ケン太はつぶやいた。

アキラの言葉はケン太にとどめを刺した。

思わず座り込むケン太に、アキラは声をかけた。

「さあ、判ったなら家に帰れ。お前は真正正銘、ただの学生なんだからお前の言ったとおり学生の自分を守るべきだ。つまり勉強さ。社会人になったら、また会おうや」

ぽかん、とした顔になって見上げるケン太にアキラはうなずいた。つかつかとデスクに近づくと、その引き出しから一組の学生服を取り出す。

赤星高校の制服だった。

「そんな妙な学生服は脱げ。そしてこちらの、まともな制服に着替えるんだ」

言われたままにケン太は伝説のガ克蘭を脱ぎはじめた。

上着を脱ぐ。

ばさり、とリーゼントの髪型が乱れ、前髪がかかってきた。

ズボンを脱いだ。

きれいに染め上がったケン太の金髪が見る見る黒髪になっていく。

アキラに渡された赤星高校の制服に袖を通し、ズボンをはいた。

ケン太は伝説のガ克蘭を身につける前の姿に戻っていた。

無言でケン太は千石高校の校長室を後にしていた。

それを悲しげな顔でもと校長が見送っていた。

流転（前書き）

ケン太から伝説のガクランを奪ったアキラ。だが伝説のガクランには秘密があった。

流転

くくくく……！

こみ上げる笑いに、アキラは肩を震わせていた。

窓から覗くと、ケン太がうなだれ校門を後にしていく。その足取りは重く、辛そうであった。

あはははは！

アキラは天井を見上げ、笑った。

ぼん、と手を叩くと陽気にそのあたりを跳ね回った。

「やったぞ、ついに伝説のガクランを手に入れた！」

目をきらめかせ、脱ぎ捨てられた伝説のガクランを拾い、陽射しにかざした。

背中の中の縫い取りがまぶしい。

「伝説のガクラン……最強の番長……」

つぶやきながら自分の制服を脱ぎはじめる。

ガクランに袖を通す。

さすがのアキラもその時は興奮で手が震えた。

そこに伝説のガクランを身につけたアキラの姿があった。姿見に自分の勇姿を映し、かれはほくほく顔になっていた。その顔を見たら、ケイスケもキヨシも仰天するに違いない。ついぞ見せたことのない表情を、アキラは浮かべていた。

「ケイスケにやつを調べさせておいて役立ったな……」

満足げにつぶやいた。

ケイスケはアキラに命じられたまま、徹底的にケン太のことを調べ上げていた。中学の同級生はおるか、小学校、幼稚園と調べ上げ、ケン太の性格をアキラはすみずみまで把握していた。正直、アキラはケイスケがこれほどまでやるとは思ってはいなかった。

正義感というのがキイになる。

アキラはそう確信した。

そこを突けばケン太は攻略できると思ったからケン太がここに乗り込んできたという報せを受けたとき、そのままさしたる罠もかけず待ち構えていたのである。

配下のものに手を出させないことも考えたが、それではケン太にこちらの意図を見抜かれる危険があつたのであえてそのままにしておいた。それも見越してのことだ。

くるりとふり返り、壁にかかった地図を見上げる。

さてこれからタツヲとの決戦だが……。

作戦を考え始めたアキラだが、ふいにその表情が曇った。

なんだ、この気持ちは？

急にこみ上げた感情に、アキラはとまどっていた。

不快感がアキラを苦しめる。

やがてそれが罪悪感であることに気づき、アキラは罵り声をあげた。

おれに罪悪感？

馬鹿な！

だがそれには間違いようはなかった。急に自分の行いについて内省がはじまる。この高校を手に入れるためやったことのあれこれ、卑怯な手で校長を陥れた自分の過ちについて真つ暗な罪悪感が迫る。「いけない……こんなことはやめにしなくては……赤星学園から撤退して……」

つぶやき驚愕の表情になる。

「馬鹿な！　せつかくここまで来たというのに……くそっ！　こ、このガ克蘭のせいだ！　こいつがおれに馬鹿なことを言わせている！」

ぶるぶると全身を震わせ、アキラは伝説のガ克蘭を脱ぎはじめた。

ようやくもとの自分の制服に着替え終わり、嫌悪の表情で脱ぎ捨てたガ克蘭を見つめる。

「確かにこれは伝説のガ克蘭だ……こいつを着ると、正義感に支

配される。やつは ケン太は もともと正義感に溢れた奴だった。だから平気だったんだ……！」

くそお！ と、罵り声をあげたアキラは、床にひろげたガ克蘭を蹴り飛ばした。ガ克蘭はふわりと宙を舞い、開け放したままのドアへ飛んでいった。

そこへキヨシが顔を出した。

「ぶあつ！」

いきなり頭からガ克蘭が降ってきて、キヨシが叫び声をあげた。滅茶苦茶に手を振り回し、頭にかぶさったガ克蘭を掴む。

それを手にとり、不思議そうな顔になった。

「兄ちゃん、これなんなのや？」

「知らん！」

そっぽを向くアキラに、キヨシは妙な顔になった。

やがて理解をしたのか、につこりと笑った。

「もしかして、伝説のガ克蘭なのかや？ すげえな、兄ちゃん。

あのケン太を倒したんだ！」

「ああ」

アキラは不機嫌にこたえた。

キヨシは身をかがめ、ズボンも拾った。

「なあ、兄ちゃん。せつかく奪ったんだから着て見せておくれよ！

おら、兄ちゃんがこれを着たところを見たい！」

「冗談じゃない」

え、とキヨシは眉をあげた。

あいかわらずアキラは不機嫌そうにそっぽを向いている。

「おれはそれを着るつもりはない。とにかく目障りだ、どこかへ持つていけ！」

キヨシはさっぱりアキラの意図が判らず、ぼんやりと立ちすくんでいた。が、その顔に狡猾そうな笑みが浮かぶ。

「そうかや？ んじゃ、おらがどこかへやってしまっただよ」

そう言いながら小躍りするようにガ克蘭をかかえ、出て行った。

アキラはふり返り、キヨシになにか言いかけたがやめにした。キヨシがそのガクランを身につけるか、心配だったのである。が、キヨシの体格では袖を通すことも出来まいと思い直した。

アキラの心配は当たっていた。

キヨシは自分がガクランを着るつもりだったのである。

しかしケン太とキヨシでは体格の差がありすぎる。

キヨシは体重百キロ以上、身長は百八十はある。対してケン太のほうは、身長はようやく百七十あるかないかだし、体重も五十の前半くらいしかない。しかしそんなことはキヨシの頭には片鱗も浮かぶことはなかった。ただ、伝説のガクランを着た、自分の姿を想像してうつとりとなっていた。

鼻歌を歌いながらキヨシは自分の住まいに近づいていった。

木造モルタル築数十年という、いまにも崩壊しそうな古アパートである。

その階段をぎしぎし軋ませ、キヨシは二階へと登っていった。がらり、とドアを開け室内に入る。

ぷーん、という甘ったるい腐敗臭があたりに漂う。部屋のあちこちにゴミが散乱し、台所には食べかけの食器が山となっていた。典型的な男所帯である。

「さてと……」

楽しそうな顔になって、キヨシは自分の制服を脱ぎはじめた。でれんとした、しまりのない肥満体があらわになる。

ガクランを日にかざす。

金の縫い取りがきらめいた。

うふうふうふ……と気持ちの悪い笑い声をあげ、キヨシはガクランの袖に腕を通した。

なんと！

伝説のガクランはキヨシの腕を通したのである。

しかしそれでも相当苦しそうだ。

鼻息をあらげ、キヨシは伝説のガ克蘭を着始めた。

ぐいつ、ぐいつと力任せに袖を通す。ガ克蘭の生地は、キヨシの肉ではちきれんばかりだ。

それでもなんとかキヨシはガ克蘭の上着を身につけた。さすがにボタンを前で合わせることは諦める。

次はズボンだ。

これも力をこめて足を突っ込む。

とても入りそうになかったが、それでもズボンはキヨシの肉体を受け入れた。

すると見よ！

伝説のガ克蘭の服地がどんどん伸びて、キヨシの体格に合わせて変化するではないか！

数分後、すっかりガ克蘭はキヨシの体格に合わせていた。

ふんふんと鼻歌を歌いながら、キヨシは自分のものになったガ克蘭を見やった。

と、その表情が一変した。

背筋がまっすぐになり、その目はすっきりと澄み渡る。

ぐるりと自分の部屋を見まわした。

かれは唇を噛みしめた。

校長室でなにか考え込んでいたアキラだったが、やがてぼんと自分の膝を叩くと立ち上がった。

「ケイスケ！　そこにいるのか？」

へいつ、と返事があつてケイスケが入ってきた。どうやら校長室の近くで控えていたらしい。

「ケイスケ。キヨシが心配だ。おまえ、見に行け」

「キヨシさんが？」

「そうだ。馬鹿なことをする前に、早く行くんだ」

へいつ、とケイスケは飛び出した。

夕暮れの中、なにが心配なんだろうとケイスケはキヨシのアパートを指していた。

通いなれた路地をたどるケイスケに、声をかけたやつがいる。

「ケイスケの旦那……」

ケイスケはぎくりと立ち止まった。

声をかけたのはイツパチだった。

「な、なんだイツパチじゃないか……」

目を合わせようとしないうケイスケの顔を覗き込むようにして、イツパチは笑顔を見せた。

「お約束のもの、受け取りにまいりました」

「約束？」

ケイスケは空とぼける。

「いけませんや、ケイスケさん！ お金を戴ける約束じゃないですか？」

「そうだったかな？」

側を通り抜けようとするのを、イツパチは先回りした。

「とぼけちゃいけません。あたしがケイスケさんのために、ケン太のことを調べ上げたんじゃないやござんせんか。さ、お約束の褒美、戴きましょうか？」

「いまは持ち合わせないんだ」

「ちつちつちつ！」

イツパチは指を一本たて、目の前でふつてみせた。

「アキラさんにご褒美、戴いたんでしよう？ ちゃあんと、知っておりますよ」

ケイスケはこんどはイツパチを無視して歩き出そうとした。あくまで支払いを拒否するつもりだ。

そのケイスケにイツパチが声を張り上げた。

「よろしいんですね！ それじゃアキラさんに直接お金を戴きにあがっても？」

「おい、よせよ！」

「ケイスケさんが自分で調べず、あたしにケン太の調査をお命じになったと知ったらアキラさんは……」

「わかった、わかったよ！」

しかたなくケイスケは懐から金を出し、イッパチに渡した。

イッパチはぽん、と額をたたき笑顔になった。

「毎度有難うございます！ これからもご贔屓に！」

くるり、と背を向けひよいひよいと軽い足取りで去っていく。

ケイスケはほっとため息をついた。

かれの言ったとおり、ケイスケはケン太のことをイッパチに調査させていたのである。かれだけでは、そんな調査は出来なかったからである。

気を取り直し、歩き出す。

やがて見慣れた景色になり、いつものアパートの階段をとんとんと登っていく。

ドアの前に立つと、なかからふーっ、ふーっというキヨシのうめき声が聞こえてくる。

ケイスケはびっくりした。

「キヨシさん！ どうしたんですか？」

声をかけるが返事はなかった。

思い切ってドアを開けた。

入ったすぐがトイレになっている。

そのトイレのドアが開き、キヨシの巨大な尻が突き出していた。キヨシの尻は伝説のガ克蘭のスポンに包まれている。

「キヨシさん、伝説のガ克蘭を着たんですか？」

ふーっ、ふーっというキヨシの声。

おそろおそろ、ケイスケは首を伸ばしてトイレを覗き込んだ。

！

なんとキヨシはトイレの掃除をしていたのである。

巨体を苦しそうにかがめ、便器にしゃがみこんでせっせと雑巾で磨いている。便器はすでにぴかぴかになっていた。

その作業のため、ふーっ、ふーっというつめき声をあげていたらしい。

「キヨシさん？」

ようやくキヨシは立ち上がった。

真っ赤なガクランを着ている。あの伝説のガクランだ。いまは完全にキヨシの体格にぴったりとなり、不自然なところはどこにもなかった。

「ああ、ケイスケか……何のようだ？」

「何の用だって、あのアキラさんがキヨシさんの様子を見に行けて……」

そう言いながらケイスケは口ごもった。

あらためてキヨシのアパートの室内に目をやる。

「キヨシさん、部屋を掃除したんですか？」

うん、とキヨシはうなずいた。

かれのアパートの部屋は変貌していた。

足の踏み場もなくゴミや、食い散らかしの食器で散乱していた部屋はいまは綺麗に片付き、いまは床が見えていた。ガラス窓は一枚残らず磨き上げられ、本や雑誌の類はきちんと分類され、本棚に収容されている。薄汚れていたソファはいまはブラシがかけられ、きれいなカバーがかけられていた。

「どうだ、いままではここは人の住むところじゃなかったからな。」

思い切って掃除したんだ。ああ、掃除をするって気持ち良いなあ！」

「キヨシさん……」

ケイスケはぼう然となっていた。

キヨシのどこかが変わっている。

「あ、あの、キヨシさん……、歯医者行ったんすか？」
「ん？」

キヨシはケイスケを見てにいつ、と笑った。

なんと欠けていた前歯がいまはきれいに生えそろっている。

キヨシは舌先で前歯をさぐった。

「あ、そういえば妙な具合だと思っていたんだけど、歯があるぞ！」
「あんた、本当にキヨシさんですか？」

ケイスケは気味悪そうにキヨシの巨体を見上げた。
言葉遣いも変わっていた。

いつもの、もうろうとした言葉遣いは影をひそめ、はきはきとした明朗な物言いになっている。

ケイスケはキヨシの外見も変化していることに気づいた。
頬の線がややシャープになり、腹がへっこんでいる。体のあちこちにあつた吹き出物のたぐいも、いまは綺麗に治っていた。

そのことをケイスケが言うと、キヨシはちよつと考え込んだ。

「そうかな？ 自分では変わっていることに気づかないが……」

「そのガ克蘭のせいだ！」

ケイスケは大声をあげた。

「ガ克蘭？」

キヨシは自分の着ている伝説のガ克蘭を見つめた。

ケイスケはゆるゆると首をふった。

「あのケン太も、ガ克蘭を着る前はとても喧嘩なんか出来そうもない坊っちゃんだったけど、着たとたん別人になった。そしてアキラさんの前でそれを脱いだら……そうだ、それが伝説のガ克蘭のちからなんだ」

キヨシの表情が変化した。

なにかを決意したような表情になる。

「ケイスケ！」

「は、はいっ！」

「お前、ケン太の家を知っているな？」

「え、ええ、そりゃ……」

「案内しろ」

「えっ？」

「おれをそこへ連れて行け！」

ケイスケは目をぱちぱちと瞬かせた。

夜。ケン太の自宅。

ケン太は暗闇の中、天井を見上げていた。
かれの勉強部屋である。

男の子の部屋にしては綺麗に片付いている。

ベッドに仰向けになり、明かりもつけずケン太はじっと天井を見
上げ身動きひとつせずいた。

想いはつい、伝説のガ克蘭にもどる。

伝説のガ克蘭……。

あれを着たときの昂揚感、そしておしよせる自信。身につけてい
た間は、自分が自分でなくなるような、そんな感覚にあった。

ケン太は唇を噛んだ。

あれを渡すんじゃなかった！

後悔が真つ暗な感情になって押しよせる。

こん……。

「？」

こつん……。

なんだろう？

ケン太はベッドの上に起き上がった。

かつつ！

こんどは勢いよく、小石のようなものがガラス戸に当たる。
がらっ！

ケン太はガラス戸を開いた。

ひゅっ！

もうひとつ、小石が部屋の中に飛び込んでくる。

ころころころ、と小石は部屋の床に落ち、ころがった。たまらず

ケン太は声をかけた。

「だれ？」

「起きたみたいですね」

下の方から声がする。

窓から身を乗り出し、見下ろすとケイスケとキヨシが高倉家の庭に立っていた。

「あんたたち……」

ケン太は目を見開いた。

ケイスケの隣に立つキヨシは、なんとあの伝説のガクランを着ている。キヨシはケン太を認め、手をふった。おいで、おいでをしていた。

「おい……出て来いよう……」

あたりを憚っているのか、キヨシは手をメガホンにして小声で叫んだ。

ケン太はうなずいた。

何のようか判らないが、とりあえずふたりには敵意は見られなかったからである。

そろりと足音を忍ばせ、二階から一階へ階段を降り、玄関へ。

サンダルを履いて外へ出た。

寒い。

季節は春だが、まだ気温は冬の名残を引きずっていた。吐く息が白い。

「やあ！」

キヨシがにやつと笑って前に立った。

ケン太はキヨシの姿を見て口を開いた。

「伝説のガクラン、着ているね」

キヨシはうなずいた。

「そのことで来たんだ」

ケン太は眉をひそめた。

一度会っただけだが、それでもキヨシの変貌には気づいたのである。背後にいるケイスケは、以前キヨシが着ていたぼろぼろのガクランを手に持っていた。

キヨシはいきなり伝説のガクランを脱ぎだした。

「これはお前に返すべきだ。そう思って来たんだ。おれも着たけど、

資格がないのがわかった。このガ克蘭の能力を最大限引き出すのは、やっぱりケン太お前だよ」

ケイスケから自分のガ克蘭を受け取り、手早くもとのガ克蘭に着替えると、伝説のガ克蘭をたたみ、ケン太に差し出した。

「さあ、受け取ってくれ」

ケン太は呆然となってガ克蘭を受け取った。じっとキヨシの顔を見つめる。

「いいのか？」

うん、とキヨシはうなずいた。

「じゃあな！」

にこにことあいかわらず人の良い笑みを浮かべつつ、キヨシは手をふりながら去っていった。ケイスケがあわててその後を追う。

ケン太はいつまでもそれを見送っていた。

かれの胸に、ある疑問が湧き上がっていた。

いったい伝説のガ克蘭とはなんだ？

高倉家の正門前、電柱の陰に隠れつつ、IPPACHIはたたずむケン太を見守っていた。

そしてつぶやく。

「伝説のガ克蘭は持ち主に戻った、かにやりと笑う。」

「面白くなってきやがったぜ！」

ガクランの秘密（前書き）

伝説のガクランの由来がはっきり！
はなにか？

いったい伝説のガクランと

ガ克兰の秘密

朝食がすむと、ケン太は父親のブン太に切り出した。

「父さん、聞きたいことがある」

「なんだ、あらたまつて」

「伝説のガ克兰のことだ。父さん、いったいどうやってあれを手に入れたんだ？」

ブン太は腕を組んだ。

ケン太はまだ伝説のガ克兰に袖を通していない。髪の毛も黒く、もとのままだ。父親からガ克兰について詳しい話を聞くまでは、身につける気にならなかった。

ブン太は腕組みを解くと、口を開いた。

母親の純子が側に来て、そつとふたりの前にお茶をいれた湯飲みをおく。

「やはり話しておいたほうがいいだろうな」

父親は話した。

ブン太が高校一年生、つまりいまのケン太と同じ年頃。

赤星高校は荒れていた。

いわゆる校内暴力、というやつである。

番長やスケ番が隠然たる勢力を持ち、普通の善良な生徒を恐怖で支配していた。いや、生徒ばかりではなく教師も、だった。

教室や廊下では、不良たちが公然と喫煙、飲酒をあたりはばかることなく行い、女子生徒や女性教師らに性的ないやがらせ……いや、レイプまで行っていたのである。

赤星高校の荒れようは、外からでもわかるくらいだった。校庭にはゴミが散乱し、暴走族がバイクや車を勝手に乗り回す。塀や壁にはペンキで落書きがところせましと塗られている。そのひどさに、校舎の空はいつも暗雲が垂れ込めているようだった。

高校をすこし離れた丘の上から、ひとりの老人がじつと観察していた。ひよろりとした痩身で、手になにかの包みを持っている。「なるほど、確かにひどい。これではニューヨークのスラム街とおなじだ……」

老人の瞳はなにかを探しているようだった。

と、老人がなにかに注目した。

学校の裏手、ひと気のない体育用具置き場の側で、ひとりの男子生徒が数人のあきらかに不良とわかる生徒たちに取り囲まれている。「だからおれの欲しいのはこんな甘ったるい炭酸飲料じゃなくて、ほかのやつだって！」

「おれのも違うじゃねえか。おれは別冊の月刊誌を買って来いと言ったんだ。お前の買ってきたのは週刊誌じゃねえか！」

買い物の袋を手につげ、ひとりの男子生徒が身を固くしてじつと不良たちの暴言に耐えている。

「それに煙草はどうした？ 酒も買って来いと言った筈だぞ」

「で、でも……！」

男子生徒は顔を上げた。

今のケン太そっくりの顔。

ブン太だった。

お？ と不良たちは面白そうな顔つきをして見せた。こいつ、反抗する気か？

「煙草や酒は学生服じゃ買えないから……」

「自販機があるじゃねえか！ まったくつかえねえな、このパシリ」

「でもあんたの指定した銘柄、自販機じゃ売ってないよ！」

「あんた、だど？ おめえ、誰にもの言っている？」

ブン太は身をふるわせた。

不良たちはじりつ、と距離を縮めた。

「こりゃあ、罰が必要だな……」

「うん、そうだ。罰が必要だ」

ブン太の顔に怯えが浮かんだ。

「罰はなににしようか？」

「そうだなあ……」

不良たちの目にサディスティックなきらめきが浮かぶ。獲物をいたぶる残忍な表情だ。

「よし、スクワットを百回だ！」

「そうだ、スクワットだ！」

「さあ、始めるぞ、いーち……」

ブン太はスクワットを始めた。両手を後頭部にあて、ゆっくりと膝をまげる。そしてまた身体を伸ばす。

「ふたーっ……」

「みつっ……」

不良たちはわざとゆっくり数をかぞえている。これはきつい。スクワットできついのは、ゆっくりな動きである。

「とお……じゅういち……じゅうに……」

ブン太の額に汗がふきだした。顔はすでに真っ赤になっている。「にじゅうに……どうした？ 身体がふらふらしてるぞ！」

「そうだ、真面目にやれ！」

普通の体力の持ち主で、スクワットを真剣に十回以上やってみればその苦しさがわかる。ブン太はすでに体力の限界をこえていた。

「さんじゅう……」

ついに倒れこんだ。

わっ、と不良たちが喚声をあげた。

「こりゃ罰が追加だな」

「そうだ、あと百回追加だ。三十までやったから、百七十やるんだぞ！」

ブン太は目に一杯涙をためていた。

ようやく不良たちから解放されたとき、ブン太はふらふらになっていた。腿の筋肉はぱんぱんに腫れあがり、背中の筋肉も傷めている。這うように校舎をあとにし、帰宅路をとぼとぼと歩いていた。

「待ちなさい」

老人の声がして、ブン太は立ち止まった。夕暮れの中、ひとりの老人がたたずんでいる。夕日をバックに真っ黒な影になり、表情は読めない。

「なんですか？」

ブン太は目を細めた。老人はうなずいた。

「さっきから見ておったが、お前さんそうとうやられていたのう…」

…」

ブン太の顔が赤くなった。夕日がまともに当たっているせいではなかった。

くるりと背をむけ歩き出す。

「待ちなさい！」

もう一度老人は呼び止めた。さきほどより、強い調子だった。

「ぼくに何の用なんだ！」

ブン太は怒ったような声になった。

「きみにいいものをあげようと思ってな……これをあげよう」

老人は手に提げた風呂敷包みを差し出した。

ブン太は妙な表情になった。

老人は言葉を重ねた。

「もしこれがきみを選べば　いや選ぶにきまっておるが　きみは今日から生まれ変わることが出来る！　さあ、受け取れ」

そう言うとき老人はじつと生徒を見つめた。その目のひかりは異様だった。常人の目のひかりではない。

とはいえ、狂人とも思えない。

強い意志と、決意が秘められた目のひかりだった。

その目のひかりに、ブン太はついふらふらと近づき、手をのばした。

風呂敷包みが渡された。

老人は莞爾とほほ笑んだ。

「それではお別れじゃ！　幸運を！」

そう言つとさつさと歩き出した。

ブン太はぼんやりと立っているだけだった。
名前を聞くのを忘れた、と思った。

「それが伝説のガ克蘭だった……」

懐かしそうな目になって父親は話しをつづけた。

翌日、伝説のガ克蘭をまとったブン太に、高校は騒然となった。
「だれだ、ありや？」

「高倉の奴らしいぞ……」

「ブン太が　まさか！」

校門でたむろしていた、昨日いたぶっていた不良たちがブン太を取り巻いた。じろじろとガ克蘭を眺め口を開いた。

「いよう、高倉くん……ずいぶんとめかしこんでいるじゃねえか！」
へらへらとひとりの不良が近づき、ブン太の金髪のリーゼントに触ろうと手をのばした。

ブン太はさつとその手を振り払った。

不良の目にかつ、と怒りが燃え上がった。

「野郎！　すかしやがつて……」

殴りかかるその手を、ブン太がねじりあげる。

「痛ててて……！」

悲鳴をあげる。ブン太はかれの手首を掴みながらゆうゆうと歩き出した。

「こいつ！」

ひとりが殴りかかるのに、手首を掴んだ不良を押してぶつける。

わっ、とふたりはもつれあつて転んだ。

立ち上がるうとするところにブン太の爪先が襲いかかった。

ぼく！　とブン太の爪先がひとりの腹にめりこむ。

ぐえええ……！

鳩尾をまともにキックされ、その不良は身体を折り曲げて苦しんだ。胃液が口もとから吐き出され、酸っぱい匂いが漂う。

ブン太の背後から襲いかかるのを、さつと身を翻し平手で頬を張り倒す。

強烈なビンタに、相手はきりきりと身を廻して倒れこんだ。顔を上げたその顔に、深甚な恐怖が浮かんでいた。

「まだやるか？」

ブン太は叫び、ひとりひとりじっと見つめていく。ブン太に見つめられ、全員目をそらした。

戦意はすでになかった。

ブン太は後を見ることがなく、さつさとその場を立ち去った。

ブン太の目指したのは校長室だった。

「失礼します」

ドアをノックし、返事も待たずドアを開けた。

「きみ？」

デスクの向こうで校長が驚いて立ち上がった。やがてケン太が会うことになる赤星高校校長の若いころである。ブン太はつかつかと校長に近づいた。

「校長、お願いがあります！」

驚きのあまり、校長は口をぱくぱくさせるだけだった。

「この赤星高校はひどい状態です。ぼくはそれに怒りを感じていました。それで、この際高校の大掃除をしようと思うのです。つきましては、ぼくがなにをしようと思認するという許可を頂きたくお願いにあがったのです。」

校長、この高校をまともな状態にするチャンスなんです！」

一気にそこまで話し終り、校長の反応を見る。

校長は奇妙な表情になっていた。

その目がブン太を通り越し、室内の別の方向へむけられている。

なんだろうとブン太は背後をふり返った。

校長室の接客用のソファに、ひとりの少女がきちんと膝に手をやり、座っていた。細面の、大人しそうな美少女である。年令はブン

太とおなじくらいか。しかし赤星高校の制服ではなく、べつの高校のブレザーを着ている。

「お客さんでしたか」

「その……転校生なんだ」

「そうでしたか。それは失礼しました。ええと、きみ……ようこそ赤星高校へ」

かるく会釈し、ブン太は笑顔を見せた。

少女ははっ、とした表情になった。

ブン太が笑顔になったとき、その口もとの歯がきらりと光って見えたのである。

少女と目が合って、ブン太はウィンクをして見せた。少女は真っ赤になった。ウィンクしたブン太の瞳がきらりと煌いて見えた。

彼女こそ、ブン太の運命の相手、純子であった。

その日からブン太の活躍がはじまった。

校長の許可をえ、ブン太は高校の大掃除をはじめた。一月もたたないうち、荒れきっていた赤星高校は立ち直り、生徒や教師は安心して登校できるようになったのである。この活躍で、ブン太は伝説の番長の称号を得、ブン太と純子は将来を誓い合った。

*

父親の話しはそれなりに興味深かったが、ケン太の知りたいことは教えてはくれなかった。

結局、ガクランはどこからきたのか？

ケン太は部屋に戻り、ハンガーにかかったままのガクランを見つめた。

ガクランがケン太を見つめ返しているようだった。

たまらずケン太はガクランを手にし、袖を通した。

！

ある衝動がケン太を貫いた。

外へ……。

そしてある場所へ向かえ……ガ克蘭がそう告げていた。

胸をどきどきさせながら、ケン太は家の外へ歩いていった。

一歩ごとにケン太は変身していった。

髪の毛が自然にオールバックになり、リーゼントの髪型を形作っていく。その色がじよじよに薄くなり、金髪になった。足取りが力強く、自信を深めていく。

ケン太は駅へ向かった。

切符を買う。

思ったより遠い。

目的の駅は、港町だった。

電車に揺られ、ようやく到着した駅前にはぎわっていた。

その喧騒の中をケン太は裏道を探して歩いていく。こまごまとした路地を右へ左へと進んでいった。ちいさな商店が立ち並ぶ中に、目的の場所があった。

「押忍！ 有難うございました！」

だしぬけの大声に、ケン太は立ち止まった。

ちいさな服飾屋の店先で、髪型をオールバックに決めた数人の学生が、身を折り曲げて最敬礼をしている。全員膝元まで達する長いガ克蘭 長ランというやつだ を着て、裾が広がったパンタロンのようなズボンを穿いている。

かれらは最敬礼をすませると、全員足取りをそろえケン太の立っている方向へ歩き出した。ケン太の側をすり抜けるさい、全員じろりと鋭い視線を送っていた。

ケン太はその服飾屋へ近づいた。

つくりは古い。木造の、平屋建てである。

ウインドウがあり、様々な種類の学生服、セーラー服が展示してある。普通のもあったが、大部分は改造したものだった。ウインドウのガラスに貼り紙があり

学生服、セーラー服

お仕立ていたします

オリジナルも承っております

とあった。

ケン太はおそろおそろの店のガラス戸を押して中へ入った。

からん、とドアベルが鳴った。

入ってすぐがカウンターになっていて、ひとりの二十代はじめころの女性が帳簿らしきものをひろげている。背が高く、憂いをおびた表情をしていたが、はっとするほどの美人だった。彫りが深く、日本人離れをした美貌をしている。もしかしたらハーフかもしれない。かかった。

なにか話しかけたかったが、なにを話していいかわからない。

と、その時もうひとりの客が入ってきた。ばん、と勢いよくドアを開いたせいで、ドアの上のほうについているドアベルががちがちやとうるさい音をたてる。

小柄な男子生徒だ。

かれは興奮しているのか、顔を真っ赤にさせ入ってくるなり大声をあげた。

「押忍！ 自分は由良高校の応援団に所属しております加藤というもんです！ 今回、あたらしい応援団の制服を作ってもらいにまいりました！ どうかよろしくお願いします！」

あまりの大声にケン太はびつくりした。

加藤と名乗った男は背をぴんとのばし両足をぴったりとあわせ、気をつけの姿勢のまま動かない。

カウンターの女性はうなずくとかれに近づいた。手にメジャーを持っている。

「それじゃ採寸するわね」

「押忍！」

彼女は手早く加藤の全身のサイズを計っていき、手元の手帳に数

字を書き込み始めた。彼女が採寸するため加藤に手を挙げなさいとか、足を開いて、というたびに相手の生徒は素直に従う。

やがて採寸がおわったのか、彼女はうなずいた。

「それじゃどんな学生服を作ってもらいたいの？」

「あ……あの……」

加藤は真っ赤になった。

「あの……格好良いのをお願いします！」

女性はちよつと首をかしげた。

「格好良いって言ってもどんなのがいいのか……そうね、あんたちよつと背が低いから短ランなんてどうかしら。似合うと思うわよ」

「それをお願いします！」

加藤はさらに大声をあげた。

女性はメモを見て告げた。

「いま注文が重なっているから、そうねえ仮縫いは来週でどうかしら？ 来週の木曜、学校が終わったらいらっしやい。どう？」

「押忍！ 窺わせていただきます！」

くるりと回れ右をして、加藤と名乗った生徒は出て行った。

あつけにとられたケン太に、女性は笑いかけた。

「ここじゃあんなのが多いのよ。近くに由良高校つてのがあって、そこの応援団の団員が得意さんなの。あの加藤つて人、今年応援団に入ったばかりで、格好良いガ克蘭が欲しくなったのね」

そう言つてケン太のガ克蘭を眺める。

「あんた……」

彼女の視線が厳しいものになった。

「そのガ克蘭、うちで誂えたものね……そのラインは見覚えがある。きつとお祖父ちゃんの手になったものだわ」

ケン太は驚いた。

彼女はまじめな顔になり、さつさとドアに近づくと「開店中」の札を裏返しにし「閉店中」に変えた。

「そのガ克蘭、詳しく見せてもらえる？」

ケン太は頷いた。それこそ望むところである。

彼女はくすりと笑った。

「ご免なさいね、つい夢中になって。あたし、ヨーコって言うの。この辺じゃハマのヨーコで通ってる」

「高倉ケン太です」

おたがい自己紹介がおわり、ヨーコは真剣な目になってケン太のガクランを仔細に点検しはじめた。

彼女の顔が間近にあり、香水の匂いがケン太の鼻腔を擦る。ヨーコはガクランの生地をつまみ、考え込んだ。

やがて得心が行ったのか、うなずいて口を開いた。

「確かにお祖父ちゃんの作品に間違いないわ。たぶん、最後に仕立てたガクランかもしれない。最近、このガクランあなた以外の人間によって袖を通しているでしょう？」

「そんなこと判るんですか？」

「ええ、それもふたりにね。ひとりにはガクランによって拒否されたみたい。もうひとりはおなたにこのガクランを返したひとね。生地の繊維の乱れで判るわ」

「そうですか……実は、いろいろお尋ねしたいことがあるんです。いったい、この伝説のガクランというのは何ですか？」

「伝説のガクラン　そう呼ばれているのね」

ケン太がうなずくと、ヨーコは腰に手を当てた。

「それじゃこっちへいらっしゃい。長い話しになるからお茶でもいかが？」

ヨーコはケン太をカウンターの裏に案内した。カウンターを回ると、そこは家の中に続いていて、ちいさなキッチンと、ダイニングになっていた。テーブルについたケン太に、ヨーコはコーヒーを出してくれた。インスタントではない、ドリップ式の本格的なやつだった。

「あたしのお祖父ちゃんが死んだのはもう、十年前になるかしら。なにしろそのとき百を越していたから、大往生ね。でも死ぬ前に、

あたしにこの店を継いで貰いたいと遺言したので、それでこうしているわけ。当時はあたしまだ高校生だったから、こんな店の番をするのなんか厭だったけど、それでも十年たったら愛着みたいなのわいてきたわ」

ヨーコはくすりと笑った。

「あら、つい自分のことばかり……そうそうお祖父ちゃんのカクランのことよね。お祖父ちゃん、戦争中陸軍にいたの。そこで軍服のデザインみたいなことしていたの」

ケン太の表情を見てヨーコは肩をすくめた。

「陸軍って言っても判らないでしょうね。いまから何十年も前、日本は世界を相手に戦争していたのよ。当時は自衛隊ではなく、陸軍と海軍というのがあって……まあ、とにかくお祖父ちゃんはその陸軍で新しいデザインの軍服を作るよう、依頼を受けていたのね。なぜそんなこと陸軍が依頼したかというと、格好良い軍服を兵士に着せて、士気を高めようという作戦だったの」

ケン太は自分のカクランを見た。

「そうよ、そのカクランはそのときの研究の成果でもあるのよ。知ってる？ 日本の学生服のルーツは軍服だって」

「そうなんですか？」

「そうよ、セーラー服だって、もともと海軍の制服だったわ。お祖父ちゃんはその研究に心血を注いでとうとう新しい軍服を完成させたの。でも結局陸軍はその軍服の採用を見送ったの」

「どうしてですか？」

ヨーコは笑った。

「お祖父ちゃんはその軍服に理想的な兵士の性格を付与させたのね。その性格が陸軍の統制にあわなくなったと言われている。理想的な兵士の性格ってなにかしら？」

さあ、とケン太は首をかしげた。

ヨーコはさきを続けた。

「勇気、正義感、不正に対する怒り……そんな性格が兵士に与えら

れたんだけど、当時の陸軍の上部にいたひとは、そんな性格をあたえられた兵士にとっては我慢ならない状態だったというわ。お祖父ちゃんの軍服を着た兵士はことごとく上官に反抗するようになって、結局お祖父ちゃんの軍服は闇に葬られた……そのときの経験で、お祖父ちゃんはそのガクランを仕立てたってわけ」

「ぼくの父親に、あなたのお祖父さんがガクランを呉れたそうですね。なぜ、そんなことしたんでしょう？」

ヨーコはまた肩をすくめた。

「軍服は闇に葬られたけど、お祖父ちゃんは自分の研究の成果を世に問いたいと願っていたそうよ。そのガクランを着た人間は、強い正義感を持つようになる……その結果、世の中が少しでも変われば自分の研究も無駄ではない、そんなことを考えていたのかもしれないわね」

ケン太はぼつりぼつり語りだした。

「ぼくはこのガクランを着る前は喧嘩なんかしたことないんです。でもこのガクランを着るようになって、自分でも思わなかったことを次々しでかすようになって……なんだかどんどん自分が変わるように怖いんです」

ヨーコは首をふった。髪の毛がふわりと動いて目を隠した。

「ガクランに人を変えるからにはないわ。その人の隠された性格や、もともと持っていた属性を表に出すだけなの。あなた、もしかしてガクランで自分が強くなっただなんて思っていない？」

「違うんですか？」

「ガクランが引き出すのはその人のもともと持っている決断力とか、行動力のようなものだけなの。喧嘩するには、そういうものが必要だから、あなたが平気で喧嘩できるのも、そういうことじゃないかしら？ 要はあなたがガクランに支配されるか、するかね」

「ぼくがガクランに支配される……」

ケン太はつぶやいた。

ヨーコはそんなケン太の目をじっと見つめた。

「ガ克蘭に支配されるというのは、目的がないときよ。ただ強くなりた、喧嘩に強くなりたなんて考えでガ克蘭を着れば、それはガ克蘭を着るのではなく、ガ克蘭に支配されることそのもの。あなたにガ克蘭を支配するだけの目的があつて？」

ケン太は顔を上げた。

「あります！ ぼくには目的が！」

ヨーコは笑った。

「そう、それは良かった。いくらガ克蘭があなたに決断力を与えてくれても、一生着つづけるわけにはいかないものね」

疑問が顔に出たのだらう、ヨーコはにやりと笑った。

「だってあなた、学生でしょ？ 卒業してもガ克蘭を着つづけるの？」

あ、そうか、とケン太は思った。

ケン太は自分の目的を再確認した。そうだ、その目的も自分が学生であることに理由があるんだ。

ケン太は立ち上がった。

「いろいろ有難うございました。ぼく、帰ります」

「あ、待って！」

ヨーコはあわてて店へ戻ると、カウンターの引き出しを捜し始めた。

「あつた！」

叫ぶと、手に何かを持ってケン太の前に走ってきた。

「これを使って！」

ヨーコはケン太の前のテーブルにじゃらじゃらとボタンを並べた。いまガ克蘭についているボタンに比べると一回り大きく、こつこつ。そのガ克蘭を仕立てたとき、お祖父ちゃんはボタンもデザインしていたのよ。だけどその当時、ボタンを作ってくれるところがなくてね……しかたなく既製品を使うほかだったんだけど、お祖父ちゃんは死ぬ前までそのことを後悔していたわ。あたしはお祖父ちゃんのデザイン帳からこのボタンのスケッチを見つけて、ようやく

ーそろい製作してもらったの。いつかそのガクランが生まれ故郷を訪ねるだろうと思ってね。作っておいてよかったわ」

ケン太はじっとそのボタンを見つめた。

ボタンの表面にはなにも刻まれておらず、つややかな真鍮の表面が鏡のようになってまわりの景色を映している。

ボタンに映る自分の顔を見つめ、ケン太は考えた。

ガクランに支配されるか、されるか。それは着る人間によるのだろうか。

自分はどっちだろうか？

店を出たケン太はまっすぐ家を目指した。

その顔には決意の表情が浮かんでいた。

展開（前書き）

ケン太の活動が開始される。その目的とは……。

展開

翌朝、千石高校の校長室にアキラの怒声が響き、キヨシとケイスケはうへえ、と首をすくめた。

「ガクランを返してきた、だとお！」

アキラは激昂していた。

珍しいことである。かれが感情を人前であらわにするのは、年に何度あるだろう。

「馬鹿っ！ お前はなんて馬鹿者なんだ！」

キヨシは不服そうに口をまげ、上目がちにアキラを見ていた。その態度がさらにアキラをいらいらさせていた。

「なんでそんなことしたんだ。言ってみろ！」

「おら……」

もぐもぐとキヨシは口を動かした。

「あのガクラン、着る資格はないと思って、やっぱり持ち主に返すほうがいい……そう思ったんだ……」

キヨシはうつむき、腹のところで両手を組み合わせもじもじしていた。

「お前、あれを着たのか？」

アキラの口調が一変して穏やかなものになった。キヨシはにいつ、と笑いうなずいた。

「うん、おら着てみた」

「よく腕が通ったな。お前には小さすぎはしなかったか？」

「そんなことないでや。最初小さいかと思ってたけど、着ているうち身体にあってきたんだ」

アキラはケイスケを見た。

「ケイスケ、お前キヨシがガクランを着たところを見たのか？」

ケイスケは點頭した。

「へい、キヨシさんがガクランを着たところ見ました。サイズはぴ

ったりでしたよ」

アキラは考え込んだ。

「妙だな……ケン太とキヨシでは体型に違いがありすぎる。それなのにぴったりサイズが合うとは」

「兄ちゃん、おら……」

アキラはきつとキヨシを睨んだ。キヨシはまた首をすくめた。

「もういい！ 部屋へ帰ってろ。おれはひとりになりたいんだ」

キヨシとケイスケの目が合った。

うなずきあい、そろそろと退出する。

ひとりになったアキラは立ち上がった。

窓際に歩み寄ると、じつと外を眺めた。

校庭では、千石高校の生徒たちが整列し、密集隊形をとって行進の練習をしている。手足をいっせいに動かし、まるで軍隊である。

アキラにとつては、これは軍事訓練であった。

いつの日か、かれはこの私製の軍隊で世の中につって出る気でいる。

かれは本気で日本を征服する気でいた。それが政治的な結社を通じてか、あるいはクーデターを起こしてか、いまは判然としないがアキラは権力を握る気でいる。

「いつの日か……」

つぶやき肩をすくめる。

と、背後の気配にアキラはくるつとふり向いた。

開けっ放しのドアから、IPPACHIの顔が覗いていた。

「お前は……？」

「へへっ、IPPACHIでございます。こんち、ご機嫌をうかがいにまいました」

アキラはうなずいた。

「そうか、なにやら情報屋みたいなことしているやつがいると聞いたが、お前か」

IPPACHIはひよいひよいと軽い足取りで室内に入り込むと、ぼん

と額をたたいた。

「へいお察しの通り、みなさまのためにいろいろ噂あつめ、調べもの、なんでもやっております！」

アキラはどっかりとデスクの向こうの椅子に腰をおろした。

「なにか情報があるか？」

「へい、伝説のガ克蘭について新しい情報が入りましたんで」

「なにっ！」

アキラは身を乗り出した。

「へへっ、お知りになりましたそうでございますな。お話ししますか？」

「喋ってみる。気に入ったら情報料を払ってやる」

「それでは……あのガ克蘭の素性がわかりましたんで……」

「素性？ あれはケン太が父親から譲り受けたと聞いているぞ」

「そうでございますよう？ しかし、その父親はどこからガ克蘭を手に入れたつてことは知っておりますか？」

アキラが首をゆっくりふると、イツパチはしてやったりといった顔になった。その顔を見て、アキラは苦い顔になった。どんな相手でも、劣勢になることは好まないのだ。

イツパチはケン太を尾行して、ある服飾屋にたどり着いたことを話した。

「どうやらその先代の主人が伝説のガ克蘭の製作者らしく思えますな。主人はとうに死んで、いまはその孫娘が店を継いでおります。そこでケン太はガ克蘭の秘密を聞いたようです」

「お前、聞いたのか」

「へい、いまはこんなものがありました……」

イツパチは懷から盗聴器のようなものを取り出した。

「なにしろこいつは壁を通して向こうの会話を聞き取ることができるといふ優れものです。ばっちり聞きましたよ。それによりますとですね……」

そう言つと店での会話を繰り返した。

アキラはうなずいた。

「ふむ面白い。その店のことは噂で聞いたことがある。なんでも港町で、応援団とか番長、スケ番に絶大な人気がある店があるとか。そうか、その店が伝説のガ克蘭の生まれた場所か……」

「いかがでございますよう？ お氣に入りましたでしょうか？」

「氣に入った。情報料は払ってやる」

アキラは立ち上がり、ポケットから金を出してIPPACHIに近づいた。

IPPACHIは両手を出して、それを受け取る姿勢になった。

そのIPPACHIの手を捻りあげ、アキラは無理やり自分の方へ顔を向けさせた。

アキラの顔がIPPACHIの間近にある。

その目の物凄さに、IPPACHIの顔に冷や汗が噴き出した。

「確かにお前は役に立ちそうだ。だがおれに役に立つ者は、たいがいおれの敵にも役に立つことがあるものだ」

「な、なんでござんす？ あ……あつしは……」

「判っているだろう？ タツヲのことだ！ おい、目をそらしたな。お前はタツヲにも情報を持っていくつもりだろう？ そうすれば、おれとタツヲ、ふたりから金をせびることができるからな。お前はおれたちふたりを手玉にとっていい氣になっているが、そうそう幸運が続くとはだれにも言えないぞ！」

アキラは荒々しくIPPACHIの身体を離れた。

IPPACHIはよろよろとなって、床に座り込んだ。その目の前にアキラは金をばらまいた。

「とれ！ 約束だ。金は払ってやる」

有難うございます……それでもIPPACHIはつぶやいた。

アキラはもうIPPACHIから関心をなくした、という様子でさつさと廊下に出ると外へ向かった。

取り残されたIPPACHIの表情に憎々しげな感情があらわになった。いつもにこやかなかれには似合わず、猛々しいといっていい表情だ。

った。

IPPACHIはつぶやいた。

「へっ、いまに見てる……いつかお前の尻尾を掴んでやるからな……」

……」

さつと立ち上がるといつもの柔和な表情に戻り、校長室を出て行った。その顔からはだれにも内心の動きを知ることとは出来ずにいた。

そのころ……。

赤星高校の校長室では双子の姉妹の喚声があがっていた。

「赤星高校を元通りにするんですってえ！」

双子は目をきらきらさせケン太を見上げた。

ケン太はうなずいた。

「そうさ、ぼくときみら三人だけが赤星高校の生徒だなんて、少なすぎる。なんとか生徒を集めよう」

うんうん、と双子はうなずいた。

隣りでは校長が布団に寝たままになっているが、その会話を耳にして目を見開いた。

ケン太は校長に向き直った。

「校長先生、赤星高校の生徒名簿なんて残っていますか？」

校長はうなずいた。

「もちろんじゃと。しかしそんなもの、どうするのかね？」

「赤星高校を辞めた生徒がほかの高校に転入したら連絡がきますよね。その高校から」

「そりゃ、まあ……」

「しかし転入しないままでしたらどうでしょう？ その転入手続きをしなかった生徒を尋ね、復学を薦めるんです」

校長は「ほ！」というように口をすぼめた。

双子は顔を見合わせた。

「でも復学したくない、って言われたらどうします？ いま赤星高校は……」

赤星高校は千石高校によって占拠されたも同様になっている。そのため本来の生徒は学校に来る気をなくし、辞めてしまった。

ケン太は笑った。

「そのことはぼくがなんとかする。いずれやつらをたたき出すつもりだが、そのあと生徒を受け入れるため、訪ね歩こうというわけさ！」

ふうん、と双子は顔を見合わせうなずいた。そしてにつこりと笑った。

「素敵！ またみんなと一緒に登校できるのね！ エミちゃん！ それを受け、エミが嬉しそうにうなずいた。

ああ、こつちがユミか……。

ケン太はいまだにユミとエミの区別がつかない。

「あたし、もとの女友達に話してみます！」

エミは手をたたいた。

ユミが立ち上がり、パソコンの前にすわり画面を立ち上げた。

ファイルから生徒名簿を選び、プリンターで印字する。

「できました。これが生徒名簿です！」

ユミから出来立ての生徒名簿を受け取り、ケン太は立ち上がった。さあ、赤星高校の再生第一歩である。

これがケン太の目的だった。

ケン太とユミ、エミのふたご三人は連れ立って外へ出て行った。それを見送る校長の目に嬉し涙がひかっていた。

セントカイン（前書き）

赤星高校を立て直すという計画のため、ケン太はもと生徒会長を尋ねる。その生徒会長は……。

セントカイン

三人は電車に乗って移動した。

車内でケン太は生徒名簿に見入り、ある名前に注目した。

「この比呂英雄というのは生徒会長ってなっているけど、まだほかの高校に転入していないのかい？」

ケン太の両側にユミとエミが座り、名簿を覗き込んでうなずいた。ユミが口を開く。

「千石高校の生徒がやってくる前は、いろいろ生徒会長として活躍していました。とても熱心で……」

エミがそれを受けた。

「ええ、生徒たちからの信頼も厚かったですわ！」

ふうん、とケン太は顎を撫でた。

「それじゃ最初にこの比呂という生徒に話をしよう。生徒会長をしてたくらいだから、高校を元に戻すということには賛成してくれるんじゃないかな」

そうですね、とふたごは賛成した。

やがて目的の駅に電車は到着し、三人はホームに降り立った。

駅前の案内板で住所を確認して歩き出す。

住所によると駅からはそんなに遠くはなかったが、坂道を登っていく必要があった。比呂英雄の家は丘陵を造成した新興住宅街にあったのである。

てくてくと歩いていくとようやく目的の住所にたどり着く。

造成したばかりらしく、丘陵は土がむきだしで、植えられた芝生もまだ根付いてはいないようだった。背後の山に何本か照葉樹が植えられているがまだ林を形成するほどは育ってはいなかった。

家と家の間隔はひろく、やや閑散とした印象だ。

比呂　と書かれた表札の下にインタホンがあり、ケン太はボタンを押した。

すぐ応答があり、女の声がした。

「どなた？」

声の調子から母親だろう。ケン太はインタホンに話しかけた。

「赤星高校の生徒で高倉ケン太といえます。比呂英雄さんにお目にかかりたいのですが……」

「……」

インタホンの向こうで沈黙している気配がした。

「赤星高校……あの子はいまいません」

「そうですか……」

どちらへと問いかける前に玄関のドアが開かれた。

ケン太の母親とほぼ同じ年令だろう。

やや太り気味の、地味なセーターを着た女がケン太たちを怪訝そうに見やっていた。

ケン太たちはあわてて頭をさげた。

やがて彼女はなにか決心したのか口を開いた。

「あの子……またお友達と山へ行ってしまったています。なにか特訓とか言って……」

「特訓？」

ケン太は首をかしげた。

もと生徒会長が特訓？

なんのことだろう。

母親は裏手にある山を指差した。

「あそこに行っているんです。なにか危険なことしているんじゃないかと心配なんです。一度、どこへ行くのか後をつけたんですけど見失って　お願い、なにをしているのか確かめて下さいませんか？」

わかりました、とケン太はうなずいた。

踵を返し歩き出す。

ふり返ると、英雄の母親は心配そうな表情で三人を見送っていた。

山は造成に取り残されたらしく、雑木林がひろがり道はついてはいたがほとんど踏み分け道といってよく、した生えが生い茂って歩きにくかった。その中をがさがさと登っていくと、やがて「立ち入り禁止」と書かれた看板があった。文字は手書きで、看板自体も手製のものらしい。ケン太はユミとエミを見た。ふたりはうなずいた。なにかありそうだ。

看板を通りすぎるとコンクリートの建物があつた。廃墟らしい。

窓のガラスはすべて抜け落ち、長年の雨風にさらされ、白茶けたコンクリートが建物の骸骨のようである。足もとには散乱したコンクリートの破片がうず高く積もり、侵入者を拒否しているようだ。そのとき建物の上部から声が降りかかった。

「だれだ！　ここはセントカインの秘密基地だぞ！」

はっ、と見上げると建物の屋上部分からひとりの男がこちらを見下ろしている。赤星高校の制服を着ていた。

ケン太は声を張り上げた。

「ぼくは赤星高校の高倉ケン太。比呂英雄さんに話をしにきた！　あんたが比呂英雄さんか？」

男の顔に驚きの表情があらわれた。

「赤星高校？　まだそんなのがあつたのか」

そう言うときケン太の背後にひかえているユミとエミに視線をやった。

「そのふたりには見覚えがあるな。校長の孫と聞いているが」

「あたしユミです！」

「あたしエミです！　英雄さん、一緒に赤星高校を元通りにしませんか？」

「英雄さん、なにがあつたんだ？」

英雄の背後から声がして、四人の生徒が姿をあらわした。

男が三人、女がひとり。みな赤星高校の制服を着ていた。

英雄は中肉中背で、ハンサムといっていいほど整った顔立ちをし

ている。あとから現れたのはやや肥満体の男がひとり、小柄な油断なさそうな顔つきの男子生徒、皮肉そうな笑みを浮かべている長身の生徒。それにアイドル並みの美貌の美少女だった。

四人は英雄を中心にずらりと屋上に勢ぞろいしてじっとケン太たちを窺っていた。

「そちらへ行つて良いですか？」

ケン太が呼びかけると英雄はうなずいた。

「ああ、とにかく話しだけは聞こう」

三人は建物の中へ入り込んだ。

内部は外と同様に荒廃している。

天井からコンクリートが落下したのか、床は足の踏み場もない。

それでも英雄たちが時々来ている証拠に、わずかな道が出来ている。階段を登り、屋上へと移動した。

屋上では五人が待っていた。

「赤星高校を元通りにするんだって？」

まず英雄が口火を切った。

ケン太はうなずいた。

英雄はちよつと眉をひそめた。

「判らないな、なんでいまごろ赤星高校なんだ。あの高校は千石高校と万石高校というふたつの高校の勢力争いにまきこまれ、事実上機能していないじゃないか。生徒もそのふたりだけと聞いている」
「ぼくが今年入学して三人です」

くくつ、と皮肉そうな笑みを浮かべていた長身の男子生徒が声をあげて笑った。

「面白いな！ たった三人でなにが出来る？」

ケン太はその男を見た。

「いまは三人でもいずれ生徒がもどれば四人になるかもしれない。四人集まればもっと集まるかもしれない。そうして、千石高校の連中を追い出すことができれば、元に戻る……そうじゃないですか？」

まともに反論をうけ、男子生徒は目を白黒させた。

小柄な生徒が口を開いた。

「英雄さん、こんなやつら相手にすることないですよ。赤星高校がどうなるかと、おれたちセイントカインの活動は変わらない。そうじゃないですか？」

ケン太は英雄に尋ねた。

「そのセイントカインってなんですか？」

五人の間にすばやい目配せが交わされた。

英雄の口もとにうずうずとした笑いが浮かぶ。どうやらだれかに話したくてたまらなかったようだ。それがケン太たちがあらわれたので、機会がおとずれたというわけだ。

「それじゃ教えよう。みんな！」

おう！ と、五人は声をあわせた。

ばたばたと足音をたて、五人はケン太を無視して階下へ消えた。

あつけにとられていたところ、急にあたりに音楽が鳴り響いた。

最初はトランペットの序奏がはじまり、ついでティンパニーの力強いリズムがはいる。シンセサイザーがさまざまな主旋律をかなで、混声合唱の歌声が響いた。

セイントカイン！

セイントカイン！

学園の正義はぼくらの手で守るんだ！

番長、スケ番追い出して、静かな高校生活取り戻そう！

勇気をふりしぼれ、顔をあげよう！

さあ立ち上がれ、セイントカイン！

ただだつ、と階下から足音が近づき、五人のあらたな顔ぶれが姿をあらわした。

みな色分けされたユニホームを身につけ、顔はマスクで覆っている。

「セイント・レッド！」

「セイント・ブルー！」

「セイント・イエロー！」

「セイント・ブラック！」

「そしてセイント・ピンクよ！」

五人はケン太たちの前に勢ぞろいするとさっとポーズを決めた。言葉どおり、五人はそれぞれ色づけされたユニホームを身につけている。全員が被っているマスクはすっぽりと顔を覆うもので、表情が読めない。

五人がポーズを決めた瞬間、ちゅどーん！ という派手な音がして、建物の前の空き地に爆発がおきた。

ぱらぱらと砂煙が降りかかり、ケン太は髪についた砂粒をあわて振り払った。

煙がはれあがると、五人はさつとそれまでのポーズを解き、ぽーんと飛び上がって位置を変え、人間ピラミッドをつくった。さつとそれを崩すと、ふたたびポーズを決める。

が、かれらのスタミナはそれで切れたのか、ぜいぜいという喘ぎ声がマスク越しに聞こえてくる。

「ぼくら生徒会は……千石高校の生徒たちが校舎を占拠したとき……なにもできなかった……。ちからなき正義は……無力だ！」

セイント・レッドと名乗った赤いユニホームの人物からマスク越しにくぐもった声が聞こえてくる。

英雄の声だった。

一息入れてふたたび話したとき、ようやくなめらかな口調になった。

「ぼくらはいつか赤星高校が元通りになることを願っていた。だからこうしてセイントカインというグループを結成し、訓練を続けていたんだ！ ケン太といったな、あんた本気で千石高校の連中をたたき出すつもりがあるのか？」

ケン太はうなずいた。

レッドは手を差し出した。

「協力しよう！ きみが見事千石高校の連中を追い出したら連絡をよこしてくれ。まだ赤星高校に戻りたいと思っている生徒は沢山いる。ぼくらがかれらを復学させるよ。約束だ！」

ケン太とレッドは固い握手を交わした。

山から降りてケン太とユミ、エミの三人は駅へと歩いていった。坂道の向こうにケン太はある人物を認め声をかけた。

「IPPACHIさんじゃないですか？」

相手はぎくりと立ち止まった。

いけねえ、という表情が瞬間浮かぶ。

が、すぐいつもの愛想良い笑顔になり手をすりあわせた。

「IPPACHIさんなんぞ他人行儀じゃないですか！ IPPACHI、と呼び捨てに願います。これはこれは偶然ですねえ！」

えへへ……と腰をかがめ近づいた。

ケン太の側に来て歩き出す。

「ええ、こんちどんな御用で？」

ケン太は比呂英雄とセイントカインたちのことを話した。

IPPACHIは大げさに仰け反って驚いて見せた。

「そりゃあ、たいしたもんだ！ 赤星高校を立て直そうってケン太さんの意気にIPPACHI正直感服しましたよ！ いや偉い！ 見上げたもんだ！」

ユミとエミはケン太にささやいた。

「ねえ、ケン太さん。このIPPACHIってひとの着ているのは千石高校の制服よ。気をつけなきゃ！」

IPPACHIはへへっ、と笑って額をぼんとたたいた。

「おそれいりやの鬼子母神でやんす！ たしかにあっしは千石高校の生徒でござんすが、ケン太さんの敵じゃございませんですよ。いや、むしろケン太さんをひそかに応援してんで……」

「どうして？」

ケン太が問うとIPPACHIは顔を上げた。

「千石高校のアキラは高校を恐怖で支配しています。あたしやそれが我慢ならないんですよ！生徒も口には出さないけど、いつかあいつを追い出したいと思っていてとあたしや睨んでいるんです」

「でも千石高校はいまはないってアキラが言っていたけど……あそこにいるのは学生じゃなくて社会人だと……」

イッパチはくすりと笑った。

「ケン太さんは人が良いですなあ！アキラがなんと言おうと千石高校はちゃんとありますよ。あいつが真実を言っていたとどうして思うんです？」

ケン太はあつけにとられた。

ではあれは嘘だったのか！

じぶんはアキラの嘘に躍らせられ、ガクランを手放すはめになったということになる。

「じゃ、アキラも同じなのか？あいつもおなじ学生……？」

イッパチはうなずいた。

「あたりまえでさあ！もつともアキラの親は大金持ちでね、それでアキラもふんだんな資金を動かして千石高校をじぶんのものにしたと言われておりやす。親はアキラのしていることを黙認しているようで、ま、道楽と想っているんでしょう」

話しているうち駅に着いた。

切符を買うケン太たちをイッパチはそれではこれでお別れですと改札で見送った。

電車に乗り込むのを確認したイッパチの顔はなにかを考え込んでいるものだった。

始動（前書き）

とうとうケン太は赤星高校から千石高校の生徒を追い出しにかかる。
一気に決着をつけるため、 IPPACHI に伝言を頼むのだが……。

始動

その学生服を着た客が入店してきたのを見たヨーコは、なにかひやりとする予感をおぼえた。

冷酷さが顔に出ているその客は、ほかの客など目に入らぬ様子で、まっすぐカウンターに近づき、口を開いた。

「ガ克蘭をつくって欲しい」

そう言うと言わずに手を後ろに組み、背筋をのばした。

「どのようなご注文でしょうか」

それでも客は客だ。ヨーコは丁寧な口調になった。

「最高のをだ！ デザインはいま着ているものを踏襲して欲しい。ただし、戦闘用で頑丈なものがいる」

ヨーコは眉をひそめた。

「そのようなご注文は……」

「高倉ケン太にはタダで渡したと言っのに、おれには作れないというのか？」

「あなた、どなた」

彼女の眉間がけわしくなった。

ケン太の来訪はヨーコの記憶に新しいものだった。この店にやってくる客は、たいてい話しの内容は格好良いか、悪いか。ガ克蘭は似合うか、似合わないかわからず、偏差値の低さが如実にあらわれた喋り方しかできないのに対し、ケン太はごく普通の会話が出来た。

だが、この客ときたらじつに横柄だ。高々と顔をあげたその客を見ているうち、ヨーコはだんだん腹が立ってきた。

彼女のそんな気配をさとしたのか、その場にいた客たちが近寄ってきた。店内にぴんと張り詰めた緊張感が漂う。

「おれは千石高校のアキラ、というものだ」

ヨーコの顔に理解の色がうかぶ。千石高校のことは噂で聞いてい

る。なんでも万石高校と勢力争いを繰り広げているとか。あのケン太もそんなこと言っていたような……。

その名前を聞いた客たちはあきらかにひるんだ様子だった。アキラと名乗った客は、じろりとかれらを見た。他の客はアキラの視線にびくつとなつてそそくさと退却していった。店内にはもう他に誰もいない。アキラとヨーコ、二人きりになった。アキラはまた話しはじめた。

「いずれケン太とは勝負しなくてはならない。その時のため、戦闘用のガ克蘭が欲しいのだ。作ってくれるな？」

ヨーコは首をふった。

「いやです！ この店のガ克蘭は喧嘩のためのものではありません
ん」

「ケン太のガ克蘭は違うというのか？」

言われてヨーコはぐつとつまった。

アキラはにやつと笑った。

「聞いたところによると、ケン太のガ克蘭はあんたの祖父が造つたものらしいな。そこで孫娘のあんたが店を引き継いでいる。ガ克蘭もじぶんで仕立てていると言う。なあ、祖父さんの腕をじぶんが越えることができたらどんな気分かね？」

ヨーコの顔につと胸を突かれた、という表情がうかぶ。

そうだ、そうなればじぶんが祖父の作品と勝負することになる。

この店を引き継いで十年あまり、客の注文でいろいろなデザインのガ克蘭を仕立ててきた。その間、つねに頭の隅にあったのは祖父のデザインであつた。じぶんの作品は祖父のものにくくらべてどうなのか、劣っているのか、勝っているのか、いつも考えていた気がする。

その表情を読んだのか、アキラがふたたび口を開いた。

「どうだ、やるかね？」

ヨーコは顔をあげた。

「やります！」

言ってみて自分でも驚いた。

そう、自分はやる気になっている。

「ただし戦闘用というご注文はお引き受けできませんわ」

「なぜだね？」

「あの伝説のガ克蘭も戦闘用などではないからです。あのガ克蘭は着用者の特性を引き出す一助になり mais けど、決して力を増したり、ましてや喧嘩に強くなると言う機能は持っていないせん」

「しかしケン太はあれを着てから明らかに性格が変わったぞ。喧嘩だつてやったことがなかったのに、着てからは驚くほどの喧嘩上手になったというではないか」

「正義感、義務感、決断力を引き出したに過ぎません。ケン太さんにはもともとそういう素地が備わっていたのです。それが表に出なかっただけで、ガ克蘭はそれを引き出したのです。お間違いないよう」

アキラはふん、と肩をすくめた。

「正義感とはかく、おれには決断力は充分備わっているつもりだ」
そうでしょうね、とヨーコはうなずいた。

かれには決断力はふんだんにありそうだ。むしろありすぎるくらいだ。

アキラは妥協した。

「それならいい。無理は言わない。それなら打撃などに耐ええるような生地で仕立ててくれ。ただし外からはつきり判るようなサポーターとか、防具はつけるな。あくまでノーマルなガ克蘭に見えるよう工夫してくれ」

難しい注文だった。

しかし注文は難しいほどやりがいがある。ヨーコはうなずいた。

アキラの採寸をおわり、かれが帰ってからヨーコは作業場にもどった。店先に「閉店」の看板をさげ、ここにこもるつもりでいる。棚にガ克蘭のための生地や、針と糸、アイロン台、そしてミシ

ンが置いてある。ミシンはふつつ、電動を使うのだが、彼女は手縫いの味を出すため、昔の足踏み式のをわざわざアンティーク・シヨップで探し出して使っている。

作業場にはほかに仮縫いのためのマネキン、刺繍のための糸、生地を染めるための染料、そのほかこまごまとした道具がところせましと置かれていた。

いまでもどこになにかがあるか、目を瞑っていても判るほどだ。なにしろ小学生のころから仕立ての仕事は祖父に仕込まれたのである。小さな本棚にはその祖父が残したデザイン・ノートが並んでいた。ヨーコはその中の一冊を取り出し、中を開いた。

様々なスケッチのなかに、あきらかに伝説のガ克蘭の原型とおぼしきデザインがあった。

そのラインは今見ても革新的で、彼女のよく訓練された目でやつと識別できるような微妙なカットが施されている。

他の棚に詰め込まれているのは型紙である。

これも祖父の自筆だ。

それらをひろげ、一枚一枚丁寧に目を通していく。

型紙の最後に伝説のガ克蘭の型紙があった。祖父はこの型紙に心血をそそいだのだろう、小さな字でいろんな心覚えのメモが書かれていた。

懐かしい直筆の字を見ているうち、作業場にいまはなき祖父の息吹が蘇ってくるようだった。

「やるわ、お祖父ちゃん。あたし、お祖父ちゃんの伝説のガ克蘭を越えるようなガ克蘭を仕立ててみせる！」

ヨーコはつぶやくとやにわに生地をひろげ、鋏を取り出すと目にもとまらぬ速さで裁断をしばじめた。

「とうとうおっ始めやがったな……」

赤星高校の屋上から校庭を見下ろし、 IPPACHI はにやにや笑いを浮かべつぶやいた。

校庭からは派手な叫び声、ものがぶつかる音、ばたばたと慌てるような足音が交錯していた。

どどつ、と一階の玄関から数十人の学生服の男女が吐き出され、その後を真つ赤なガクランを着用したケン太が追つていく。

たちまちケン太は男女に取り巻かれた。

輪になったかれらはケン太を中心に、野郎……とか、手前……とかしきりに叫び興奮している。

「やだねえ、あいつらのボキャブラリーは貧困で……もうちょっと、気の利いたセリフは言えないものかね？」

野郎、手前……かれらの口にするのはたった二語である。おそらくそれ以外の語彙は持つていないに違いなかった。

取り巻いている連中は手に手にいろんな武器を持っている。バット、チェーン、ヌンチャクなど。

対するにケン太は何も持つていない。

ヌンチャクを持った男がその手を振り上げ、喚き声をあげ襲いかかった。

ぶん、と音をたてるヌンチャクをケン太はさつと身を沈めよける。ぎりぎりではけたりーゼントの髪の毛が数本、吹き飛ばされた。

身を沈めたその勢いでケン太はどん、と肩から体当たりをくれた。男子生徒はわっ、と叫びながらすっ転んだ。

手からヌンチャクが離れて飛んだ。

それを空中で受け止めたケン太は、きりきりと振り回す。めまぐるしい速さでヌンチャクはケン太の身体のまわりを動き回った。

それをあつけにとられ、取り巻いた男女は見つめていた。

ばしつ、と音を立てケン太はヌンチャクを脇に挟み込み、ポーズを決めた。

くいくい、と手の平を使つておいでおいでをする。

「くそお……！」

挑発され、男子のひとりが顔を真つ赤に染め、襲いかかった。手にはバットを持っている。

そのバットを両手で掴み、横薙ぎに振り払った。

かん、と乾いた音をたてバットとヌンチャクが空中で噛みあった。ケン太はヌンチャクを振り下ろした。

「ぎゃっ！」

バットを握った男子生徒の膝に命中していた。

両手で向こう脛をかかえ、転げまわる。

「痛え……痛えよお！」

そりゃ痛いだろう。俗に弁慶の泣き所という神経の集まった場所である。

それを見ていたほかの生徒たちはあきらかにひるんでいた。

セーラー服の女子生徒は叫んだ。

「なにしてんだよ！ あんたら男じゃないのかい？ ひとりになに愚図愚図してんだ」

そう言われてなにもしないわけにはいかない。

かれらは素早く目配せを交し合い、同時に襲いかかることに決めたようだ。

わあ、と一斉に声をあげケン太めがけて殺到していく。

ぶん、ぶん、ぶん！

ケン太はヌンチャクを振り回した。

がっ、ごきっ！

たちまち額をおさえる者、手首をおさえる者、あちこち打たれたところをおさえ、うめき声をあげた。

ひいひいと泣き声があがり、すっかりかれらからは戦意が喪失されていた。

それを見て女子生徒はすっかり狼狽していた。

からん、とケン太はヌンチャクを手から放した。

「女相手には喧嘩はするつもりはない。そいつらに手当てしてやってくれ。骨はおれていないから」

畜生……とかなんとかつぶやきながら、女子生徒は倒れている男子生徒の肩を引き起こし、なんとかそこから逃げていった。それに

ケン太は声をかけた。

「ここは赤星高校だ。きみらの本来の高校に戻ってもうここには来るんじゃない！」

ケン太に倒された生徒たちは恨めしげな目になって逃げていった。ぱちぱちぱち……。

ケン太は上を見上げた。

イッパチが拍手していた。

「いよう！ やりますねえ！ あっという間に片付けておしまいになった……さすがケン太さん！ いやあ、お強いですなあ！」

「そんなこと言って、アキラに叱られないのかい？」

ケン太の言葉にイッパチはぺちん、と額を叩いて見せた。

「あたしなんぞ、アキラさんなんか問題にするもんですかね。あつしはただの情報屋で、便利屋でござんすからね。ただあたしゃ、強いお方が好きってだけのお調子者でござんすよ！」

へへっ、と笑い屋上から消えた。

ほどなくイッパチは一階の出入り口に姿をあらわした。

「どうします？ これから。あいつらはここからたたき出したとはいえ、アキラさんはそうそうあきらめるとは思えませんよ」

「きみはやつがどう出ると思うんだ」

「さあてね、こうなるとアキラさん自ら乗り込んでくる……ってこともありですなあ」

「そうか、それならこちらの望むところだ。ぼくも一気に勝負をつけたいからな」

「勝てるおつもりで？」

イッパチは上目がちになった。

ケン太は首をふった。

「わからない……でもやらないかぎり、この赤星高校は元に戻らないだろう。だからやるしかないんだ」

そう言つとケン太はイッパチを見つめた。

「イッパチ！ 頼みがある」

へっ、とイッパチは小腰をかがめた。

いつの間にかケン太はイッパチを呼び捨てにしている。そのことに気づいてさえないようだ。

「アキラに伝えてくれ。正々堂々、勝負をしよう。決着をつけるんだ」

へいつ、とイッパチは返事をした。

ケン太の伝言を受け取り、アキラはデスクの向こうから鋭い目でイッパチを睨んだ。

「決着をつけたい、とケン太が言ったのか？」

「へい、その通りで……」

ふうん、とアキラは立ち上がると窓に向き直った。

「一対一の勝負か。いかにもケン太らしい真っ正直な伝言だ……」
くるりとふり返り叫んだ。

「いいだろう、勝負に応じよう。場所、時間はお前に任せる」
「あつしに？」

イッパチはぽかんとした顔になり、自分の鼻を指さした。

アキラとの戦い（前書き）

とうとうアキラと決闘することになったケン太。しかし勝てるのだからうか？

アキラとの戦い

「アキラと一対一の勝負？ 危険ですわ！」

「そうよ、きつと罠をしかけてきますよ！」

ユミとエミのふたりはかわるがわるケン太にアキラとの勝負をやるよう忠告した。しかしケン太の決意は変わらない。

いつもの校長室である。ケン太は上がりかまちに腰をおろし、ユミとエミはかれの両側に座って話をしている。

「これはぼくが言い出したことなんだ。それにこれで赤星高校から千石高校の侵入を防ぐことが出来る。ぼくが勝ったら、もう赤星には手を出すなとアキラに言うつもりだ」

「約束を守るかしら？」

ユミは疑わしそうに言った。

それを校長は天井を見上げ、黙って聞いている。

ケン太はユミとエミを振り切るように立ち上がった。

「それじゃ、行ってくる」

「ケン太さん！」

ユミはたまらずケン太の肩をつかんだ。

ふりむくケン太にユミはポケットから火打石を取り出した。

かちつ、かちつと火打石を擦って切り火を熾す。

「ご武運を」

「有難う」

ケン太はがらりと障子を開けると校長室から外へ出て行った。

ほっとユミはため息をつき、つぶやく。

「どうしよう……あたしたち、なにもなくていいのかしら？」

「お姉ちゃん、こっそりケン太さんの後についていけない？」

「そうねえ……」

ユミは寝ている校長をそっと見やった。

校長は目だけ動かし、口を開いた。

「行きなさい。わたしはいいから……」

「校長先生……」

ふたごは目に一杯涙をうかべ、なにか言いかけた。

が、決意したように立ち上がるとケン太の後を追って出口へと向かう。

があーっ、と轟音をたて陸橋を電車が通過していく。その陸橋のたもと、干上がった川原にケン太とアキラが対峙している。

「本当に、これで最期だな？　ぼくが勝てばもう赤星高校には手を出さないと誓うんだな？」

ケン太は叫んだ。

アキラはにやっとなんて、うなずいた。

「ああ、約束する。が、お前が負けたらどうする？　貴様はなにを約束するんだ？」

言われてケン太はぐっと詰まった。

黙っているケン太に、アキラはおいかぶせるように声をかけた。

「そうだな……もしおれが勝てば、お前はおれの部下になる、というのはどうだ？　お前はなかなか見所がある。いずれおれが社会でことを起こす際、幹部としてとりたててやつてもいいと思っているんだ」

「なにをするつもりなんだ？」

アキラは肩をすくめた。

「それは決まっていけない。政治家になるか、会社を興すか……それとも革命家になるのも面白いかもしれん。お前はどうかんだ。このまま大人になって、社会の歯車になるのが望みなのか？」

「そののどこがいけない？」

「お前は男じゃないか。男と生まれたからには、なにか自分の生きた証しを打ち立てたいとは思わないのか？　よく言うじゃないか。失敗した革命家は犯罪者であり、成功した革命家こそが社会の改革者と呼ばれる。おれはどっちでもいい。この社会をひっくり返し

てやるのがおれの望みさ」

「そんなの断る！」

「おやおや……、とアキラは首をふった。

「まったく話しの合わない男だな、お前は。しかたない、少々痛い目にあってもらわないといけないようだ」

と、アキラはふり返った。

「だれだ！　そこにいるのは？　出て来い」

陸橋の陰からのっそりと姿を現したのはキヨシだった。あいかわらずケイスケをかたわらに引き連れている。

ケン太はアキラを見た。

「ひとりっという約束だったろ」

アキラはぶるつと首を横にした。

「馬鹿な！　おれがあいつらの手助けなど必要とするわけがない！　キヨシ、なぜ来たんだ？」

「お、おら……」

決まり悪そうにキヨシはもじもじとしている。

「こんな喧嘩、やめて貰いたいって思ったんだ……」
「なにい？」

キヨシはにやつと笑った。

きれいに生えそろった前歯がきらりと光った。

「キヨシ……いつ歯医者にいったんだ？」

「行かねえよ。そのガ克蘭着て、生えてきたんだ。そのガ克蘭はすげえよ。おれ、生まれ変わったんだ！」

アキラは目を細めた。

「なるほど、それで恩に感じたというわけか？　おれたちの決着をつける戦いを止めて、お前はとうしたいんだ？」

「わ、わからねえ……でも、兄ちゃん間違っている……と、思う」
ふん、とアキラは鼻で笑った。

「お前は考えるな！　考えるのはおれの役目だ。いいか、そこで立っている。余計なことはするんじゃないっ！」

そう言ってアキラは向き直り、だしぬけにケン太めがけて走り出した。

ケン太は身構えた。

瞬間、アキラの長身が宙を舞った。

はあーっ！

裂帛の気合がアキラの口から鋭くはなたれ、空中をつたいケン太に殺到した。

その気合と共にアキラは空中で前蹴りを放った。

まるで機関銃の弾丸のようにアキラの前蹴りは構えたケン太の前腕部を何度も蹴った。

その勢いに、ケン太はぐらつとよろめき数歩、あとずさった。

が、ガードしただけではなかった。

とん、と地上に降り立ったアキラにケン太は廻し蹴りをくらわしたのである。

ばしっ！

ケン太の爪先がアキラの腹部に命中した。

鳩尾に完全に決まっている。

本来なら、アキラは身をおりまげているはずだった。

その動きを予想してケン太はつぎの攻撃に移るつもりだったのである。

が、かれは平然としていた。

ケン太の表情が一瞬こわばっていた。

「どうした、それだけか？」

せせら笑いを浮かべたアキラは、腕をふってケン太の頬を張り飛ばした。

がくん、とケン太の膝が折れた。

アキラのビンタは強烈だった。

目の前に星が飛び、ケン太の視界が暗くなる。
ばしん！

もう一度アキラのビンタが反対側の頬を張り飛ばした。

きーん、とケン太は耳鳴りがして気が遠くなる。

必死に建て直し、ケン太は猛烈なラッシュでパンチをアキラの胸板、わき腹へと叩き込む。

まるで岩を叩いているかのようだ。

アキラは仁王立ちになってケン太の攻撃を受け止めている。

「まるで効かないぞ！　それがお前のパンチなのか？　無駄無駄無駄あーっ！」

がくん！

アキラのフックがケン太の顎をとらえていた。

どさ……！

ケン太は仰向けに倒れていた。

その顔を覗き込んだアキラはゆっくりと首をふって肩をすくめた。

「所詮、喧嘩は素人だ……ふっ、つまらん！」

ケン太は完全に意識を失っている。

アキラはほっとため息をついた。

やはりヨーコにガ克蘭を仕立ててもらってよかった。

彼女はアキラに戦闘のためのガ克蘭は作らないと言ったにかかわらず、彼女の仕立てたのは見かけは学生服であるが、中身は完全に戦闘服といってよかった。

アキラの着ているガ克蘭の裏地には、衝撃を吸収する新素材の層が縫いこまれていたのである。そのため、ケン太の攻撃がいかに鋭かろうとも、アキラにまったくダメージがなかった。

さらにガ克蘭にはもうひとつの仕掛けがあった。

アキラの筋力を増幅するため、ガ克蘭には伸び縮みする素材で出来ていたのである。これにより、一種のスプリングのちからでアキラのちからは強められていた。

これで勝負あった……。

もうケン太はおれに挑もうなどと考えことはないだろう。

やるなら徹底して相手を叩きのめす。それがアキラの身上である。立ち去ろうとするアキラは、倒れたケン太が身動きするのを認め

た。

！

まさか、まだ動けるのか？

ふらりと、ケン太は立ち上がっていた。

アキラの眉がひそめられる。

やつは完全に意識を失っていたはずだ。そんなに早く意識を取り戻すはずはないのだが……？

ふらふら、とケン太はアキラにむかって歩いてくる。

まるで戦いの態勢をとってはいない。

が、アキラは本能的に危険を感じとっていた。

防御の態勢をとりかけたアキラに、ケン太はいきなり飛び掛った。その動きは出し抜けであり、かつ異様なものだった。

がくん、とまるで操り人形が動くようにケン太は両腕をのばし、防御の構えをとるアキラの腕をかくぐりその首を締め上げていたのである。

「ぐ……！」

アキラの息が詰まった。

おそろしいほどの腕力であった。

ケン太の両手の指先には信じられないくらいのかからがかかっていた。

アキラは必死に振りほどこうとしたのだったが、まるで万力が締まるようにケン太の指は縮まっていく。

ケン太の目はアキラを見てはいない。というより、なにも見えないものの目だった。

意思のない操り人形と化したケン太にアキラはぎりぎり首を絞められていく。

それをキヨシとケイスケはぱかんとした顔で見守っていた。

ケイスケがキヨシのわき腹をつついた。

「キヨシさん、どうします？ あのままじゃアキラさん殺されちゃいますよ！」

「だ……だつて、おら兄ちゃんになにもするなつて言われて……」
「そうよ！ 止めるべきよ！」

女の声にふたりは顔をあげた。

川原の、土手にふたごの姉妹が立っていた。

ユミとエミのふたりである。

ユミが叫ぶ。

「早く！ 止めないとケン太さん、人殺しになっちゃう！」

その声でキヨシとケイスケは弾かれたように飛び出した。

背後からケン太にキヨシは抱きつくと、その腕を離そうともがく。

「す……すげえ、ちからだ！」

キヨシの顔が真赤に染まった。

が、やはりキヨシは馬鹿力の持ち主だった。

締め付けていたケン太の腕が、ゆるゆるとアキラの首からはなれていく。

ほつ、とアキラは息を吸い込んだ。

ひいーっ、ひいーっ　と笛のような音をたて、なんども息を吸い込んだ。

けほけほ……と、ようやく咳き込み、身をそらせた。

ケン太はキヨシに背後から抱きかかえられつつも、アキラのほうを向いて飛び掛ろうともがいている。

「いまのうち、お帰りなさい。戦いはドロー、それでいいじゃない」
アキラの顔色がじよじよに平静になった。

首周りをこすり、脂汗を浮かべている。

ちら、とキヨシとケイスケを見る。

「くそ……お前ら、ただじゃおかないからな！ 覚えておけ！」

捨て台詞を吐くと、後を見ずに土手を登っていった。アキラの姿が完全に見えなくなると、ふたごはキヨシのほうを見て口を開いた。

「もういいわ、キヨシさん」

エミがそう言うと、キヨシは掴まえていたケン太の腕を離れた。
ぱつとケン太はふり向きざま、戦おうという姿勢をとった。

あいかわらず目はうつろなままだ。

「ケン太さん！」

「ケン太さん、目を覚まして！」

ユミとエミはかわるがわる叫ぶ。

と、ようやくケン太の目に表情が戻ってきた。

視線がはつきりし、目の前の現実がわかってきたようだ。

「ユミ、エミ……それにキヨシさんとケイスケ……」

がくり、と膝をおった。

ぜいぜいと荒い息をつく。

「ぼくはどうなったんだろう……アキラに殴られて、それで気が遠くなって……」

四人がケン太のしたことを説明すると、信じられないといった表情になる。

「そんな、ぼくがアキラを殺そうとしただなんて……」

「ガ克蘭のせいだよ！ ガ克蘭がケン太さんを守ろうとしたんだっぺ！」

キヨシが叫んだ。

ケン太はじぶんのガ克蘭を見おろした。

「ガ克蘭が……？」

伝説のガ克蘭はあれほどの戦いのあつたあとだというのに汚れも、裂けもせずまるでクリーニングが済んだすぐ後のように綺麗なままだ。

ふらふらとケン太は歩き出した。

エミが声をかけた。

「ケン太さん、どこへ行くつもり？」

ケン太はふり返った。

薄い、気弱げな笑いを浮かべている。

「ぼくには判ったことがある。この戦いはじぶんひとりの戦いだと思っていた。が、違うんだ。ひとりではできない……いや、やってはいけない戦いなんだ」

ケン太の長広舌をみなはぼんやりと聞き入っていた。

ケイスケがおそろおそろ口を出した。

「て言いますと?」

「仲間が必要だ……ぼくと一緒に、赤星高校を蘇らせる戦いに参加する仲間が!」

ふたごは一步、前に出た。

「あたしたちがいるわ! あたしたち、最初からケン太さんの仲間じゃない?」

うん、とケン太はうなずいた。

「だが、まだ三人だ。もつと必要なんだ」

キヨシとケイスケは顔を見合わせた。

「あ、あのう……おら……その戦いに参加してもいい……なんて思ってるんだな……」

そう言うつと真つ赤になった。

ケイスケは肩をすくめた。

「しょうがねえ……キヨシさんがそう言うならおれも一緒になりますよ」

ケン太は笑った。

「有難う……それじゃ行こうか」

「どこへ?」

「会いたい仲間がいるんだ。もし仲間になってくれるんならね」
そう言うつと歩き出す。

四人は顔を見合わせ、その後を追った。

イッパチ（前書き）

仲間をもとめてケン太は再びセイントカインと顔をあわせる。一方
アキラは……。

イッパチ

「アキラと一対一の勝負？ 危険ですわ！」

「そうよ、きつと罫をしかけてきますよ！」

ユミとエミのふたりはかわるがわるケン太にアキラとの勝負をやるよう忠告した。しかしケン太の決意は変わらない。

いつもの校長室である。ケン太は上がりかまちに腰をおろし、ユミとエミはかれの両側に座って話をしている。

「これはぼくが言い出したことなんだ。それにこれで赤星高校から千石高校の侵入を防ぐことが出来る。ぼくが勝ったら、もう赤星には手を出すなとアキラに言うつもりだ」

「約束を守るかしら？」

ユミは疑わしそうに言った。

それを校長は天井を見上げ、黙って聞いている。

ケン太はユミとエミを振り切るように立ち上がった。

「それじゃ、行ってくる」

「ケン太さん！」

ユミはたまらずケン太の肩をつかんだ。

ふりむくケン太にユミはポケットから火打石を取り出した。

かちつ、かちつと火打石を擦って切り火を熾す。

「ご武運を」

「有難う」

ケン太はがらりと障子を開けると校長室から外へ出て行った。

ほっとユミはため息をつき、つぶやく。

「どうしよう……あたしたち、なにもなくていいのかしら？」

「お姉ちゃん、こっそりケン太さんの後についていけない？」

「そうねえ……」

ユミは寝ている校長をそっと見やった。

校長は目だけ動かし、口を開いた。

「行きなさい。わたしはいいから……」

「校長先生……」

ふたごは目に一杯涙をうかべ、なにか言いかけた。

が、決意したように立ち上がるとケン太の後を追って出口へと向かう。

があーっ、と轟音をたて陸橋を電車が通過していく。その陸橋のたもと、干上がった川原にケン太とアキラが対峙している。

「本当に、これで最期だな？　ぼくが勝てばもう赤星高校には手を出さないと誓うんだな？」

ケン太は叫んだ。

アキラはにやっとなんて、うなずいた。

「ああ、約束する。が、お前が負けたらどうする？　貴様はなにを約束するんだ？」

言われてケン太はぐっと詰まった。

黙っているケン太に、アキラはおいかぶせるように声をかけた。

「そうだな……もしおれが勝てば、お前はおれの部下になる、というのはどうだ？　お前はなかなか見所がある。いずれおれが社会でことを起こす際、幹部としてとりたててやつてもいいと思っているんだ」

「なにをするつもりなんだ？」

アキラは肩をすくめた。

「それは決まっていけない。政治家になるか、会社を興すか……それとも革命家になるのも面白いかもしれん。お前はどんなんだ。このまま大人になって、社会の歯車になるのが望みなのか？」

「そのどこがいけない？」

「お前は男じゃないか。男と生まれたからには、なにか自分の生きた証しを打ち立てたいとは思わないのか？　よく言うじゃないか。失敗した革命家は犯罪者であり、成功した革命家こそが社会の改革者と呼ばれる。おれはどっちでもいい。この社会をひっくり返し

てやるのがおれの望みさ」

「そんなの断る！」

「おやおや……、とアキラは首をふった。

「まったく話しの合わない男だな、お前は。しかたない、少々痛い目にあってもらわないといけないようだ」

と、アキラはふり返った。

「だれだ！　そこにいるのは？　出て来い」

陸橋の陰からのっそりと姿を現したのはキヨシだった。あいかわらずケイスケをかたわらに引き連れている。

ケン太はアキラを見た。

「ひとりっという約束だったろ」

アキラはぶるつと首を横にした。

「馬鹿な！　おれがあいつらの手助けなど必要とするわけがない！　キヨシ、なぜ来たんだ？」

「お、おら……」

決まり悪そうにキヨシはもじもじとしている。

「こんな喧嘩、やめて貰いたいって思ったんだ……」
「なにい？」

キヨシはにやつと笑った。

きれいに生えそろった前歯がきらりと光った。

「キヨシ……いつ歯医者にいったんだ？」

「行かねえよ。そのガ克蘭着て、生えてきたんだ。そのガ克蘭はすげえよ。おれ、生まれ変わったんだ！」

アキラは目を細めた。

「なるほど、それで恩に感じたというわけか？　おれたちの決着をつける戦いを止めて、お前はとうしたいんだ？」

「わ、わからねえ……でも、兄ちゃん間違っている……と、思う」
ふん、とアキラは鼻で笑った。

「お前は考えるな！　考えるのはおれの役目だ。いいか、そこで立っている。余計なことはするんじゃないっ！」

そう言つてアキラは向き直り、だしぬけにケン太めがけて走り出した。

ケン太は身構えた。

瞬間、アキラの長身が宙を舞った。

はあーっ！

裂帛の気合がアキラの口から鋭くはなたれ、空中をつたいケン太に殺到した。

その気合と共にアキラは空中で前蹴りを放った。

まるで機関銃の弾丸のようにアキラの前蹴りは構えたケン太の前腕部を何度も蹴った。

その勢いに、ケン太はぐらつとよろめき数歩、あとずさった。

が、ガードしただけではなかった。

とん、と地上に降り立ったアキラにケン太は廻し蹴りをくらわしたのである。

ばしっ！

ケン太の爪先がアキラの腹部に命中した。

鳩尾に完全に決まっている。

本来なら、アキラは身をおりまげているはずだった。

その動きを予想してケン太はつぎの攻撃に移るつもりだったのである。

が、かれは平然としていた。

ケン太の表情が一瞬こわばっていた。

「どうした、それだけか？」

せせら笑いを浮かべたアキラは、腕をふってケン太の頬を張り飛ばした。

がくん、とケン太の膝が折れた。

アキラのビンタは強烈だった。

目の前に星が飛び、ケン太の視界が暗くなる。
ばしん！

もう一度アキラのビンタが反対側の頬を張り飛ばした。

きーん、とケン太は耳鳴りがして気が遠くなる。

必死に建て直し、ケン太は猛烈なラッシュでパンチをアキラの胸板、わき腹へと叩き込む。

まるで岩を叩いているかのようだ。

アキラは仁王立ちになってケン太の攻撃を受け止めている。

「まるで効かないぞ！　それがお前のパンチなのか？　無駄無駄無駄あーっ！」

がくん！

アキラのフックがケン太の顎をとらえていた。

どさ……！

ケン太は仰向けに倒れていた。

その顔を覗き込んだアキラはゆっくりと首をふって肩をすくめた。

「所詮、喧嘩は素人だ……ふっ、つまらん！」

ケン太は完全に意識を失っている。

アキラはほっとため息をついた。

やはりヨーコにガクランを仕立ててもらってよかった。

彼女はアキラに戦闘のためのガクランは作らないと言ったにかかわらず、彼女の仕立てたのは見かけは学生服であるが、中身は完全に戦闘服といってよかった。

アキラの着ているガクランの裏地には、衝撃を吸収する新素材の層が縫いこまれていたのである。そのため、ケン太の攻撃がいかに鋭かろうとも、アキラにまったくダメージがなかった。

さらにガクランにはもうひとつの仕掛けがあった。

アキラの筋力を増幅するため、ガクランには伸び縮みする素材で出来ていたのである。これにより、一種のスプリングのちからでアキラのちからは強められていた。

これで勝負あった……。

もうケン太はおれに挑もうなどと考えことはないだろう。

やるなら徹底して相手を叩きのめす。それがアキラの身上である。立ち去ろうとするアキラは、倒れたケン太が身動きするのを認め

た。

！

まさか、まだ動けるのか？

ふらり　と、ケン太は立ち上がっていた。

アキラの眉がひそめられる。

やつは完全に意識を失っていたはずだ。そんなに早く意識を取り

戻すはずはないのだが……？

ふらふら、とケン太はアキラにむかって歩いてくる。

まるで戦いの態勢をとってはいない。

が、アキラは本能的に危険を感じとっていた。

防御の態勢をとりかけたアキラに、ケン太はいきなり飛び掛った。

その動きは出し抜けであり、かつ異様なものだった。

がくん、とまるで操り人形が動くようにケン太は両腕をのばし、

防御の構えをとるアキラの腕をかくぐりその首を締め上げていたのである。

「ぐ……！」

アキラの息が詰まった。

おそろしいほどの腕力であった。

ケン太の両手の指先には信じられないくらいのかからがかかっていた。

アキラは必死に振りほどこうとしたのだったが、まるで万力が締まるようにケン太の指は縮まっていく。

ケン太の目はアキラを見てはいない。というより、なにも見えないものの目だった。

意思のない操り人形と化したケン太にアキラはぎりぎり首を絞められていく。

それをキヨシとケイスケはぱかんとした顔で見守っていた。

ケイスケがキヨシのわき腹をつついた。

「キヨシさん、どうします？　あのままじゃアキラさん殺されちゃいますよ！」

「だ……だつて、おら兄ちゃんになにもするなつて言われて……」
「そうよ！ 止めるべきよ！」

女の声にふたりは顔をあげた。

川原の、土手にふたごの姉妹が立っていた。

ユミとエミのふたりである。

ユミが叫ぶ。

「早く！ 止めないとケン太さん、人殺しになっちゃう！」

その声でキヨシとケイスケは弾かれたように飛び出した。

背後からケン太にキヨシは抱きつくと、その腕を離そうともがく。

「す……すげえ、ちからだ！」

キヨシの顔が真赤に染まった。

が、やはりキヨシは馬鹿力の持ち主だった。

締め付けていたケン太の腕が、ゆるゆるとアキラの首からはなれていく。

ほつ、とアキラは息を吸い込んだ。

ひいーっ、ひいーっ　と笛のような音をたて、なんども息を吸い込んだ。

けほけほ……と、ようやく咳き込み、身をそらせた。

ケン太はキヨシに背後から抱きかかえられつつも、アキラのほうを向いて飛び掛ろうともがいている。

「いまのうち、お帰りなさい。戦いはドロー、それでいいじゃない」
アキラの顔色がじよじよに平静になった。

首周りをこすり、脂汗を浮かべている。

ちら、とキヨシとケイスケを見る。

「くそ……お前ら、ただじゃおかないからな！ 覚えておけ！」

捨て台詞を吐くと、後を見ずに土手を登っていった。アキラの姿が完全に見えなくなると、ふたごはキヨシのほうを見て口を開いた。

「もういいわ、キヨシさん」

エミがそう言うと、キヨシは掴まえていたケン太の腕を離れた。
ぱつとケン太はふり向きざま、戦おうという姿勢をとった。

あいかわらず目はうつろなままだ。

「ケン太さん！」

「ケン太さん、目を覚まして！」

ユミとエミはかわるがわる叫ぶ。

と、ようやくケン太の目に表情が戻ってきた。

視線がはつきりし、目の前の現実がわかってきたようだ。

「ユミ、エミ……それにキヨシさんとケイスケ……」

がくり、と膝をおった。

ぜいぜいと荒い息をつく。

「ぼくはどうなったんだろう……アキラに殴られて、それで気が遠くなって……」

四人がケン太のしたことを説明すると、信じられないといった表情になる。

「そんな、ぼくがアキラを殺そうとしただなんて……」

「ガ克蘭のせいだよ！ ガ克蘭がケン太さんを守ろうとしたんだっぺ！」

キヨシが叫んだ。

ケン太はじぶんのガ克蘭を見おろした。

「ガ克蘭が……？」

伝説のガ克蘭はあれほどの戦いのあつたあとだというのに汚れも、裂けもせずまるでクリーニングが済んだすぐ後のように綺麗なままだ。

ふらふらとケン太は歩き出した。

エミが声をかけた。

「ケン太さん、どこへ行くつもり？」

ケン太はふり返った。

薄い、気弱げな笑いを浮かべている。

「ぼくには判ったことがある。この戦いはじぶんひとりの戦いだと思っていた。が、違うんだ。ひとりではできない……いや、やってはいけない戦いなんだ」

ケン太の長広舌をみなはぼんやりと聞き入っていた。

ケイスケがおそろおそろ口を出した。

「て言いますと?」

「仲間が必要だ……ぼくと一緒に、赤星高校を蘇らせる戦いに参加する仲間が!」

ふたごは一步、前に出た。

「あたしたちがいるわ! あたしたち、最初からケン太さんの仲間じゃない?」

うん、とケン太はうなずいた。

「だが、まだ三人だ。もつと必要なんだ」

キヨシとケイスケは顔を見合わせた。

「あ、あのう……おら……その戦いに参加してもいい……なんて思ってるんだな……」

そう言うつと真つ赤になった。

ケイスケは肩をすくめた。

「しょうがねえ……キヨシさんがそう言うならおれも一緒になりますよ」

ケン太は笑った。

「有難う……それじゃ行こうか」

「どこへ?」

「会いたい仲間がいるんだ。もし仲間になってくれるんならね」
そう言うつと歩き出す。

四人は顔を見合わせ、その後を追った。

10

ケン太の向かったのは例の廃屋だった。

荒れ果てた建物の前で、声を張り上げる。

「セイントカインのみんな! 出てきてくれないか? 高倉ケン太です」

その声が終わらないうちに、大音量でセイントカインのテーマソングが流れ出した。

初めてここにきたキヨシとケイスケはあっけにとられ、きょときよとあたりを落ち着きなく見回している。

「セイントレッド！」

「セイントブルー！」

「セイントイエロー！」

「セイントグリーン！」

「セイントピンク！」

廃屋の屋上に五人の戦隊が現れた。

あいかわらずポーズを決め、おたがいの手をとると人間ピラミッドをつくる。

さつと離れると、ちゅどーん……という音とともに廃屋のちかくで爆発がおきる。

わつ、とキヨシとケイスケは驚いて首をすくめた。

爆発がおさまると、五人は屋上から消えていた。

気がつくといつの間にかケン太の目の前に到着していた。

「何のようだ？ まだ赤星高校は元通りになっていないんだろう？」
レッドの仮面をつけた比呂英雄が仮面越しにくぐもった声で話しかけた。

ケン太はうなずいた。

「そのことなんだが、いままでぼくは間違いを犯していたことに気づいたんだ。高校を元通りにするにはぼくひとりのちからではできない。みんなの協力が必要なんだ。だから、ぼくの戦いに参加してくれないか？」

「ぼくたち？」

五人はあきらかに戸惑っている様子だった。

「ぼくら戦いは苦手なんだ」

それを聞いてふたごが叫んだ。

「でもあなたたち戦隊なんでしょ？ セイントカインってグループ、

作っているんでしょ？ それなのに戦いたくないなんて」

ケイスケが口を挟んだ。

「さっきの爆発。すごかったなあ。あんたらあれ使ったらどうなんだ？ だれだつて爆弾だつたらビビるぜ」

レッドは首をふった。

「あれは爆弾じゃないよ。爆発に見せかけた演出なんだ」

へえ？ と、不審顔なケイスケにレッドは腰のベルトのボタンを押した。

ちゅどーん！

爆発音が派手に鳴り響いた。

「本当の爆発音はこんなもんじゃない。たいてい”ぱんっ”って大きな音が鳴るだけだ。この音は……」

ふたたび「ちゅどーん」という音。

「テレビや映画の効果音係りがひねりだした音だよ。それらしく聞こえて、迫力があるということとで使われているけど。それにあわせてエア・コンプレッサーから空気を送り込んで土ぼこりを巻き上げているんだ。第一、爆薬を使うには免許がいる。ぼくたちそんなの持っていないからな」

ケイスケはがっかりしたようだった。

「なんでえ、つまんねえの。でも、なんでいちいち爆発するんだ？」
かれらは仮面のおくで顔を赤らめ ケン太にはそう思えた
ようだった。

「だつてそりゃ、戦隊ものには爆発がつきものだからな！」

「それじゃあ、協力はしてもらえないのか……」

ケン太がつぶやくと、ケイスケが相槌をうった。

「そりゃあ、そうさね。なにしろ伝説のガクランを着ているわけじゃねえからなあ」

それを聞いたケン太の瞳がきらりときらめいた。

「そうか、その手があったか！」

全員に向け、話しかけた。

「みんな、今日のところはこれで解散だ。ぼくは行くところがあるから、これで失礼する。あとでまた会おう！」

そう言って、早足になってさっさと立ち去った。

後に残されたみんなは、あっけにとられていた。

「なにか思いついたみたいね」

「なにを思いついたのかしら？」

ユミとエミは顔を見合わせた。

ケン太はふたたびヨーコの店を訪れていた。

かれを招き入れたヨーコは、ダイニングで向かい合い、ケン太の申し入れに目を丸くした。

「伝説のガ克蘭を大量注文したい、ですって？」

ケン太はうなずいた。

「そうです。この伝説のガ克蘭は着るものに勇気と、不正に負けない正義感を引き起こす効果がある。ぼくひとりでは高校を元に戻す戦いは続けていられないけど、ガ克蘭をみんなに着せれば、全員で戦える。そうじゃないですか？」

「でも、でも……」

ヨーコは言葉を失っていた。

思いもかけないことである。

ぼつりとつぶやいた。

「そりゃあ、型紙は残っているからやってやれないことはないけど……」

「できるんですね！」

ケン太は身を乗り出した。

ヨーコは首をふった。

「でも大量生産したからって、他の人にもおなじような効果があるとは思えないわ。なにしろあたしのお祖父さん手ずから縫ったものですからね。微妙なラインとか、縫製の加減とか……きつとそのちからは失われてしまうかもよ」

ケン太は笑った。

「そうですね。それは判っています。でも、着る人間に、そのことは黙っていれば済むことです。要は気持ちの持ちよう、そうじゃないですか」

まあ……、とヨーコは苦笑した。

「あなたも悪い人になったみたいね。そのガ克兰のせいかしら？」
「どうですかね、とケン太は肩をすくめた。

ヨーコは立ち上がった。

「いいわ。あなたの提案、呑みましょう。さっそく明日から知り合いの縫製工場に頼んでみる。一週間くらいしたら、またおいでなさい。そのころになったら、お渡しできる品物ができているから」
有難うございましたと、ケン太は頭をさげた。

そのころ……。

アキラは疲労困憊した身体で、千石高校に向かっていた。

あの戦いはアキラからすべての体力を奪っていた。

おそらくヨーコの仕立てたこの学生服のせいだ。

アキラのちからを限界まで引き出す効果があるかわり、すべての体力を搾り出したのである。傍目には堂々とした歩き振りを見せていても、おそらくいまのアキラには、三才の幼児すら脅威となっていただろう。

高校の建物が見えてきて、アキラは眉をひそめた。

なにかが違う。

やがてそれに思い当たり、かれは愕然となった。

いつも校門前に立っている千石高校の制服を着ている歩哨係がない。

かわりに立っているのは万石高校の制服をきた数人の生徒である。アキラのこめかみにふつふつと血管が浮いた。

おれのいない間に万石のやつらが攻めてきたのだ！

それにしても千石高校の生徒たちはどうしたというのだろうか？

こんなときのために訓練を重ねてきたはずなのに。
まさか！

タツヲが自ら指揮をとったというのか？
それなら納得できる。

アキラは疲れた身体に鞭打ち、一步一步進んでいった。

万石高校の制服を着た生徒は、アキラを認めじろりと睨んだ。が、
手を出そうとはしなかった。

かれらの痛いほどの凝視を浴びながら、アキラは校庭に足を踏み
入れた。

そこでかれは再び信じられない光景を目にした。

かきーん！

澄んだ音が空に響き、白球が宙に舞った。

それを追って野球部の制服を着た生徒がグラブを手に駈けていく。
惜しいところで白球はグラウンドに転々とした。それを見たラン

ナーは全速力でダイヤモンドを一周し、ホームに滑り込んだ。

「セーフ！」

わあ！ という喚声が響く。

なんと野球の試合だった。

きりきりきり……！

アキラの歯が軋んでいる音だった。

かれは千石高校を手中に収めてからというものの、クラブ活動の全
面禁止を打ち出していた。かれの目的にクラブ活動など無用だから
だ。

無言でアキラは校舎に向かった。

通路を歩くと、いたるところ談笑している生徒たちの姿が目に入
ってきた。中にはふたりきりで熱心に話し合っている男女のカップ
ルもあった。無論、アキラは男女交際も禁止していた。かれらはア
キラの姿を見てぎよっとなったようだが、それでも談笑はやめよう
としなかった。

アキラは校長室を目指していた。

そこにタツヲの姿を求めて。

「やあ、アキラさん。お帰りなさい」

アキラを迎えたのはイッパチだった。かれはいつもアキラが座っているはずの、デスクの向こうに腰をすえている。

「きさま！ こんなところでなにをしている？」

アキラが怒号すると、イッパチはポケットから棒つきのキャンデーを取り出し、口に咥えた。

「なあに、現在この千石高校はあたしが管理することになったんだ。タツヲさんとの約束でね」

「裏切ったな！」

「裏切ったとは人聞きが悪い。あつしがいつ、アキラさんの部下になったというんです？ あたしやただの便利屋。アキラさんもそのおつもりだったでしょ？」

「貴様、タツヲと密約を結んだろう。それが裏切りというんだ！

この千石高校はおれの高校だ！」

「いまではそうではないですなあ」

のんびりとつぶやき、イッパチは外をながめた。

校庭では野球部、サッカー部、テニス部らの部員が熱心に練習を重ねている。それを眺め、イッパチはつぶやいた。

「ねえ、アキラさん。こういう景色が本来の高校の姿じゃないですか？ あんたの軍事訓練なんて喜んでいるやつは誰一人いなかった。これからはああしたことはすべてご破算といきましょうや」

飛び掛ろうとしたアキラだったが、だしぬけに隣の部屋のドアが開いたのに気づき、そちらにふり向くと、屈強な男子生徒が数人入ってきたところだった。

「こんなこともあるうかと、柔道部と空手部、それに相撲部のキャプテンを呼んでおいたんです。もしアキラさんがあたしに飛びかかろうとしたら、この人たちがあたしを守ってくれるってえ寸法なんです」

アキラは悔しさのあまり手を開いたり握ったりして必死に怒りに耐えていた。

「あんたが禁止したことはすべて元通りにしました。みんな大喜びですよ。これからは、あつしが生徒会長となって、千石高校を当たり前の高校にしていくつもりです。ということ……」

イッパチはぱちりと指を鳴らした。

すると運動部のキャプテンたちが入ってきたところから千石高校の校長が入ってきた。

校長はアキラの凝視にぎくりとなったようだが、それでもひるまず背を伸ばし口を開いた。

「アキラくん。わたしは万石高校のタツヲくんの協力でふたたび校長を続けることとなった。そして最初にやることはわが校長生活で一度もやったことのないことだ」

決意が高まったのか、息を吸い込んだ。

「それはきみの退学だ！ きみは本日これから、この瞬間に千石高校の生徒でなくなった！ わたしは無念だ……。生徒に退学を命じるなんて教育者として恥ずかしい。しかしこうしなくては、高校を元に戻すことはできないからな」

イッパチは立ち上がった。

「そついうわけで、あんたはこの高校の生徒でもなんでもなくなつたってことだ。もし、再びこの高校に来たときは、部外者の侵入つてことで警察を呼ぶことになりますからあしからず」

アキラは物も言えないほど怒りに震えていた。

唇を噛みしめると、くるりと背を向け大股に校長室を出て行く。荒々しい足音が遠ざかると、イッパチはほつとため息をついた。校長にうなずくと、席を譲った。

「校長先生。これからは先生がここのあるじでござんす。よろしく

……」

「有難う……。わたしはなんと云ったらいいか……」

校長の椅子を撫でさすりながら、かれは感極まっていた。

それを見て、イッパチは校長室を出た。

出たところにタツヲが待っていた。

「アキラは行ったかい？」

へい、とイッパチはうなずいた。

「このままじゃ済まないだろうな」

タツヲがそう言つと、イッパチはくくつ、と笑った。

「まあね、アキラさんの性格だ。絶対あきらめたりはしないでしょ
うね」

「どうするつもりだ？」

イッパチはぴしゃりと額を叩いた。

「お任せを！ あつしには計略がござんす。アキラさんのことはと
うに調べがついておりやして、弱みを握っているんでけす」

ふうん、とタツヲは顔をあげた。

「さすがだな……その伝で、おれのこと調べているんだろう？」

おなじことをおれにするつもりか？」

イッパチは手をあげた。

「ご冗談を！ タツヲさんにあつしがなにかしようなんて、考えた
こともござんせん。あつしはこの千石高校が当たり前の高校になっ
ていてくれりゃあ、それで充分でござんすよ！」

タツヲは肩をすくめた。

「怖い男だな、お前は。おれは誰よりもお前が怖ろしい。敵にはま
わしたくないもんだ」

イッパチはぺろりと舌を出した。

遭遇（前書き）

タツヲがケン太の前に姿をあらわす！ケン太そっくりの容姿を持つ
かれの正体とは？

遭遇

翌朝、自宅の正門を出たところでケン太はアキラと顔をあわせた。思わず身構えるケン太に、アキラは片手をあげた。

「待て！ 早まるな。今日は話し合いに来た」

「なに？」

「お前に頼みがある。話を聞いてくれないか？」

「いつたい、なにを頼みたいというんだ」

アキラは千石高校がタツヲの支配下におかれたことを語った。そして生徒会長にイッパチが納まったことを。それを語るアキラの表情には悔しさが溢れていた。

「頼む！ おれはもう一度千石高校を取り戻したい。一緒に戦ってくれないか？」

ケン太は絶句した。

こともあろうに、アキラが共闘を申し入れてきた？
信じられなかった。

そんなケン太の表情を見て、アキラはいきなり膝をつき両手を地面において頭を深々と下げた。土下座している。あのアキラが……！
「頼む！ お前の言うことならなんでもきく！ おれはなんとしても千石高校を取り戻したいんだ！」

ともかくケン太はアキラと一緒に千石高校に赴くことに決めた。
なにがなんだか判らないが、事情を知るには行動してみることだと判断したからである。

じつはアキラはケン太に言っていないことがある。
千石高校が普通の高校に戻ったことを。クラブ活動や、生徒同士の交流など、普通の高校生活が蘇ったことを語っていないのだ。
もしそれを知れば、ケン太は決して協力すまい、というアキラの読みだった。

千石高校の正門には、あいかわらず万石高校の制服を着た生徒が数人、登校してくる生徒たちを鋭い視線で監視している。

「あれは？」

遠くからその様子を見てケン太はアキラに質問した。

「万石高校のやつらだ。やつら、おれが近づくのを見張ってやがるんだ。こつちへこい。裏道がある」

アキラはケン太の袖を引っ張り、校舎の裏手へと案内した。

裏手は住宅街になっていて、校舎の塀が長々と伸びている。その塀に切れ目があり大木が半分幹を覗かせていた。

おそらく塀を建てた当初、ここに大木があったのを切り倒さず残すため、塀をその部分だけ周りを囲むように工事したらしい。

「ここを登れば、校庭へ出られるんだ」

そう言うときアキラはすると大木の幹によじ登り、いらいらしたようにケン太を見おろし叫んだ。

「早く登れ！ 人が来る」

ケン太はアキラに続いて大木を登った。

すぐに目の前に校庭があった。といっても茂みで、ふたりの姿は生徒たちからは隠れている。

校内に侵入すると、アキラは茂みに身を潜め頭を低くさせながら素早く移動した。

校舎の裏口に近づくと、あたりを素早く見回しドアを開く。

校舎の中にはいると、アキラはほっとため息をついた。

「だれにも見られなかったな？ よし、こつちだ」

そう言うとき非常階段を登っていく。

さっと物影にかくれ、アキラは廊下を見渡した。

「あれが校長室だ。こい！」

ふたりは廊下を移動した。

校長室のドアの前に立つと、アキラはさっとそれを押し開いた。

校長のデスクのむこうにIPPACHIが座っていた。ふたりが入ってくると、IPPACHIはちよつと驚いたようだった。

「これはこれは……アキラさんじゃないですか。それにケン太さんも一緒とは、驚きかぎりのこんこんちき……」

「黙れ！」

アキラは一步前へ出た。

「おっと！ それまで！」

イツパチはさつと両手を挙げて見せた。

「アキラさん、あんたに会わせたい人がいるんだ」

「なに？」

どすどす、という足音が外の廊下から近づいてくる。

アキラとケン太はふり返り、足音の方向を見た。

ぬつ、とひとりの人物が校長室のドアに現れる。

さつ、とアキラの顔から血の気がひいた。

「そんな、まさか……」

「アキラちゃん！」

入ってきたのは中年の女性だった。全身色彩の爆発といった感じで、上から下まで派手な原色のスーツで固めている。ひどく太っていて、ケン太はキヨシを思い出した。彼女が入ってきた瞬間、強い香水のにおいがケン太の鼻を襲っていた。

彼女はじろりと室内で立ちすくんでいるアキラを睨んだ。

「アキラちゃん。一体、こんなところでなにをやっているの？」

真つ赤な口紅をひいた唇が大きく開き、あたりにきんきんするような大声をあげる。あまりの音量に、校長室のガラス戸がびりびりと震えていた。

「そんな……なんでここに……？」

アキラは首をゆるゆるとふり、呆然となっていた。

「まったくちよつと目を離したら高校で軍隊ごっこなんて、あたしはそんなこと許したおぼえはありません！」

「ママ……」

アキラは泣きそうな顔になっていた。

「ママだって……？」

ケン太はつぶやいていた。

ではこの女性がアキラの母親なのか。

そうか、キヨシは母親似なんだな、とぼんやり思っていた。

応接セットのソファに彼女は横座りになり、バッグから細長いシガレットを取り出し、口に咥えた。

さっとイッパチが立ち上がり、彼女のもとへ近づくとライターを灯してシガレットの先端にかざす。

有難うとも言わず、彼女は当然のように煙草を吸いつけ、ふうーと煙を吐き出した。

アキラといえば、ものも言わず、窓の方向に顔をむけたまま固まっている。

「アキラちゃん！」

母親が叫ぶ。

びくつ、とアキラの肩が動いた。

「なにしてるの？ いい加減、家へ帰りなさい！」

アキラは答えない。

ふん、と母親は鼻を鳴らし立ち上がった。

ずかずかとアキラの側に近づくと、その耳をぐいっと掴む。

「わっ！」

そのままぐいぐいと耳を掴んだまま歩いていく。

「なにすんだ、やめるよおママ！」

「許しませんよ！ まったく下らない遊びばかり覚えて……」

やめてくれよお……。アキラの声は泣き声になっていた。そのま

ま耳を母親に掴まれたまま引きずられていく。

ふたりの言い争う声が遠ざかる。

ふつ、とイッパチは肩をすくめた。

「アキラさんの唯一の弱点がお母さんだってことで、あっしがお呼びしておいたんですよ」

「イッパチさん……」

「おっと、イッパチと呼び捨てにお願いしたはずですよ！」
へへっ、とイッパチは笑った。

「まあこれでアキラさんは二度とこの千石高校に顔を出すことは叶いますまい。この高校にも平和が来たってことですねえ」

「平和？ それじゃ千石高校は赤星に？」

「あはっ！ そんなことでござんすか？ ご心配なく。あっしはアキラさんのような、縄張り争いなんてまっぴら御免こうむります。当たり前前の高校生活、これがあっしの望みでやんすよ」

「そうか……」

ケン太は気が抜けたような表情になっていた。

こんな形で決着がつくとは思ってもいなかった。

これで赤星高校はもとにもどるだろう。ケン太の役目は終わったのである。

すくなくともケン太はそう思っていた。

が、それが間違いであることをやがてかれは思い知ることになる。イッパチが上目がちになり、話しかけた。

「ところで……ケン太さんに会わせたい人がいるんですがね」

「ぼくに？」

「へい、ケン太さんまで一緒に来るとは思っていなかったのですが、お人にはなにも言っていないませんが、なあに勘の鋭い人だ。いまごろ、この屋上でケン太さんをお待ちになっっていることでしょう」

「屋上？」

ケン太は天井を見上げた。

「さようでござんす。ケン太さんさえよろしければ、会いに行ったらいかがです？」

イッパチの顔を見て、ケン太は決意した。

「いいよ、会ってみよう」

うなずくと校長室を出て行った。

屋上への階段を登って外へ出る。

空はからりと晴れ上がり、まぶしい陽射しが屋上を照らしていた。屋上のぐるりを取り巻いているフェンスの側に、こちらに背を向けひとりの生徒が立っていた。

「ようこそ、高倉ケン太くん。 IPPACHI がここに案内したんだね」
ケン太は立ち止まった。

眉をひそめる。

背中を見せた生徒はくくつ、と肩で笑って見せた。

「おっと自己紹介がまだだったね。ぼくはタツヲといって、万石高校の生徒だ」

「タツヲ？」

ケン太は思い出していた。そういえばそんな名前の生徒が万石高校を支配しているとか聞いた。

「きみは万石高校の……えーとなんていうのかな……番長なのか？」

「人からはそう言われているよ。ぼく自身とは言つと、そんなこと気にはしていないけどね」

ケン太はその背中に話しかけた。

「ぼくを待っていた、と言ったな。なぜ IPPACHI がぼくをここに寄越すか判ったんだ？」

「簡単なことさ。きみとアキラのふたりが校舎の裏手から侵入してくるのが見えた。アキラが来ることは予想していたが、きみまでついてくることは予想外だった。その後の展開は予想がつく。アキラは母親に連れられて自宅へ帰っていくだろう。きみはと言うともとと今回の件については部外者だ。そこで IPPACHI がきみとぼくを出会わせるよう画策することは考え付く。だからここで待つことにしたのさ」

「顔を見せろよ」

ケン太はあいかわらず背中を見せたままのタツヲに苛々していた。第一、これでは話しづらいではないか。

タツヲはゆつくりとふり返った。

その顔を目にし、ケン太は目を見開いた。

そのケン太の表情を見て、タツヲはにやりと笑った。

「ようこそ、高倉ケン太くん」

タツヲの顔はケン太に瓜二つだった。

ゆつくりとタツヲが歩き、ケン太の目の前に来ると立ち止まった。ふたりがこうして並ぶと、まるで鏡に映したようにそっくりであった。

「きみは……誰だ！」

絞り出すような声をたて、ケン太はタツヲの顔を見つめて質問した。

「ぼくかい？　ぼくはただの万石高校の生徒さ。それ以外、なにがあるというんだ」

タツヲの反問に、ケン太はぐつと詰まった。

あらためてそう返されると、なにも言うことが思いつかなかった。ただタツヲの顔がケン太そっくりなことを別にして。

かれは髪の毛を真っ赤に染め、ケン太と同じようにリーゼントにしている。学生服はカラーが高く、裾が長く、ちよつとケン太の着ている伝説のガ克蘭に似ていた。色合いは黒に近いブルーで、刺繍などの飾りはない。

たしかにタツヲの顔はケン太そっくりだが、目鼻立ちの道具立てが似ているだけで、その表情はかなり違っている。

タツヲの顔はどちらかと言うと狡猾そうな印象をあたえている。

いつも油断なく目が動き、口もとには薄ら笑いがつねに浮かんでいた。

タツヲはすこし前かがみになった姿勢で、それは常に獲物を狙うなにかの獣のような印象を与えていた。

ゆつくりとケン太の顔を眺めたタツヲはうなずいた。

「なるほど、確かに似ている。イッパチが驚いたのも無理はない」

「きみはここで何をしているんだ」

ケン太は鋭く尋ねた。

「ぼくかい？　なに、イッパチに頼まれてね、千石高校の平和にす

「こしだけかわりを持ったと言っ次第だ」

「きみが？」

「そうだ、とタツヲはうなずいた。

「万石の生徒たち、数人がここに来ている。アキラのような勘違いをするやつがいらないとも限らないんでね。まあ、用心棒のような役割かな」

ケン太の胸にじょじょに闘志がわいてきた。

「嘘だ！」

タツヲの言うことは、一から十まで嘘だ。

かれが千石高校の平和にこれっぽっちも急身があるわけがない。

「おい、そちらへ行つたぞー！」

校庭のほうから玉をおつて野球部の生徒たちが声を掛け合っている。ぽーん、ぽーんというテニスのラリーが続き、楽しそうな笑い声が響いていた。

典型的な当たり前の高校の日常がここにはあった。

その裏側に、なにかケン太の想像もつかないような企みが隠されている。そんな直感がケン太の胸にあふれていた。

さてと、とタツヲは肩をすくめ歩き出した。

「今日のところ、もうぼくの用はない。一度、ケン太くんの顔も見なかったし顔合わせはすんだ。それではこれで、ぼくは失礼しよう」
そのままケン太の横をすりぬけ、屋上からの階段口に歩いていく。階段を降りる直前、かれはケン太にふり向くと声をかけた。

「一言いっておく。多分、きみは自分の父親にぼくのことを尋ねようと思っているだろうが、無駄なことだ。かれはなににも知らないよ。そんなことを聞いて、家庭に無用な混乱をひきおこすことは、あまりお勧めできかねる。いいね、ぼくのこととは単純に、他人の空似としておくんだ。そういうこともありえないことではないだろう？」

「じゃ、と言ってタツヲはケン太の視界から消えた。

はっ、となったケン太は慌てて階段に急いだ。

が、すでにタツヲは階段を降りていつて見えなくなっていた。

階段の降り口で、ケン太は金縛りにあったように立ちすくんでいた。

千石高校（前書き）

タツヲは千石高校の校長に取り引きをもちかける。かれの狙いとはなにか？

千石高校

そんなことがあつて数日後。

千石高校の正門を校長は急いで通り抜けた。

万石高校の制服を着た、数人の生徒が見守る中、かれは眉を険しくしかめ、校舎へと入っていく。唇は噛みしめられていた。

校長室に入ると、イッパチが出迎えた。

「ああ、どうも。先週、アキラさんが来ていたことお報せしていなかったんで……」

イッパチの言葉に校長はぎよつとなつた。

「アキラが……」

「なに心配ご無用でござんすよ。あたしが追い返しましたから」

「きみが」

校長は目を丸くした。

「はい、さようで。もうあいつがこの千石高校にちよっかいをだすことはござんせんから、ご安心を」

校長はほつとため息をついた。

デスクに向かうと、どさりとちからなく椅子に座り込む。デスクの表面に両手を乗せ、握りしめた。

「なにか心配ごとでもおありで？」

イッパチが話しかけると、校長は顔をあげ叫んだ。

「きみ！ イッパチくん。あれはなんだね？」

「あれ、と申しますと？」

校長は窓の外を指差した。指先は、校門にむけられている。

「決まっているじゃないか。校門の前にたむろしている万石高校の生徒だ。あいつら、いつになつたら元の高校へ戻るんだね？ もう、千石高校はふつうの高校になつたんじゃないのかね？」

「さあ……てね」

イッパチは空とぼける。

校長は額に青筋をたて、怒っていた。

「きみとあのタツヲの間でどんな密約がなされたか知らん。が、この千石高校はわたしの高校だ。あんな、他校の生徒がうるちよろしでもらうては困るんだ」

「なにが困るんですか？」

その声に校長は蒼白になった。

この声は……。

もちろんタツヲのものだった。

校長室の入り口からふらりと姿を現したタツヲは、薄笑いを浮かべている。

「校長先生、この千石高校が大事なら勇気を持って対処すべきでしたね。他校の、しかも番長などと呼ばれている生徒のちからを借りるなんて、じつに浅はかというしかない。もしこのことが教育委員会に知られたら、どう言われるでしょうね」

「きみは……」

校長は震えだした。

顔にはじつとりと冷や汗が浮かんでいる。

「きみはわたしを脅迫する気なのか？」

「脅迫、人聞きの悪いことを言われては困りますねえ。ぼくはただ、事実を言っているだけなんです。それではぼくはここで失礼しなくては…… どうもあなたは話し合いする気はなさそうだし、ぼくとしてもここは正直に事実をどこかの新聞社とか、週刊誌に話しておかないとあとで何を言われるか……」

「ど、ど、どうして新聞社とか、週刊誌なんだ！」

「いや、ぼく案外口が軽いんで、つい聞かれていないこともぺらぺら喋ってしまう悪い癖があるんです。それじゃこれで……」

「ま、待つてくれ！」

校長は悲鳴のような声をあげた。

「待ちたまえ！ な、話し合いだったかね？ きみ、なにを話し合いたいんだ？ 聞かせてくれ」

「おたがいの利益になることですよ。校長先生」

「利益？」

「そうです。あなたは千石高校を当たり前の高校にしたい。そしてぼくは高校生活を終えるまで、万石高校、千石高校ふたつの高校に対し、影響力を保持したいと思っっているんです。このふたつの目的は両立します。ぼくの提案が受け入れられたらね」

「どうすればいいんだ！」

タツヲはにやりと笑うと校長のそばに立ち、耳打ちをした。

校長はぼう然とタツヲを見上げた。

「そんなこと……」

「簡単ですよ。これでお互い、万々歳というわけです。あなたは荒れ果てた高校を立て直した名校長というわけだし、ぼくは表に出ることなく千石高校に影響力を行使できる。どうです？」

校長はちからなくうなずいた。

がつくり肩を落とし、両手で顔を覆った。

「まだいるのか？」

赤星高校の校長室で、ケン太とユミとエミのふたご。そしてキヨシとケイスケが顔をあわせていた。ケイスケは千石高校のいたるところに万石高校の生徒たちがいることを報せに来たのである。

「へい、それが妙なんだ」

「なにが妙なんだい」

ケイスケはすっかりケン太に対し、配下の口調になっている。ケン太は校長室の上がりかまちに腰をおろし、ケイスケは入り口の土間に膝をついて見上げている姿勢をとっている。その格好は、時代劇の親分と子分といった調子だ。どうやらケイスケにとって誰かの子分になっているのはとても具合のいいことのようにであった。

アキラが母親に連れられて千石高校から去った後、ケイスケは自動的にキヨシの子分として行動していたが、そのキヨシがケン太の配下になる構えを取ると、嬉々として自分も子分となって収まった

のである。

「たしかにやつら、万石高校の生徒なんでやすがね、どういうわけだか千石高校の制服を着込んでいるんです。傍目には、千石高校の生徒のふりしてやがって……」

ふうん、とケン太は腕を組んだ。

「で、タツヲは？」

「ええ、あいつも時々顔を出すみたいです。そんなときや、万石の連中になにか指示を出しているようですがね……」

ケン太はキヨシに話しかけた。

「キヨシくん。きみのお兄さんはいまどうしている？」

ふいに自分の名前を呼ばれ、キヨシはあわてて口もとに運んでいた焼き芋を飲み込んだ。あいかわらず、なにか食べていないと落ち着かない様子だ。

「兄ちゃん、ずっと勉強部屋にとじこもってばかりいるんだな。母ちゃんが家庭教師の先生を呼んで、受験の準備するんだって張り切っているけど、あれじゃ兄ちゃん可愛そうなんだな」

「受験？」

「うん、なんでも兄ちゃんには外国の学校に行かせるつもりらしい。日本の学校にやると、またいけないこと企むからって言うてたな。でもいけないことってなんだ？」

ふたごが口を開いた。

「連中、こんどはこの赤星高校に来るのかしら？」

「またなの……。やつと千石高校の連中がいなくなっただと思っただら今度は万石高校だなんて……いったいいつになったらこの高校に平和がくるのかしら？」

ユミとエミは顔を見合わせ首を振った。

「守るんだ！ 生徒を集め、この学校を守る準備をしようじゃないか！」

ケン太は叫んだ。

闘志が湧き上がる。

かれらの報告で、あらたな目標を見出したケン太の顔はやる気に満ちていた。

ユミが手を叩いた。

「そうよね……！ あたしらがやらなきゃ、誰がやるのよ！」

エミも立ち上がる。

「さっそく集めましょう。あたしたち、赤星高校に通っていた友達に声をかけるわ！」

ケン太はうなずいた。

「よし、ぼくはセイントカインの連中に会ってくる」

ケイスケが口を開いた。

「でもあの連中はしり込みしていたじゃないですか。引っ張り出せますかい？」

「それはぼくに任せてくれ」

ケン太は微笑をうかべていた。

それじゃ行動に移ろうと、全員立ち上がり外へと出かけていった。ひとり残されていた赤星高校の校長は、しばらく布団のうえで仰向けになって天井を見上げていたがなにごとか決意した顔になっていた。

苦労して起き上がると、枕もとの物入れを掴んだ。

蓋を開き、中から取り出したのは携帯電話であった。

手馴れた様子でメール画面を開き、すばやい指の操作で文字を入力し始める。

複数のあて先に同時に送信するよう設定すると、送信ボタンを押した。

送信完了のメッセージに、校長はにやりと笑みを浮かべていた。なにごとか勝利を確信している表情である。

かれのメールのあて先はいつたいだれであったのだろうか？

対抗（前書き）

さまざまな人間がタツヲに対し対抗策を講じる。ケン太、ユミとエミのふたごは赤星高校に生徒をとりもどすべく、奮闘する。

対抗

その部屋には十人以上の人間が座れるよう椅子が並べられていたが、実際埋まっているのは半分以下だった。

椅子に腰をおろしているのは男性、女性半数ずつだが、全員に共通しているのは年配であることと、みなどれかの高校の校長であるということである。

ここは「校長同盟」という集まりの場であつた。

もともと付近の高校の校長同士の親睦の場として始まったのだが、やがて高校に暴力や犯罪が荒れ狂うようになって、ただの親睦会からそういつた問題を話し合い処理するための委員会へと発展した。もちろんこの場で話されることは秘密で、その処理方法も表に出せないようなことも多い。

その結果、きわめて秘匿性のある集まりとなつたのである。

「で、かれの報告は確かなのかね？」

どうやら一座の中でもっとも年長で、発言力がありそうな老人が口を開いた。

隣に座る同年代の鶴のように痩せた老女がうなずいた。

「そのようですね。千石高校の校長にも確かめてみました。どうやら、万石高校のタツヲというのは”闇のガクラン”の持ち主らしいですわ」

彼女が”闇のガクラン”という言葉を発したとたんに全員が顔をしかめ、うなだれた。どうやらその言葉はタブーになっているらしい。

「その、万石高校の校長はどうしたんだ？　なぜ出席していない？　ひとりが叫んだ。彼女はそのほうを見て、やわらかな笑みを浮かべた。

「お忘れですか？　万石高校の前校長は、この委員会の意義を否定して、現校長に引継ぎを拒否したんですよ」

そうか！ と、発言した校長はかるく目の前のデスクをたたいた。
「年々、集まりが悪くなっていく。去年はまだ人数がいたはずだ。
それが、今日はすでに半数を割ってしまった」

「しかたないよ、みな年なんだ。身体をこわしたり、死んだのも一人や二人じゃきかない」

「なぜつぎの校長に引き継がない？ この委員会は、ちゃんと引き継がないとやっていけないだろう」

「みな忙しいのさ。それに、この委員会そのものの存在意義を疑っているものも多い」

「なぜだ！ 今度のこのようなことが持ち上がることもあるだろう」

「まあまあ、それは後にしよう。とにかく今日の議題に戻ろうや。なにしろ”闇のガ克蘭”が現れたのだ。ほってはおけん」

文句を言っていた男はぶつぶつとつぶやきながらそれに同意した。
「いったい、”闇のガ克蘭”とはなんだね？ なぜそれが問題なんだ」

さっきの鶴のように痩せた老女が答えた。

「”闇のガ克蘭”とは”伝説のガ克蘭”の影なんですわ。学校が荒れ果て、暴力が渦巻くところ生徒、教師の願いに答え現れるのが”伝説のガ克蘭”。そしてその”伝説のガ克蘭”の影として”闇のガ克蘭”も出現する、と言われております」

「それじゃまず”闇のガ克蘭”のことを報告した赤星高校の校長の話を聞こう」

みなそれにうなずいた。

かれらの目の前にテレビのモニターがつながれた。モニターに、布団に上半身を起こした赤星高校の校長の姿が現れた。

「このような格好でお許し願いたい。なにしろ、長い間寝たきりなので、まだ身体がよく動いてくれないのです」

校長は携帯電話のカメラ機能をつかって会議に出席しているのだ。全員、赤星高校の校長の健康を気遣う言葉をかけ、校長はそれに

礼を言った。

「ありがとう……。とにかくわが校のケン太くん。それに千石高校の生徒であるキヨシ、ケイスケの話から、万石高校のタツヲと言うのが、闇のガ克蘭の持ち主でないかという疑いを生じたのです。それであとで千石高校の校長と話したさい、その印象がますます強まった、というわけです」

「間違いない……。そのタツヲの着ているのが闇のガ克蘭だ。なんでも闇のガ克蘭の着用者は、おそろしいほどの知能と、罪悪感の欠如を示すと言う。千石高校の校長を脅迫したときの手口がそれを示しているよ」

「伝説のガ克蘭あるところ、闇のガ克蘭現れる……。か。最初の伝説のガ克蘭はいつ現れたのかな」

「記録によると、戦前からあるようです」

その報告に、みな「え？」となった。

「しかしケン太のガ克蘭は確か父親から譲られたと……」

「そう、ケン太の父親高倉ブン太がいまのケン太くらいの年頃のころ、町の仕立て屋の老人から貰ったとされています。しかしそれ以前にも伝説のガ克蘭は存在しました。その時代々々にあらわれる正義の番長が着たガ克蘭が、伝説のガ克蘭と呼ばれたのです。

が、ブン太の貰ったガ克蘭は特別な仕立てで、着用者を怖ろしいほどの喧嘩上手に変身させてしまえます。そのちからでブン太は伝説の番長となり、着用した学生服は伝説のガ克蘭と呼ばれました。

ですから伝説のガ克蘭の影である闇のガ克蘭の威力も想像もつかないほど強力です。たぶん、闇のガ克蘭の着用者に対抗できるのは、伝説のガ克蘭の着用者だけでしょう」

「なぜ闇のガ克蘭など現れるのだ。われわれがそれを望むわけ、ないだろう」

「作用、反作用という言葉があります。光あるところ影がある。光が強烈なほど、そのつくりだす闇も濃いのです」

「その者、赤き衣をまといて金色の野におりたつべし……。伝説のガ克蘭について昔から語られる言葉だが、それがなにを意味しているのか判らん……」

「闇のガ克蘭を着たタツヲはいつたいこれからなにを狙って行動するのかな？」

「たいてい、闇のガ克蘭の着用者は、権力への志向を示すようです。際限ない支配欲。それが特徴で、そのためにどのような手段でもとることをためらいません」

「タツヲは千石高校と万石高校の支配権を握った。つぎは赤星高校だろう。きみはどうするつもりなんだ」

これは赤星高校の校長へ向けられた言葉だった。かれは画面の向こうでうなずいた。

「そう、愚図愚図していられん。幸い、ケン太くんやユミとエミのふたりが高校に生徒を復学させるべく動いている。かれらが成功して赤星高校に生徒が戻ってくればたぶん……」

もうひとりの校長が手をよじり合わせるようにしてうめいた。

「赤星高校がやられればつぎはうちだ！　なんとしてもタツヲの野望は摘み取らなければならない！」

となりにはもうひとりがうなずいた。

「そうだ。赤星高校は位置的に言って、われらのど真ん中に位置する。タツヲが赤星高校を支配下におけば、われわれすべてが危機に瀕することになる。われらすべてちからをあわせなくてはならん！」

その場にいたすべての校長がうなずいた。

長老格の老人がすくと立ち上がり、口を開いた。

「それではこの校長同盟は非常事態であることを宣言する。万石高校のタツヲの野望を阻止するため、われらは総力をあげて赤星高校を援助する！　みなさん、これでよろしいな？」

賛成！　賛成！　という声が一同からあがっていった。

委員会はタツヲに対抗する動議を採択したのである。

ヨーコの店に連れてこられたセイントカインの面々はおどおどとしていた。

五人はいま普段の学生服に戻っている。そのせいもあり、なれない町に来ているということもあって緊張していたのかもしれない。

ケン太は一同をヨーコに紹介した。

「ヨーコさん。かれらがセイントカインというグループです。かれらのための学生服は出ていますか？」

ヨーコはうなずいた。

「出来ているわよ。特注だったから大変だったけど、ま、あたしの自信作ね！」

ケン太は有難うとうなずいた。

ヨーコは引き出しから五着分の学生服を取り出した。

男性用四着、女性用のセーラー服が一着である。

男性用の学生服はそれぞれ赤、青、黄色、緑に染められていた。

セーラー服の襟、スカートはもちろんピンクである。

じぶんのカラーの服を手にとったセイントカインの面々は不思議そうにケン太を見た。

「着てみたらどう？」

言われて着替えた。

女の子はヨーコに案内され更衣室で着替えている。

すっかり着替え終わり、五人はおたがいを見合ってにやにやしている。

「どうだい？」

ケン太に言われ、リーダーの比呂英雄は相好を崩した。

「うん、なんだか気分が変わったな……じぶんのカラーの学生服なんて考えもしなかった」

「裏返してみなよ」

え？ とかれらは自分の学生服の裏地を確かめた。

学生服はリバーシブルになっていて、裏返すとセイントカインのユニフォームになっていた。

「凄え……と四人の男子生徒は興奮していた。

「それだったら、いつでも変身できるだろう？」

ただひとりの女の子のセイントピンクは腕を組んで叫んだ。

「あたしはどうなの？ これじゃ、あたしだけのけ者じゃない？」

ヨーコは首をふって答えた。

「大丈夫、あなたのセーラー服もちゃんと変身できるから。その襟の裏側を見てもらなさい」

言われてピンクは襟を裏返した。するするっと襟から布地がのび、ピンクの制服となっていく。スカートの裏側にもタイツが隠されていて、たちまち彼女はセイントピンクに変身した。

「これがマスクだ」

ケン太が渡したのは手の平にすっぽりとおさまるほどのハンカチほどの大きさの布地のかたまりだった。

ひろげるとマスクになっていて、かぶるとぴったりと顔に貼りつく。靴はふだんはスニーカーだが、これも伸びてブーツのかたちとなる。

かれらは嬉々としてセイントカインの姿に変身していた。

「どうだい。気に入ったかい？」

かれらはもちろん！ と相槌をうった。

「赤星高校に戻ってくれるな？」

ふたたび学生服にもどり、英雄はうなずいた。

「ああ、戻ろう。そして高校を守るための戦いに参加しよう。約束する」

そのころ……赤星高校の校長室では、ふたごが帰ってきていた。

ふたりは校長のためにお粥を用意していたのである。

「なかなか集まらないわねえ」

ユミがぼつりとつぶやき、隣りでお粥にいれる葱を刻んでいたエミもうなずいた。

ふたりの会話を、校長は寝ながら聞いている。

「本当……やっぱり駄目みたい」

ふたごは同級生にむけ、携帯でメールを送っていたが返事の返ってきたのは半分にもみたく、復学の意味をしめした相手もほとんどいなかった。

「どうしよう……」

「ねえ」

エミがユミのほうを見た。

「考えを変えてみない？」

「なによ」

「だから復学にこだわらないで、新入生を募集するのよ！」

「だってもう新入学の時期は……」

「世の中には高校に入学したくても出来ない人もいるわ。年令、国籍にこだわらず、どんな人でも受け入れることにすればいいのよ」

ユミの顔があかるくなった。

「そうか、夜間の学校つてのもあるしね！ でもどうやって入学を勧誘するの？」

「それが問題なのよねえ……」

エミは腕を組んだ。

なにしろふたりはただの学生である。入学勧誘などと言ってもどうすればいいのか、途方に暮れていた。

校長がむくりと起き上がる。

その気配に、ふたごはふり返った。

校長は口を開いた。

「それなら方法がないでもない……」

「校長先生？」

赤星高校校長の瞳はらんらんと輝いていた。

ライブ（前書き）

赤星高校の生徒募集のため、ユミとエミのふたりに呼び出されたケン太。さて、募集のためなにをするのか？

ライブ

「ケン太、電話よ！ 赤星高校のユミさんという女の子から」

母親の純子に呼ばれ、ケン太はなんだろうと思った。

思わせぶりな純子の表情に、ちよつとケン太は顔を赤くした。女の子から電話など、初めてのことで母親としては浮かれているようだ。そんなじゃないよ……と言いたいのだが、何か言うと言いつ訳になってしまってから、黙ってケン太は電話をとった。

「もしもし……」

「あ、ケン太さん！ 是非あなたにお願いしたいことができたの！」
受話器のむこうからユミのはずんだ声が聞こえてくる。ざわざわという人声が背後に聞こえるので外から電話しているらしい。

「なに？ ぼくに頼みたいことって」

返事をする、エミにかわった。

「もしもし、エミです。あのね、ちよつと出てきて欲しいんですけどお……場所は……」

エミの告げたのはケン太の住む町から離れた市街中心部の駅だった。伝説のガクランを着てくるようにと念を押され、ケン太は首をかしげた。

「なあに、デート？」

「そんなじゃないよ」

母親の好奇の目をちよつとうるさく感じながらケン太は二階の自室へ引き上げた。

壁にかけられた伝説のガクランを見る。

あいかわらずガクランの背中の「男」の刺繍が燦然と輝いている。ケン太はガクランを身につけた。

たちまち背筋がのび、身内にちからが満ちてくる独特の感覚。ポケットから櫛をとりだし、自分の髪の毛を梳くいつもの金髪リゼント・スタイルになる。

玄関を出て、外へと出かける。

駅を出てすぐユミとエミの二人が出迎えた。

改札にふたりはケン太を探していたのか、姿が見えると手を勢いよくふつて差し招いている。

「なんだい、急に？」

ケン太が話しかけるとふたりはちよつとはにかんだような笑顔を見せる。

「あの、ちよつと付き合つてほしいんです」

ユミの言葉にケン太はどきんと胸が高鳴った。

たちまち真つ赤になるケン太に、エミは手を細かくふつて否定した。

「違う、違う！ そんなんじゃないくて……あのう、赤星高校に新入学の生徒を募集するために手伝つて貰いたいです」

なんだ……と、ケン太はがっかりするような、ほつとするような気分になった。

「新入学の募集だつて？」

「そう、やっぱり生徒がそろわないと高校も元に戻らないでしょう？ あたしたちとケン太さん、それにセイントカインの五人でやつと八人じゃ、一クラスもできやしないわ。だからなるべく多くの生徒を集めようということどこに來たの」

「それは判るけど、どうやって集めるつもりなんだい？」

「コマーシャルをするのよ！」

「コマーシャル？」

ケン太はあつけにとられた。

と、赤、青、黄、緑、ピンクの五色の学生服が視界にはいり、ケン太はふり向いた。

セイントカインの五人である。

「やあ」

赤の学生服を着たりーダーの比呂英雄は軽く手をあげ挨拶する。

「かれらも呼んだのか」

「ええ、なにしろ正規の赤星高校生徒はあたしただけだから。あたしたちで宣伝しないといけないと思って」

ユミの返事にケン太はもつともだと頷いた。

「それで、どうやってコマーシャルするつもりなんだい。駅前でなにかするののか」

うふ……、とユミとエミは意味深な微笑を浮かべた。

「あたらずとも遠からず」

エミの答えにケン太は眉をひそめた。

「なんだい？」

ケン太はセイントカインに顔を向けた。

かれらも知らされていないようで、顔を横にふる。

「こつちよ！」

ユミとエミは両側からケン太の手をとり、歩き出した。

「え……？」

いきなり女の子二人に手を握られ、ケン太は戸惑ってしまった。

駅前のロータリーに、一台のおおきな車が停まっていた。

マイクロ・バスほどの大きさがあり、横開きのドアがケン太が近づくと大きく開いた。

「ども、高倉ケン太さんですね？」

中から度の強い眼鏡をかけた、三十なかばと思える男が顔を出した。髪の毛はもじゃもじゃで、大きな鼻とほっそりとした顎をした、蜘蛛のように痩せた手足をしている小柄な男である。

ケン太を先頭にユミとエミ、そしてセイントカインの八人が車の中にはいる。席はたつぷりとあり、どうやら十数人が座れるくらいありそうだ。

席に座らされると、さっきの男が名刺を取り出しケン太に渡した。

プロデューサー・ディレクター

宇土亜連

とあった。

「どもども、宇土と言います。あの、赤星高校という高校の宣伝を頼まれまして、あたくし担当になりましたんで、よろしく。あ、これ宣伝案をまとめたもんです。どうぞ読んでください」

せかせかとそれだけ喋ると、宇土と名乗った男はセカンド・バツグを取り出し中から数枚のパンフを取り出した。

渡されそれを見るケン太の眉がおおきく八の字になった。

内容はケン太を中心に、歌と踊りのライブを行うことになっていて、そのライブで赤星高校への勧誘を織り込むことになっている。

ケン太はユミとエミを見た。

ふたりはあっけらかんとした表情で、ケン太を見つめている。

「歌と踊り、だって？」

セントカインの五人にもおなじものが渡されているようだ。

みな、パンフを食い入るように読んでいた。

「心配ありません。歌と踊りはちゃんと専門の方を呼んで、レッスンして貰うことになっていますし、そちらの五人とユミとエミちゃんというふたご姉妹がいれば人目を引きます。ぜったい成功します！ 請合います」

熱心に宇土はケン太を口説いていた。

「あの……ぼくが歌うことになっているのかい？」

「もちろん！」

というのがユミとエミの答えだった。

ケン太はぶるぶるっと首を振った。

「冗談じゃない。ぼくにそんなことできるもんか！」

大丈夫です、と宇土は請合った。

「なに、だれでも最初は素人ですあ！ ケン太さんはまだ十五才でしょう？ その若さなら、あっという間に覚えますって。それにそのガ克蘭、格好いいですしね。背中 of 刺繍にライトがあたれば、

印象的です。きっと人気がでますぜ」

ケン太の顔にどっと汗が吹きだした。

「よしてくれ……」

ユミとエミを見る。

ふたりはまっすぐケン太の目を見つめていた。

セイントカインたちに目をやる。

五人もまた、にやにやしながらケン太を見つめ返した。

「おい、よせよ。本当にぼくがそんなことができるわけないだろう？」

弱々しく言いながら、ケン太はゆっくりとかぶりをふった。

じーっ、と全員がケン太の決心を待っていた。

ケン太は肩を落とした。

「まず、歌を覚えてもらわないといけません。歌詞はこれ。そしてオケはこのCDに焼きこんでいますので、今日のところは聞いてもらうだけで結構です」

音楽プロデューサーと名乗る二十代半ばの、いつも冷笑を浮かべているような細面の男が口を開いた。

薄茶色のサングラスをかけ、派手な赤と青のまだら模様のシャツを着て、わざと裂け目をつけたジーンズを履いている。最先端のファッションなのか、それともそもそもファッション・センスがないのか判断しづらい格好である。

宇土の車でケン太たちは市街のとあるレコーディング・スタジオに連れて来られていた。

そこには音楽プロデューサー、ダンスの振付師、演出家などさまざまな分野の人間が集まり「赤星高校再生プロジェクト」と名づけられたライブの計画を作成していた。

「しかしライブだなんて、こんなことになるとは思ってもみなかった……」

ケン太はつぶやいた。

ユミは身を乗り出した。

「でも、これが一番効果的なよ！ 校長先生の紹介なんです」

「校長先生が？」

ケン太の問いかけにエミが答える。

「ええ、校長先生が、昔の赤星高校の卒業生からこういうことをやっている人を捜し当ててくれてあたしたちに紹介してくれたんです」
「そうか……」とケン太は覚悟をきめた。

とにかく、それしか方法がないのならしかたないじゃないか！

宇土が口を開いた。

「ケン太さんだけやらせるんじゃないですから。セイントカインの皆さんも参加してもらいます」

いきなり話題をふられ、セイントカインの五人は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になった。

「ぼくらが？」

「あんたたちには楽器を担当してもらいます」

ひえーっ、とかれらは叫んだ。

セイントカイン・レッドはリード・ギター。

セイントカイン・ブルーはベース。

セイントカイン・イエローはドラム。

セイントカイン・グリーンはキーボード。

そしてセイントカイン・ピンクとユミとエミ三人はコーラス担当と決まった。

ばんばんと宇土は手を叩いた。

「さあ、担当が決まったところでさっそくレッスンといきますか！」
かれは生き生きとしていた。

いよいよ当日。

「本当にやるのかい？」

ケン太は不安そうに尋ねた。

「なに言ってるの？ あれほどみんなで練習したでしょう！ 自信を持ってやるのよ」

コミとエミは目をきらきらとさせていた。

全員のなかで、このふたりがもっとも熱心だった。

セイントカインたちは自分たちが前面に出るわけでないのだからかという気楽なものである。

結局、ライブはケン太たちの住む町の駅前で行うことになった。

赤星高校がすぐ近くにあるし、各駅しか電車は停車しないが利用客もわりと多いからである。

駅前に宇土は特設ステージを組み、コンサートを仕掛けていた。

”高倉ケン太とセイントカイン”それがグループ名である。自分の名前が大書きされた幟を目にし、ケン太は恥ずかしさに真っ赤になっていた。

「さあ、行きますよ！ お客さんも集まっていますから」

宇土が顔を出した。

ケン太は覚悟をきめた。

全員、配置につく。

幕が開いた。

駅前のロータリー。そう広い場所ではないが、それでも客は詰め掛けていた。休日でもあり、物見高い人間はどこにでもいるものだ。ケン太はおおきく息を吸い込んだ。

手にマイクを持ち、一歩前へ出る。

「こんにちわ……」

ひと声挨拶する。

帰ってくるのは静寂である。

唇を舐め、ケン太はふたたび口を開いた。

「えーと……今日、皆さんの前にぼくたちがライブをやることになったのは、赤星高校というぼくらの高校を救うためです……」

静寂はびくともしない。無反応な観客に、ケン太の背中にじつと汗が流れた。

「この中で高校に入学していない人はいませんか？ もう一度、高校生活を送りたい、なんて人はいませんか？ 赤星高校はそんな皆

さんを求めています！」

観客がいらいらしはじめたのをケン太は感じていた。視線が冷たくなり、そわそわしている。

どうしよう……。

ちらりと舞台の袖で見守っている宇土亜連を見る。

亜連は指先を狂ったように廻していた。

はやくライブを始める！ そう言っているようだった。

さっとケン太はセイント・レッドを見る。

うなづく。

ケン太は手を上へ突き上げた。

「ワン・ツー……ワン・ツー・スリー……」

ドラム担当のセイント・イエローがカウントをとった。

じゃーん！

レッドのリードが鳴り響く。

ケン太は渾身のちからをこめ、唄いだした。

おいらはバンチョウ

愉快的バンチョウ

おいらが叫べば嵐を呼ぶぜ

背中 of 刺繍が鳴いている

”男”を見せろと鳴いている

えーい、面倒だ

まとめてかかってきやがれ！

ビンタ！

蹴り！

どうした、弱虫め！

ケン太は夢中になって唄っていた。

いつの間にか、手足を激しく動かし、目に見えない敵にむかって格闘している自分に気づく。

袖の宇土を見ると、呆然となっている。

振り付けと違う……。

目がそう言っている。

しまった……。

ケン太は臍をかんだ。つかつかうかと、教えられた振り付けをすっかり忘れてしまっていた。

はっ、と気づくと観客が目を丸くして見上げている。

気まずい沈黙。

ふっ、と息を吐きケン太はまっすぐ立ち上がった。

「ど、どうも……失礼しました……」

そのまま観客の顔を見ることができず、そそくさと退場した。

はっ、となった宇土がカーテンを閉めた。

その時。

津波のような拍手と喚声が幕の向こうから沸いて届いた。その迫力に、垂れた幕がふわりと波立っただくらいだった。

アンコール！

アンコール！

観客の喚声が聞こえてくる。

ケン太たちは顔を見合わせた。

ライブ（後書き）

今回ちょっと悪ノリしちゃいました。みなさん、ついてきてくれま
すか？

手紙（前書き）

久しぶりの更新です。なんと二月もほっておいたんですねえ。

手紙

「ぜひ、CDデビューしましょう！」

興奮した宇土はケン太に向かって熱心に話しかけた。

あの後、ライブが終わって宇土はケン太とユミとエミ、そしてセイントカインをファミリー・ラストランに案内して今後の計画を話し合うことにしたのだった。

宇土の顔は輝いていた。

駅前のライブで、アンコールの声があがり、しかたなくセイントカインのテーマソングでお茶をにごしたのだが、観客たちはケン太に注目していた。

「ケン太さん。あなたにはスターのオーラがあります。わたしが言うんだから間違いない。CDデビューしたらわたしがすべてプロデュースしますから、大船に乗った気持ちで任せてください！」

「ぼくに、ですか？」

ケン太には信じられなかった。

そばのユミにささやきかける。

「この人の言うこと、どう思う？」

ユミはうなずいた。

「ライブのケン太さん。素敵でした。なんだか、いままで見たことのないケン太さんがいたみたいで」

ケン太はエミを見た。

彼女も同意するように激しく頷く。

「あたしもそう思います！ あのとときガ克蘭の刺繍が眩しく光ったみたい……」

エミの言葉に、その場にいた全員が同意した。

なんと、ケン太の背中の中”男”の刺繍がまぶしく光った、というのだ。

ケン太は複雑な気分になった。

たしかにケン太はあの時、観客を魅了したようだ。だが、それはガ克兰のおかげ、といっているようにだ。

宇土は熱心に言った。

「ねえ、わたしに任せてくれれば絶対ヒットしますよ！ それにCDデビューは赤星高校のためにもなるんですぜ」

え？ と、ケン太は顔をあげた。

「どうしてですか？」

気持ちが悪かった、と見た宇土は身を乗り出した。

「よござんすか？ 沢山の人が聞いてくれればそれはとりもおさず、宣伝になるでしょう？ それにその収入を高校のために遣えばいいじゃないですか？ 聞くところによると、赤星高校には教師がいないっていうじゃないですか。生徒がそろっても、教師がいないんじゃない高校とはいえませんか？」

あ、とケン太は胸をつかれた。

そうだ、教師がいない。

ケン太はユミとエミを見た。

ふたりとも宇土の指摘に納得している。

よし、とケン太はうなずいた。

「宇土さん」

宇土は背筋をのばした。喜色はその顔に浮かぶ。

「お任せします」

ケン太は頭を下げた。

プロジェクトが動き出した。

CDデビューにこんなに多くの人々が関わることになるとはケン太は思ってもいなかった。

毎日ケン太とセイントカイン、それにユミとエミの八人は宇土に連れまわされ、さまざまなスタッフと顔合わせを続けた。

そして練習の日々。

録音がすみ、ようやくCDの発売日が近づいてきた。

その間、宇土は宣伝のためだと言ってテレビやラジオに一同を引っ張りまわし、ディレクターやプロデューサーに会わせていった。よろしくお願いしますと頭を下げるケン太たちを迎えるかれらはやや冷淡とっていい対応を見せた。

宇土はなに、あんなものです。あんたらの人気が出れば手の平をかえたようになりますぜ、と元氣付けた。

きっかけはあるテレビのワン・コーナーで曲を披露したあとだった。

放映が終わった瞬間、そのテレビ局に一斉に問い合わせの電話が殺到したのである。

その反応を見て、宇土はしてやったりといった表情になった。両手を擦り合わせ、満面の笑みを浮かべる。

「思ったとおりです、絶対いけますって！」

次の日から全員目が回る忙しさに投げ込まれた。

毎日テレビやラジオに出演させられ、雑誌のインタビューを受け、写真を撮られた。

そんな日々にケン太はじょじょに苛立ちを覚え始めた。

「こんなこと続けていいのかなあ……」

ほかの七人はケン太の言葉に顔を見合わせた。

テレビ局の控え室でケン太はぐったりと椅子によりかかりつぶやいたのである。

「こんなことって、なんですか？」

ユミが尋ねた。

ケン太は顔をあげた。

「毎日、テレビ局やラジオ局に引っ張りまわされてさ、高校に通う暇もない。おれたち、高校生なんだぜ」

いつの間にかケン太は自分のことをおれと言うようになっていた。「きみら、ちかごろ赤星高校に顔をだしたかい？ 校長先生はどうしてる？」

ユミとエミはあつ、と叫んだ。

「いけなあい！」

「忘れていたわ！」

ケン太は立ち上がった。

「みんな、いまからでも行かないか？」

セイント・レッドの英雄が声をあげた。

「こんな時間に？」

控え室の壁にかけられている時計を見上げる。時刻は夕方をまわっている。

「いまからなら時間があるだろう？ おれひとりでも行ってみるよ」
さつさとドアに近づいた。

あわててユミとエミがその後続いた。

「まって、ケン太さん。あたしたちも！」

セイントカインたちは顔を見合わせた。

「しかたないなあ……」

立ち上がる。

そこへ宇土がやってきた。

「あれ、みなさん。どうしました？」

ケン太がこれから赤星高校へ向かうと話すと、かれはあわてた。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。これから高校へたって、何時だと思っているんです？ それに明日はコンサートの打ち合わせがあるんですよ！」

「とにかく、今日はこれまでにしてくれ！」

ケン太が大声を出した。

宇土は絶句した。

ケン太が大声を出すとは思ってもいなかったからだ。

ぼう然と立ち尽くす宇土を尻目に、ケン太はほかの全員を連れてテレビ局を飛び出した。

深夜の赤星高校は静まりかえっている。
校門をくぐり、校舎の裏へ。

赤星高校の校長室のあるプレハブに近づく。

「明かりがついているぞ」

プレハブの窓を見てだれかが声をあげた。

たしかに校長室があるプレハブの窓は明るい。

ケン太はプレハブのドアに手をかけた。

開いた。

すぐ入ったところが土間になっていて、へつついがあって三土和につづく。上がりかまちの障子の向こうが明るい。

障子を開いてケン太は声をかけた。

「今晚は……」

ケン太は息をのんだ。

「だれもない」

「えっ！」

ケン太の言葉にユミとエミは目をまるくした。

背後から覗き込んだふたりは顔を見合わせた。

「本当……校長先生がいないわ」

三畳間はさっぱりとかたづき、布団もたたまれ押入れに入れられている。ちいさな卓袱台がその代わりに置かれ、封筒があった。

ユミとエミはケン太を押しつけ、部屋にはいりこんだ。

卓袱台の封筒をとりあげた。

ケン太を見る。

「ケン太さんにです」

「おれに？」

封筒を受け取り、ためすがえす眺めた。

おもてに「ケン太くんへ」と校長の手であるのか、達筆な筆さばきで書かれてあった。ケン太は封筒を開いた。

「読んでみてくれないか」

セイントカインのひとりが言った。

ケン太はうなずき、声を出して読み始めた。

「ケン太くん、そしてユミとエミ。セイントカインの諸君。色々有

難う。きみらのおかげで赤星高校には続々と入学希望者が願書を出してくれた。

しかし諸君も知つての通り、わが校には教師が不足している。いや、ひとりもないと言つたほうが正しい。それでわたしはこの現狀を打破するべく、教師募集をすることにした。が、ただの教師ではいまの赤星高校には勤まらないだろう。

なぜなら万石高校のタツヲが狙っているからだ。

不良生徒の脅迫にも屈せず、教育への情熱を持った教師でなくてはならない。

そんな教師を探すため、わたしは暫く高校を離れることになる。みんなには迷惑をかけることになるが、どうか赤星高校のことを頼む」

手紙を読み終わり、ケン太は顔をあげた。

ぼう然とユミとエミ、セイントカインたちが見つめている。

「入学希望者がいるって、書いていたわね」

ユミがつぶやいた。

開いた校長の手紙の紙から、はらりともう一通の紙が床に落ちた。拾い上げたエミは叫んだ。

「これ、入学希望者のリストよ！　すごい、百人以上いるわ！」

ケン太はもう一度手紙の文面に目を落とした。

「待ってくれ、追伸がある」

「追伸？」

「こうだ……いいかい、読むよ……追伸、タツヲに気をつける。タツヲは闇のガ克蘭の着用者である！」

「闇のガ克蘭？」

ユミがつぶやいた。

「なにかしら？」

エミが応じる。

わからない……とケン太はつぶやいた。
しかし気になる響きだ。

闇のガクラン……。
ケン太にはタツヲとの決戦が近づいている予感がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9271c/>

バンチョウ！

2010年10月10日16時11分発行